

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第150集

田  
井  
中  
遺  
跡

八尾市

# 田井中遺跡

陸上自衛隊八尾駐屯地内警衛所及び浴場新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇六年十二月

財団法人  
大阪府文化財センター

2006年12月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第150集

八尾市

# 田井中遺跡

陸上自衛隊八尾駐屯地内警衛所及び浴場新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター





土器棺に使用された土器（埋設状態の復原、22土器棺墓）



# 序 文

田井中遺跡は、大阪を流れる二大河川の旧大和川と淀川によって形作られた河内平野の南東部に位置し、東西・南北ともおよそ900mの広がりをもつ縄文時代から近世までの複合遺跡です。江戸時代以来、遺跡の北部域は民家が軒を連ねる居住の場・南部域は水田が広がる生産の場として利用され、「田井中」の暮らしが営まれてきました。今では、北部域には新しい住宅が建ち並び、南部域には八尾空港や陸上自衛隊八尾駐屯地が設けられ、小型飛行機やヘリコプターが飛び交うようになりました。

言うまでもなく、河内平野には先人の暮らしの息吹を伝える数多くの遺跡が遺されており、古くから発掘調査が行われてまいりました。とりわけ、昭和50年前後に始まった近畿自動車道の建設工事に伴う発掘調査は、遺跡から膨大な量の情報をもたらし、それによって、主に弥生時代以降の先人の暮らしが明らかになりました。それらの資料は、大阪の歴史にとどまらず、広く列島の原始・古代史の解明を飛躍的に推し進めることになりました。田井中の地でも、こうした時期にあたる昭和50年、八尾駐屯地内の工事で弥生土器が発見され、遺跡の存在が知られるようになりました。

以来、遺跡の南部域を中心に発掘調査が行われ、時期によって居住の場が移り変わる様子、居住の場とは距離をおいた墓地の様子、集落の周辺に広がった土地での生産の様子など、主に弥生時代前期のムラの仕組みやヒトビトの暮らしぶりが明らかになってきています。今回の発掘調査でも、2つの調査区で弥生時代の墓域や水田を確認することができ、その成果は、田井中遺跡の理解を深めることに大きく寄与するものと確信しています。

同時に、地域の歴史を明らかにし、理解することは、地域の結びつきが弱くなり、孤立化が進む現代の人々を再び結びつける紐帯となり、地域の将来像を見据える指針のひとつになるものと考えます。そのためにも普及活動の重要性を痛感するとともに、今回の調査成果が地域における日々の暮らしの中で活用されるよう願っています。

なお、調査に際しては大阪府教育委員会、大阪防衛施設局、陸上自衛隊八尾駐屯地、地元町会をはじめとする関係各位より、多大なるご指導・ご協力を賜りました。最後になりましたが、記して心より感謝の意を表します。

平成18年12月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野正好



# 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市空港1丁目に所在する田井中遺跡（その4）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、陸上自衛隊八尾駐屯地の施設整備工事に伴い、大阪防衛施設局から委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 現地調査および遺物整理作業に関わる受託契約と実施期間は以下のとおりである。

調査名 田井中遺跡05-1

受託事業名 八尾（17）警衛所及び浴場新設に伴う埋蔵文化財発掘調査

受託契約期間 平成17年10月1日～平成18年12月25日

工事請負期間 平成17年10月14日～平成18年3月31日

整理作業期間 平成18年4月1日～平成18年12月25日

4. 発掘調査および整理作業は以下の体制で実施した。

調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘 調整係長 芝野圭之助（平成18年3月31日まで）、調整第一係長 岡戸哲紀（同年4月1日から） 主査 山上 弘（同年3月31日まで、同年4月1日から調整第二係長） 技師 信田真美世（同年3月31日まで）、後川恵太郎（同年4月1日から）

南部調査事務所長 藤田憲司（同年3月31日まで）、大野 薫（同年4月1日から）

調査担当 調査第三係長 岡本茂史 主査 桑野一幸 専門調査員 野瀧美沙子（同年3月31日まで、現三重県埋蔵文化財センター）

5. 調査の実施にあたっては、陸上自衛隊八尾駐屯地業務隊営繕班の方々から多大な協力を頂きました。記して感謝の意を表します。
6. 本書で用いた現地写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影に関しては、南部調査事務所主任技師 立花正治が担当した。
7. 本書の執筆・編集は、桑野が行った。
8. 出土遺物ならびに実測図、写真などの各種資料は、財団法人大阪府文化財センターで保管している。



# 凡 例

1. 現地調査における遺構実測図等の標高は、すべて東京湾平均海水位 (= T.P.) + 値を用いているが、本書における記載では「T.P.+」は省略している。
2. 現地調査においては世界測地系 (測地成果2000) を使用し、座標値の単位はmであるが、本書に掲載した遺構図には単位を省略し数値のみを記載した。
3. 本書に掲載した遺構図の方位は、すべて国土座標に基づく座標北を示している。また遺跡周辺の真北は座標北からN 0° 13' 26" Eに、磁北は真北からN 6° 50' 00" Wに偏位している。
4. 現地調査および遺物整理の方法は、(財)大阪府文化財センターによる『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』(2003)に準拠した。なお、遺物取り上げ等に使用した地区割り方法は第I章・第2節に詳述したが、第I区画と第II区画については、05-1-1調査区はG 6-2区、05-1-2調査区はG 6-3区に相当する。
5. 本書で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』2003年版(農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修)を基準としている。なお、その記載順序は色名・記号・土質名とする。
6. 本書で使用した遺構番号は、遺構の種類とは関係なく、調査時において検出順に付与した連続番号であり、遺構の種類の前に番号を付して「26土坑」などと表記した。
7. 本書で使用した遺物番号は、挿図・写真図版とも一致する通し番号である。なお、遺物の掲載方法については、挿図では主に層位・遺構を単位として、写真図版では主に種類・器種・文様種を単位とした。
8. 本書に掲載した遺物の縮尺は、主として土器実測図が4分の1、土器拓本図・石器実測図・土製品実測図が2分の1である。
9. 弥生土器の記述にあたっては、主に〔寺沢・森井1989〕を参考とした。また弥生土器の胎土は、石英・長石・チャート粒を含む在地のものが主であるが、わずかに角閃石・雲母粒を比較的多く含むものがあり(生駒西麓産)、これについては文章で記述し区別した。

# 目 次

巻頭図版

序文

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 調査の経過と方法	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 発掘調査の方法	2
第Ⅱ章 位置と環境	5
第1節 位置と地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 05-1-1 調査区の調査成果	9
第1節 基本層序と遺構面	9
第2節 遺構	11
溜池 第1面 第2面 第3面 第4面 第5面 第6面	
第3節 遺物	27
2層出土の土器 3層出土の土器 4層出土の土器 5層出土の土器 6層出土の土器 第4 面遺構出土の土器 第5面遺構出土の土器 第6面遺構(22土器棺墓)出土の土器 第6面遺構 (ピット)出土の土器 第6面遺構(土坑)出土の土器 第6面遺構(落ち込み)出土の土器 第6 面遺構(溝)出土の土器 攪乱層出土の土器 石器 土製品	
第Ⅳ章 05-1-2 調査区の調査結果	60
第1節 基本層序と遺構面	60
第2節 遺構	62
第1面 第2面 第3面 第4面 第5面 第6面 第7面 第8面	
第3節 遺物	69
第Ⅴ章 まとめ	73
第1節 05-1-1 調査区	73
第2節 05-1-2 調査区	75

参考文献

写真図版

報告書抄録

# 巻頭図版目次

巻頭図版 土器棺に使用された土器（埋設状態の復原、22土器棺墓）

## 挿図目次

- |     |                      |            |                          |                             |
|-----|----------------------|------------|--------------------------|-----------------------------|
| 図1  | 遺跡位置図                | 図30        | 05-1-1 調査区               | 5層出土の土器（3）                  |
| 図2  | 調査区位置図               | 図31        | 05-1-1 調査区               | 5層出土の土器（4）                  |
| 図3  | 地区割の方法               | 図32        | 05-1-1 調査区               | 5層出土の土器（5）、6層出土の土器          |
| 図4  | 調査区地区割図              | 図33        | 05-1-1 調査区               | 第4面・第5面遺構出土の土器              |
| 図5  | 田井中遺跡周辺の地形分類         | 図34        | 05-1-1 調査区               | 22土器棺墓で使用された土器              |
| 図6  | 田井中遺跡周辺遺跡分布図         | 図35        | 05-1-1 調査区               | 第6面ピット出土の土器                 |
| 図7  | 田井中・志紀遺跡既調査区位置図      | 図36        | 05-1-1 調査区               | 第6面土坑出土の土器（1）               |
| 図8  | 05-1-1 調査区 土層断面図     | 図37        | 05-1-1 調査区               | 第6面土坑出土の土器（2）               |
| 図9  | 溜池跡 全体図              | 図38        | 05-1-1 調査区               | 第6面落ち込み出土の土器                |
| 図10 | 第1～4面 全体図            | 図39        | 05-1-1 調査区               | 第6面溝出土の土器（1）                |
| 図11 | 3層9d-IV区 土器出土状況図     | 図40        | 05-1-1 調査区               | 第6面溝出土の土器（2）                |
| 図12 | 5土坑 平面・断面図           | 図41        | 05-1-1 調査区               | 攪乱層出土の土器（1）                 |
| 図13 | 3・6・7ピット 平面・断面図      | 図42        | 05-1-1 調査区               | 攪乱層出土の土器（2）                 |
| 図14 | 第5面 全体図              | 図43        | 05-1-1 調査区               | 攪乱層出土の土器（3）                 |
| 図15 | 8・9溝 断面図             | 図44        | 05-1-1 調査区               | 石器（1）                       |
| 図16 | 12・13溝 平面・断面図        | 図45        | 05-1-1 調査区               | 石器（2）                       |
| 図17 | 10土坑 平面・断面図          | 図46        | 05-1-1 調査区               | 土製品                         |
| 図18 | 第6面 全体図              | 図47        | 05-1-2 調査区               | 土層断面図                       |
| 図19 | 22土器棺墓 平面・断面図        | 図48        | 第1・3～5面 全体図              |                             |
| 図20 | 第6面の土坑、ピット（1） 平面・断面図 | 図49        | 第4・5・6面のピット 平面・断面図       |                             |
| 図21 | 第6面の土坑、ピット（2） 平面・断面図 | 図50        | 15・16溝 断面図               |                             |
| 図22 | 第6面の土坑、ピット（3） 平面・断面図 | 図51        | 第6～8面 全体図                |                             |
| 図23 | 57溝 平面・断面図           | 図52        | 18大溝 断面図                 |                             |
| 図24 | 28溝 平面・断面図           | 図53        | 19溝・20畦畔、21溝・22畦畔 平面・断面図 |                             |
| 図25 | 29・59溝 平面・断面図        | 図54        | 05-1-2 調査区               | 土器、石器、瓦                     |
| 図26 | 05-1-1 調査区           | 3層出土の土器    | 図55                      | 志紀・田井中遺跡における弥生時代前期末葉から中期の溝群 |
| 図27 | 05-1-1 調査区           | 4層出土の土器    |                          |                             |
| 図28 | 05-1-1 調査区           | 5層出土の土器（1） |                          |                             |
| 図29 | 05-1-1 調査区           | 5層出土の土器（2） |                          |                             |

# 挿表目次

表1 05-1-1 調査区出土遺物数量表

表3 05-1-1 調査区出土土製品一覧表

表2 05-1-1 調査区出土石器一覧表

表4 05-1-2 調査区出土遺物数量表

# 写真図版目次

図版1 05-1-1 調査区

1 溜池と木樋（北東から） 2 第1面 畦畔と足跡（北から） 3 第2面 溝と足跡（北から）

図版2 05-1-1 調査区

1 第3面 全景（南から） 2 3層 土師器出土状況（北西から） 3 第4面 5土坑（南西から）

図版3 05-1-1 調査区

1 第5面 全景（南から） 2 8・9溝（南東から）

図版4 05-1-1 調査区

1 8・9溝 埋没状況（南東から） 2 10土坑 石包丁（南から） 3 第5面 4層の掘り込み状況（北東から）

図版5 05-1-1 調査区

1 第6面 全景（南から） 2 22土器棺墓 土器棺（南西から）

図版6 05-1-1 調査区

1 22土器棺墓 全景（南西から） 2 22土器棺墓 土器棺（東から） 3 22土器棺墓 棺蓋を外したところ（南から）

図版7 05-1-1 調査区

1 28溝 広口壺出土状況（北から） 2 57溝 広口壺出土状況（北西から） 3 57溝 小形鉢出土状況（西から）

図版8 05-1-1 調査区

1 26土坑 広口壺出土状況（南西から） 2 60土坑 弥生土器出土状況（北から） 3 63土坑 匙形土製品（南から）

図版9 遺物

3層（10、12、7、9、11）、5土坑（159）

図版10 遺物

5土坑（157）、22土器棺墓（165、166）、57溝（259、261、262）

図版11 遺物

5層（59、60）、26土坑（186）、28溝（254、255）、攪乱層（288）

図版12 遺物

5層（55、57）、52（189）・60（196）土坑、14（160）・57（260）・62（270）溝、攪乱層（287、289）

図版13 遺物

- 1 弥生土器—壺の文様（削出突帯）      2 弥生土器—壺の文様（削出突帯、沈線）

図版14 遺物

- 1 弥生土器—壺の文様（貼付突帯、沈線）      2 弥生土器—壺の文様（削出突帯、貼付突帯、沈線、櫛描、刺突、突起）

図版15 遺物

- 30土坑（187）、45落ち込み（230）、28溝（256）、攪乱層（292～295、297）

図版16 遺物

- 1 弥生土器—甕の文様（刻目、段、沈線）      2 弥生土器—甕、鉢の文様（刻目、沈線、刺突、把手）

図版17 遺物

- 1 弥生土器（壺、鉢の口縁部）      2 匙形土製品      3 弥生土器（底部）

図版18 遺物

- 1 石器（石鏃、尖頭器、石錐未製品）      2 石器（石鎌形石器、削器、楔形石器、剥片）

図版19 遺物

- 1 石器（石核）      2 石器（剥片、磨製石斧、石包丁）

図版20 遺物

- 1 縄文土器（刻目突帯文土器口縁部）      2 縄文土器（刻目突帯文土器体部）、輪状土製品（366）

図版21 05-1-2 調査区

- 1 第1面 畦畔（北から）      2 第4面 ピット群（北から）      3 第6面 15・16溝（北から）

図版22 05-1-2 調査区

- 1 第7面 18大溝（北から）      2 18大溝 埋没状況（北西から）

図版23 05-1-2 調査区

- 1 第7面 植物遺体（西から）      2 第7面 19溝と20畦畔（北から）      3 第8面 21溝と22畦畔（北から）

図版24 遺物

- 1 0層出土の土器（瓦器皿・椀、土師器小型壺、須恵器蓋坏）      2 5層・18大溝出土の弥生土器

# 第I章 調査の経過と方法

## 第1節 調査に至る経緯と経過

田井中遺跡は大阪府八尾市の南部にあり、府域のほぼ中央部を占める河内平野の南東部に所在する縄文時代～近世までの複合遺跡である（図1）。遺跡範囲は国土交通省が設置・管理する八尾空港の北東部に広がり、東西・南北とも長さ約900mを測る。遺跡の北部は旧田井中村の集落部にあたり、遺跡の南部は八尾空港・陸上自衛隊八尾駐屯地・大阪府警航空隊の敷地が占め、また遺跡の南西辺には旧大和川の一つである平野川が流れている。

今回の調査は、大阪防衛施設局による陸上自衛隊八尾駐屯地の警衛所および浴場新設工事に伴う発掘調査である。こうした八尾駐屯地の施設整備に伴う発掘調査は、古くは1982年に（財）八尾市文化財調査研究会が実施した1次調査に遡り、同研究会および八尾市教育委員会によって1993年までに10数回の調査が行われた。その後大阪防衛施設局と大阪府教育委員会の協議によって、隊舎・体育館厚生センター・整備格納庫および付帯施設・官舎の建設に伴い、1994年度には（財）大阪府埋蔵文化財協会が、1995～1996年度には（財）大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を実施した（田井中遺跡1～3次）。この3年度に亘る調査の成果については1997年に刊行された調査報告書に詳しく報告されている。

なお田井中遺跡では、こうした八尾駐屯地内の発掘調査とは別に、遺跡南西辺に当たる八尾空港北濠・平野川の改修工事に伴い大阪府教育委員会が調査を実施している。

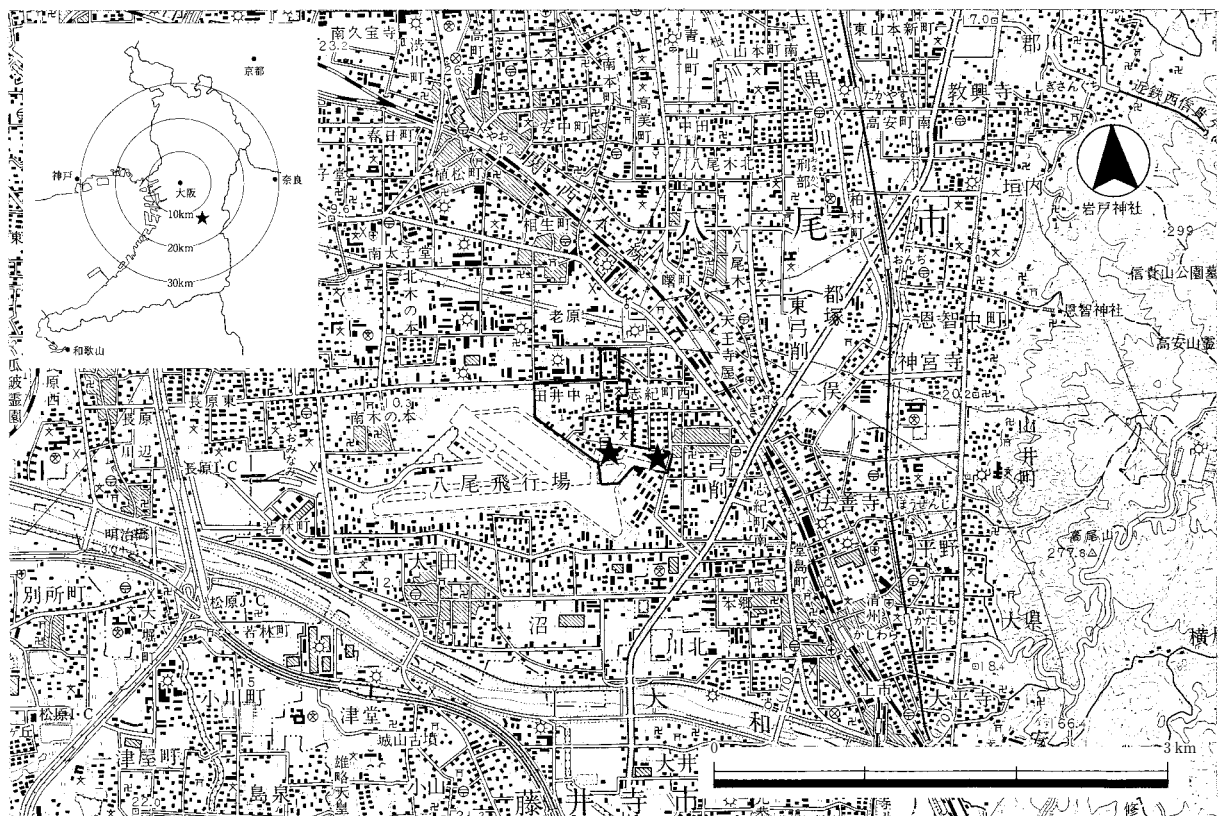


図1 遺跡位置図（国土地理院 1：50,000地形図を改変）

## 第1節 調査に至る経緯と経過

さて2005年度の調査（田井中遺跡その4）は、八尾駐屯地正門東側の05-1-1調査区と駐屯地北東隅の05-1-2調査区の2ヶ所であり、両調査区の間はおおよそ400m離れている（図2）。いずれも調査予定深度は約3mに達するため、土留め用の鋼矢板を圧入して調査を実施した。

05-1-1調査区の現状は植栽と張り芝による広場である。調査区の形状は、当初は東西24m・南北12mの長方形であったが、鋼矢板圧入の際にコンクリート基礎の残塊が存在し、これを回避して圧入したため北辺の一部でわずかに南側に入り込むことになった。機械掘削は2005年11月29日から実施し、機械掘削終了後の12月5日から人力掘削を開始した。当調査区は近・現代に利用されていた灌漑用溜池の跡地と重複する部分が多い上に、予想以上に激しい湧水によって土砂の流失も度重なり、遺物・遺構が良好な状態で遺存していたとはいえない状況であったが、最終的には6つの遺構面と弥生時代前期の土器棺墓などを検出し、2006年2月2日に調査を終了した。調査面積は286㎡であった。

05-1-2調査区は、駐屯地正門と東門を結ぶ道路脇の空き地であり、建物撤去後の更地および駐車場・駐輪場等として利用されていた。地表面の標高は12.1~12.2mを測り、05-1-1調査区と比較すると50cm程高くなっている。なお調査区のすぐ東側は大阪府警航空隊の敷地である。調査区の形状は、当初は12m四方の正方形を予定していたが、ここでも鋼矢板圧入途上で埋置されたコンクリート塊に遭遇し、これを回避したために南東隅が内側に屈曲することになった。機械掘削は2006年2月6日から実施し、機械掘削終了後の2月9日から人力掘削を開始した。調査では8つの遺構面と弥生時代中期の大溝などを検出し、3月20日に終了した。調査面積は142㎡であった。

なお両調査区の整理作業と報告書作成作業は、発掘調査終了後の2006年度から行い、2006年12月の本報告書の刊行をもって全て終了した。

## 第2節 発掘調査の方法

発掘調査の実施に当たっては、基本的に2003年刊行の『(財)大阪府文化財センター 遺跡調査基本マ

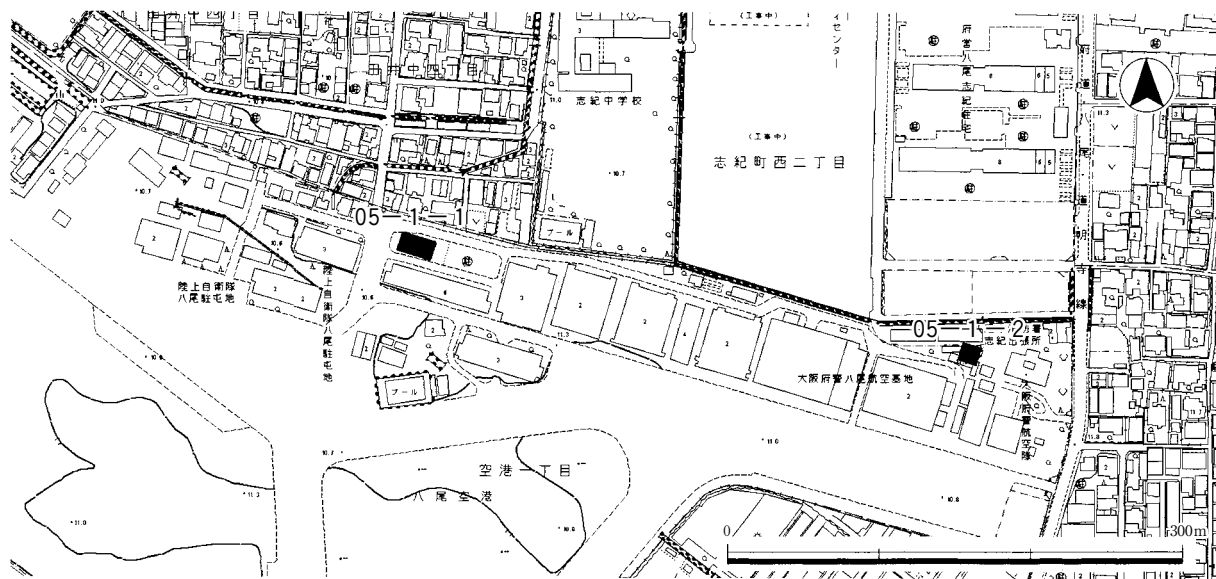


図2 調査区位置図（註）

ニューアル【暫定版】』に従った。

まず調査区の呼称については、受託年度（西暦の下 2 桁）－発注番号（発注順）－調査区番号（調査順）を組み合わせで表記し、始めに調査を開始した駐屯地正門近くの調査区を 05-1-1 調査区、続いて調査を実施した駐屯地東端の調査区を 05-1-2 調査区とした。

調査区の地区割りについては、基準線として国土座標軸（世界測地系）を利用し、第 VI 座標系に基づく数値を使用した。区割りは、以下に示す大（第 I 区画）～小（第 VI 区画）への 6 段階区画のうち、今回の調査では第 I～第 V 区画までを使用した（図 3）。

第 I 区画：大阪府の南西端  $X = -192000\text{m}$ ・ $Y = -88000\text{m}$  を基準とし、縦 6 km、横 8 km で区画する。

表示は縦軸 A～O、横軸 0～8 で表示。表示方法は縦・横の順。

第 II 区画：第 I 区画を縦 1.5 km、横 2.0 km でそれぞれ 4 分割し、計 16 区画を設定。南西端を 1 とし、東へ 4 まで、あとは西端を 5、9、13 北東端を 16 とする平行式の地区名表示。

第 III 区画：第 II 区画を 100 m 単位で区画。縦 15、横 20。表示は北東端を基点に縦 A～O、横 1～20。表示方法は横・縦の順。

第 IV 区画：第 III 区画を 10 m 単位で区画。縦、横各 10。表示は北東端を基点に縦 a～j、横 1～10。表示方法は横・縦の順。

第 V 区画：第 IV 区画内を 5 m 単位で区画。縦・横各 2。表示は北東側 I、北西側 II、南東側 III、南西側 IV。

第 VI 区画：第 IV 区画内を、北東端を基点にして西へは  $W + \bigcirc\text{m}\bigcirc\text{cm}\bigcirc\text{mm}$ 、 $S + \bigcirc\text{m}\bigcirc\text{cm}\bigcirc\text{mm}$  と必要な桁まで表示。また、 $W 1\text{m}$ 、 $W 2\text{m}$ ・・・、 $S 1\text{m}$ 、 $S 2\text{m}$ ・・・のようにしてより微細な区画割も設定可能である。

これによって今回の調査区を第 III 区画まで示すと、05-1-1 調査区は G 6-2-2 I 区画、05-1-2 調査区は G 6-3-19 I・J 区画に相当する（図 4）。

実際の発掘調査は、まず近・現代の整地土を重機で取り除き、05-1-1 調査区では溜池底の堆積土層および近世の耕作土層以下を、05-1-2 調査区では中世とされる洪水砂層以下を人力で掘削した。また調査区の基本層序を観察するため、両調査区ともに、排水を目的に北・西辺に沿って掘削した側溝の壁面を利用することにした。しかし 05-1-1 調査区については、東部～中央部の地区で重機により整地層を除去した段階で既に湧水層に達したため、人力掘削当初から側溝壁面が瞬く間に崩壊する事態に直面した。そこで次善の方法として、湧水の影響が比較的少なかった調査区北辺西部と西辺の側溝、および調査区東辺下層側溝の壁面を利用して基本層序の観察・記録を行うことにした。

検出した遺構の測量に関しては、各遺構面の平面図を平板測量により縮尺 50 分の 1 で作成し、検出遺構が多数あるいは詳細な地形復元が必要な遺構面に関しては、トラッククレーン撮影による航空測量を実施した。なお個々の遺構については、必要に応じて縮尺 5 分の 1、10 分の 1、20 分の 1 で平面図・断面図・立面図等を作成した。

遺物の取り上げについては、基本的には 5 m 四方である第 V 区画毎に行った。また特に必要な遺物に関しては個別に座標・標高を測量した。

## 註

この地図は、大阪府が平成 11～13 年にかけて作成した大阪府ベクトル地形図 1/2500 を縮小・編集したものである。



第2節 発掘調査の方法

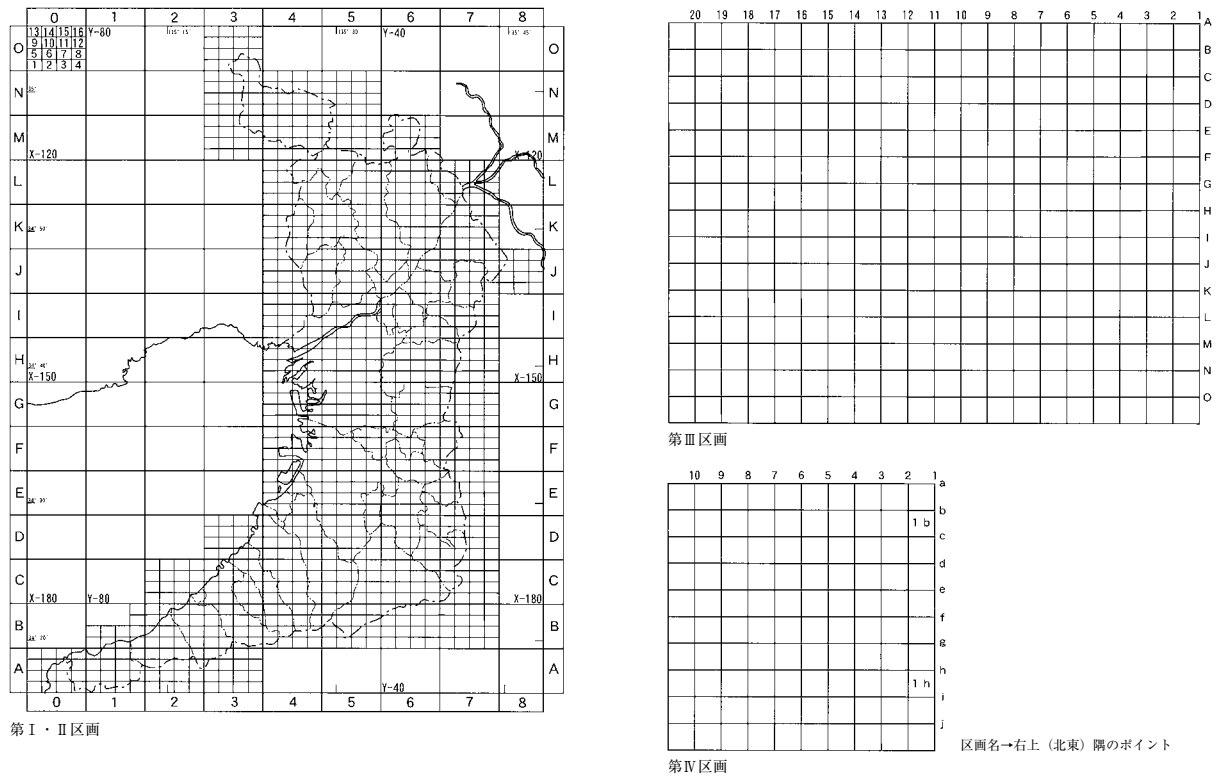


図3 地区割の方法

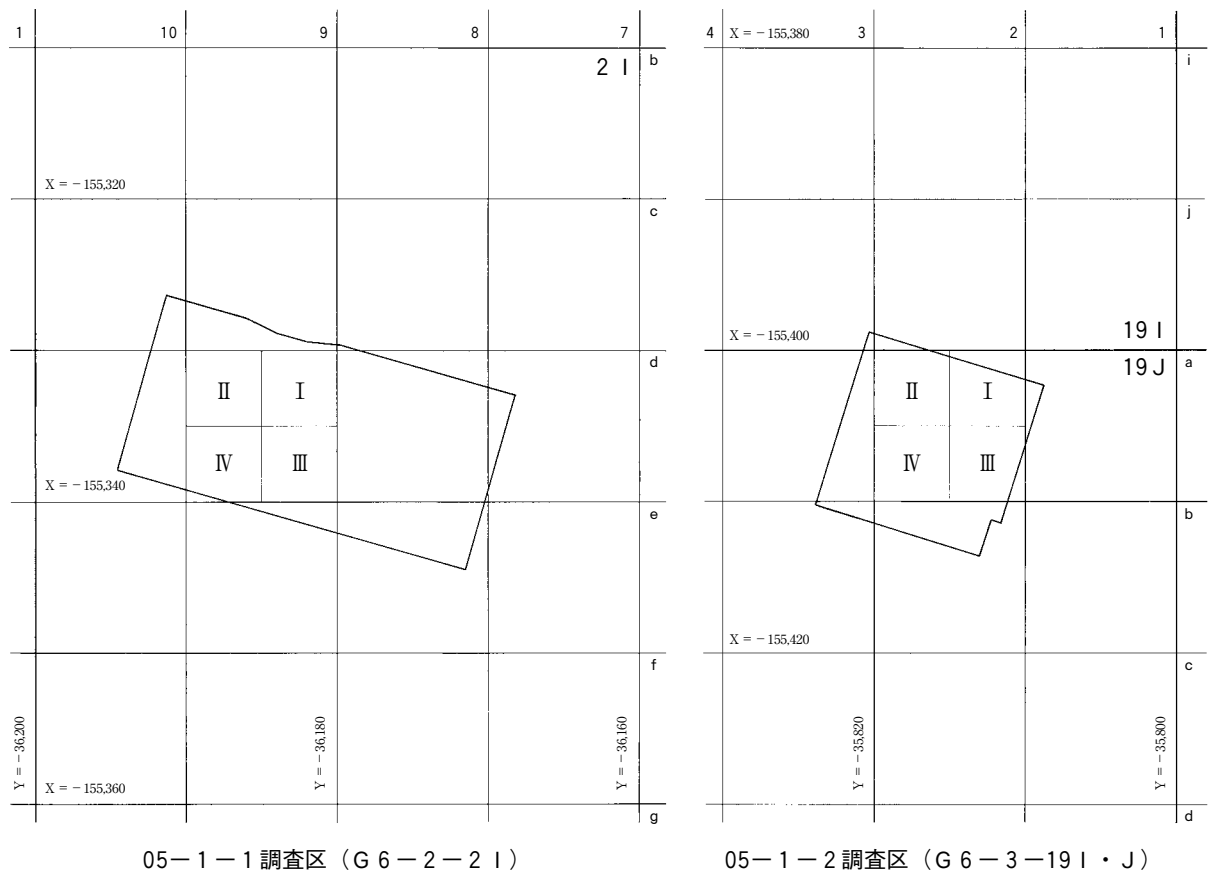


図4 調査区地区割図

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 第1節 位置と地理的環境

田井中遺跡は、八尾市田井中1～4丁目・志紀町西2丁目・空港1丁目に所在し、地形的には東を生駒山地・南を羽曳野丘陵・西を上町台地で囲まれた河内平野の南東部に位置している。主に弥生時代以降の数多くの遺跡が遺されたこの河内平野は、縄文時代以来の海退現象と旧大和川を中心とする諸河川が運ぶ土砂の堆積作用によって形成された沖積平野である。

現在の和歌山県大和川は、奈良県北部から生駒山地の狭隘部（亀瀬峡谷）を抜けて大阪に入り、柏原市で南河内地域を北流する石川と合流、ここで流れる方向を西に転換して河内平野の南縁を西流し、大阪市と堺市の間で大阪湾に注ぐ1704年（宝永元年）の改流工事による人工河川である（新大和川）。それ以前は石川と合流して北西に流れ、八尾市二俣の地で長瀬川と玉串川に分流し、さらに一部は河内平野北東部の深野池や新開池を貫流しながら、最終的には淀川と合流して大阪湾に注いでいた（旧大和川）。さらに歴史を遡れば、7～9世紀には八尾市植松付近で長瀬川から分流する平野川筋が本流であったともいわれている〔阪田1997〕。だとすれば、例えば古代の土木工事として有名な和気清麻呂の「河内川」放水路工事も（『続日本紀』延暦7年3月条）、この平野川筋を本流とする大和川を対象にしたものと考えられることになる。

田井中遺跡は、こうした旧大和川の本流である長瀬川左岸の沖積低地に立地しており、標高は12m前後で南側がやや高い。そして、東側と西側を長瀬川や東除川が形成した自然堤防、南側を羽曳野丘陵で画された後背湿地（氾濫原）の下に埋没している（図5）。

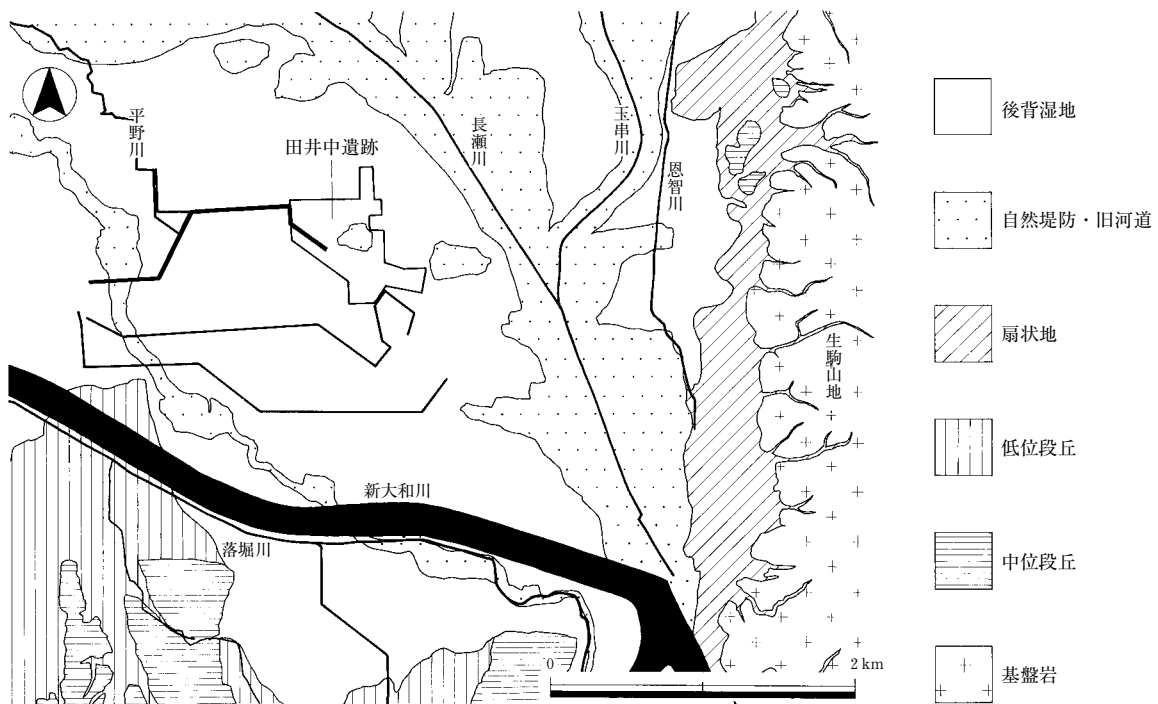
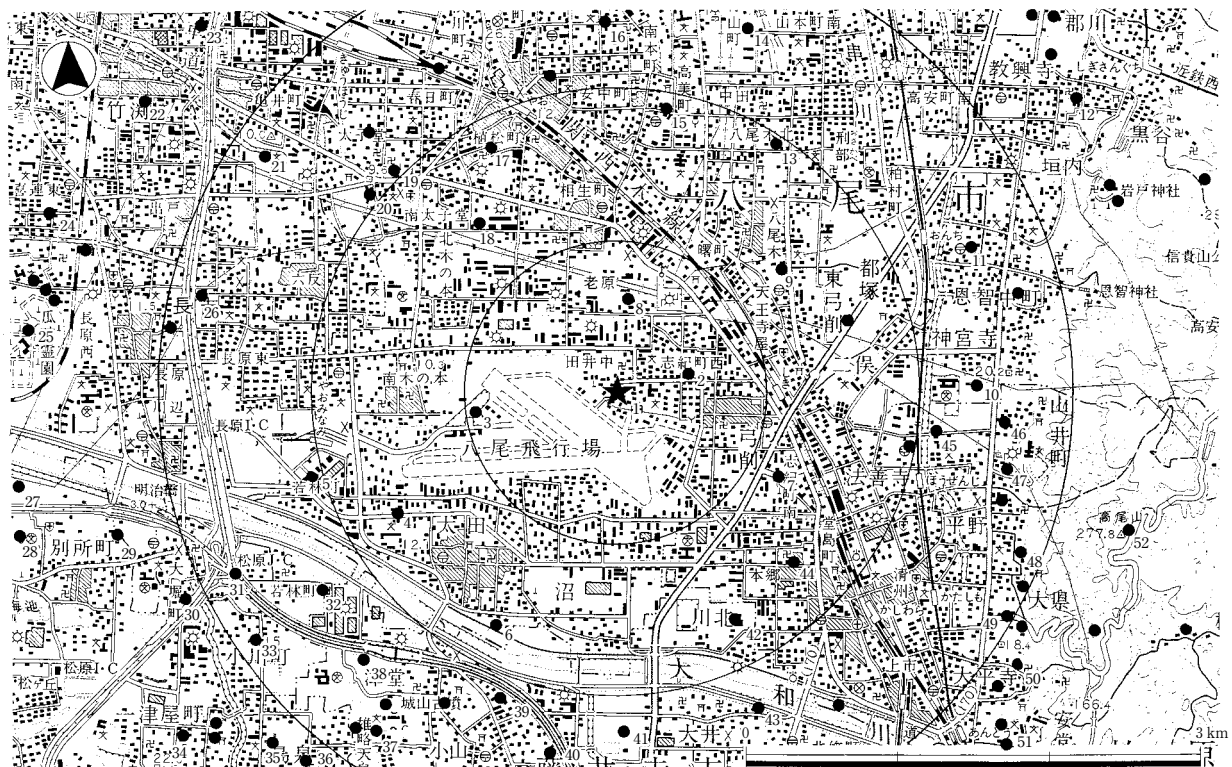


図5 田井中遺跡周辺の地形分類（〔別所2002〕図420をもとに作成）

## 第2節 歴史的環境

田井中遺跡の位置する河内平野東南部には、特に平野部の開発が進む弥生時代以来数多くの遺跡が密集しており、田井中遺跡の歴史的動向を理解する上で、周辺遺跡との関連を視野に入れて検討することが重要である。ただし、河内平野における弥生・古墳時代の遺跡の動向については、これまでも様々な研究視点で論述されており、また田井中遺跡についても、隣接する志紀・木の本遺跡との関連を探りながら精緻な歴史的検討が加えられている〔米田1997、駒井1997c、亀島1999、市村2002、横田2004など〕。ここでは、これらの研究を参考にしながら、田井中遺跡および周辺遺跡の既往の調査成果について、今回の調査で多くの遺物・遺構が検出された弥生時代を中心に簡単に紹介しておきたい。

田井中遺跡から1km圏には、南西方向に隣接して弥生時代に始まり古墳時代の集落を中心とした木の本遺跡、北東方向に隣接して弥生時代から古代の水田が継続的に営まれた志紀遺跡がある（図6）。一集落における居住域の歴史的移動、あるいは居住域と生産域を含めた集落の実態的把握など、田井中遺跡のみならず地域社会を歴史的に理解する上で、これら2遺跡の発掘調査成果は今後ますます重要なものとなるだろう。



- |          |          |               |           |            |
|----------|----------|---------------|-----------|------------|
| (八尾市)    | 12 郡川遺跡  | (大阪市)         | 33 小川遺跡   | 43 船橋遺跡    |
| 1 田井中遺跡  | 13 中田遺跡  | 23 亀井北(加美南)遺跡 | 34 一津屋町遺跡 | (柏原市)      |
| 2 志紀遺跡   | 14 小阪合遺跡 | 24 喜連東遺跡      | (羽曳野市)    | 44 本郷遺跡    |
| 3 木の本遺跡  | 15 矢作遺跡  | 25 瓜破遺跡       | 35 鳥泉北遺跡  | 45 大県郡条里遺跡 |
| 4 太田遺跡   | 16 成法寺遺跡 | 26 長原遺跡       | 36 鳥泉遺跡   | 46 山ノ井遺跡   |
| 5 八尾南遺跡  | 17 植松遺跡  | (松原市)         | (藤井寺市)    | 47 平野遺跡    |
| 6 大正橋遺跡  | 18 植松南遺跡 | 27 三宅東遺跡      | 37 小山遺跡   | 48 大県遺跡    |
| 7 弓削遺跡   | 19 跡部遺跡  | 28 蔵重遺跡       | 38 津堂遺跡   | 49 大県南遺跡   |
| 8 老原遺跡   | 20 太子堂遺跡 | 29 別所遺跡       | 39 小山平塚遺跡 | 50 大平寺遺跡   |
| 9 東弓削遺跡  | 21 亀井遺跡  | 30 大堀遺跡       | 40 藤の里遺跡  | 51 安堂遺跡    |
| 10 神宮寺遺跡 | 22 竹洲遺跡  | 31 屋後遺跡       | 41 西大井遺跡  | 52 高尾山山頂遺跡 |
| 11 恩智遺跡  |          | 32 若林遺跡       | 42 川北遺跡   |            |

図6 田井中遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院 1:50,000地形図を改変)

田井中遺跡から2 km圏では、旧大和川の本流にあたる長瀬川と玉串川に挟まれた沖積低地に東弓削・中田・矢作遺跡など、田井中遺跡と同じ長瀬川左岸に川北・本郷・弓削・植松・植松南遺跡など、羽曳野台地北縁部近くに太田・大正橋遺跡などが認められる。もちろん様々な時期の遺跡が含まれているが、中田遺跡では田井中遺跡と同じように弥生時代前期に始まる集落の存在が知られている。また本郷遺跡では縄文時代晩期末葉の土器が出土し、東弓削遺跡では弥生時代中期の集落、弓削遺跡では弥生時代後期の集落の存在が明らかになっている。

さらに田井中遺跡から3 km圏になると、田井中遺跡とは地理的環境を異にする遺跡が含まれるとともに、田井中遺跡と同じく縄文時代晩期末葉や弥生時代前期に始まる遺跡も見られるようになる。生駒山地西麓部には恩智・大泉遺跡など、長瀬川と玉串川に挟まれた低地部には小阪合・成法寺遺跡など、長瀬川から平野川筋には跡部・太子堂・亀井遺跡など、羽曳野台地北縁部近くの低地には船橋・西大井・八尾南遺跡など、東除川筋には長原遺跡など、羽曳野台地には小山・津堂・若林遺跡などが認められる。恩智遺跡や大泉遺跡は弥生時代前期あるいは弥生時代中期に始まる集落遺跡であり、弥生時代後期まで継続する。小阪合・成法寺・跡部・亀井遺跡なども弥生時代前期あるいは中期から始まる集落遺跡であり、特に弥生時代中期の亀井遺跡は9重以上の多重環濠をもつ巨大な集落遺跡として知られている。船橋・八尾南・長原遺跡は縄文時代晩期末葉から弥生時代前期前葉に始まる集落遺跡であり、弥生時代に続く古墳時代においても地域の中心的な遺跡として継続する。

さて、こうした遺跡群の中で田井中遺跡はどのような変遷を辿ったのであろう。先に掲げた諸研究に加えて1997年に刊行された報告書も参考にして〔駒井1997 a、駒井1997 c、田坂1997など〕、調査の進んでいる遺跡の南部地域について、遺跡南西辺にあたる「八尾空港北濠・平野川地区」、遺跡南辺にあたる陸上自衛隊八尾駐屯地正門西側の地域である「駐屯地西地区」、同じく正門の東側地域である「駐屯地東地区」と区分し、変遷の概略を紹介しておこう（図7）。

田井中遺跡は、1975年に陸上自衛隊八尾駐屯地内の下水道工事で弥生土器が出土し、その存在が知られるようになった。その後、駐屯地内の施設整備に伴い1980～90年代前半にかけて（財）八尾市文化財調査研究会、1994年に（財）大阪府埋蔵文化財協会、1995～96年には（財）大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を実施している。一方駐屯地の西方にあたる地区では、八尾空港の北濠や平野川の改修工事などに先立って大阪府教育委員会により1988年以来調査が実施されている（図7）。

これらの調査成果を基にして田井中遺跡の変遷を辿ると、まず、最も古い時期では縄文時代後期の土器片が知られている。ただし、発掘調査で検出された住居跡などの遺構を資料として居住の様相が明らかになるのは、縄文時代晩期末葉の刻目突帯文土器の時期からであり、遺跡の北西部（八尾空港北濠・平野川地区の北端部）に居住域がみられるようになる。もっとも、この居住域はさらに北側の八尾市老原遺跡にも広がっていたらしい。続いて弥生時代前期前葉には、環濠を巡らせた居住域が縄文居住域の東側（八尾空港北濠・平野川地区の中央部）に形成される。その後、前期中葉になると居住域はさらに東へ移動し（八尾空港北濠・平野川地区の西端部、駐屯地西地区）、ここで中期から後期にかけての居住域が展開することになる。しかし後期後葉以降の遺物・遺構は極端に少なくなり、弥生集落としての田井中遺跡の衰退が目立つようになる。

こうした遺跡南西部の様相に対して、今回の2つの調査区も含まれる遺跡南東部の駐屯地東地区は顕著な違いを示している。駐屯地正門に近い西半部では弥生時代前期後葉の方形周溝墓群が検出され、駐屯地西地区の居住域と対になるように墓域が形成されていた。中央部の様相は明確ではないが、弥生時

## 第2節 歴史的環境

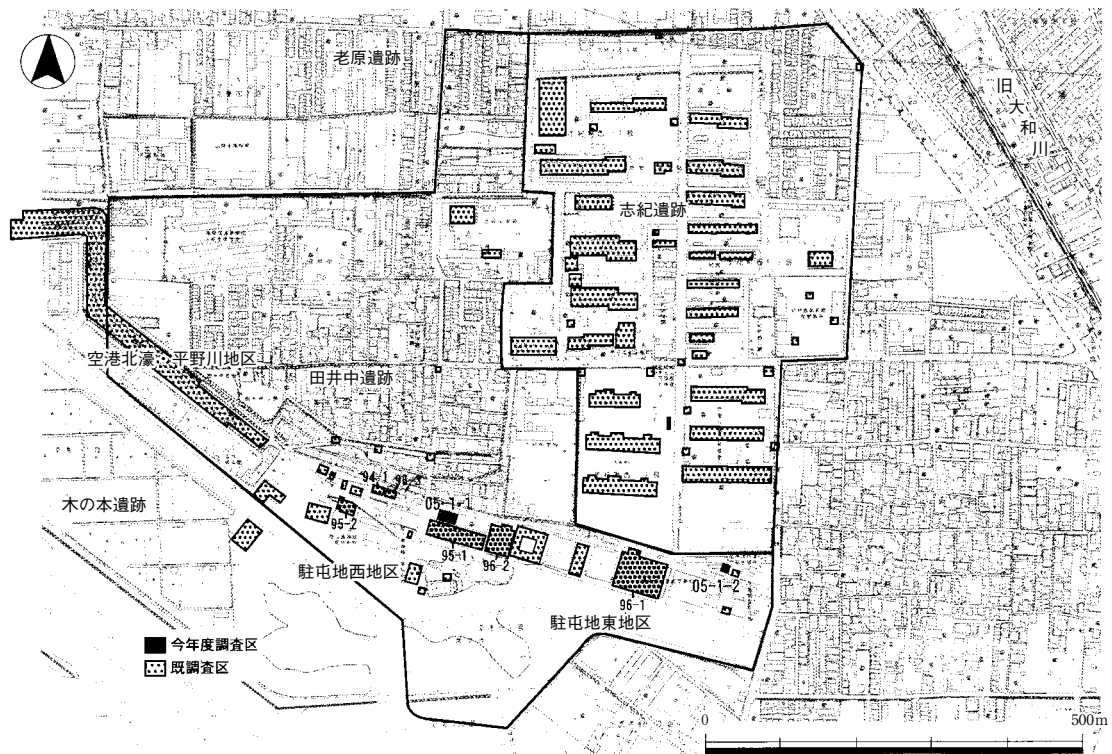


図7 田井中・志紀遺跡既調査区位置図（註）

代前期の集落的要素は認められるものの、主体的には古墳時代の集落が営まれていたらしい。また、東地区東半部で検出された遺構には溝が多く、北側の志紀遺跡で展開する生産域と連動した動向が認められる。

このように田井中遺跡に展開した弥生集落は、縄文時代晩期末葉から弥生時代中期にかけて居住域を西から東に順次移動させ、その周辺に墓域を配し、生産域とも看做されている志紀遺跡とも連動して、拡大傾向を示しながら継続的に営まれていたらしい。しかし後期以降は縮小・衰退したらしく、古墳時代になると居住域はさらに東に移動している。もっとも、田井中遺跡内では古墳時代の中心的な居住域は未だに見出されていないので、当該期の集落については八尾空港の滑走路になっている木の本遺跡を含めて検討する必要があるだろう。

古代から中世にかけては、八尾空港北濠・平野川地区など遺跡西側の地域で坪境や坪境と関連する奈良時代の銭貨や墨書土器などが検出される他、耕作に伴うピット・土坑・溝などもみられる。こうした様相は東側地域でも同様で、遺跡の東北方に位置する志紀遺跡と同じく、田井中遺跡も生産域として機能していたらしい。

### 註

この地図は、大阪府が平成11～13年にかけて作成した大阪府ベクトル地形図1/2500をもとに、〔市村2002〕図406の成果を採り入れて縮小・編纂したものである。

## 第Ⅲ章 05-1-1 調査区の調査成果

### 第1節 基本層序と遺構面

05-1-1 調査区は現地表の標高11.4~11.8mを測り、南東部が高く北西部に低くなっている。近・現代の整地層を除去するため、まず重機で掘削を開始した。その結果調査面積のほぼ3分の2に相当する中央部から東部の地区が、昭和30年代まで利用されていた溜池の一部にあたり、その深さは現地表よりおよそ2.5mあって、整地層が予想外に厚く堆積していることが判明した。整地層には駐屯地付属施設や建物の廃材が含まれ、また溜池の埋立地という軟弱地盤を補強するため、十数本の木杭を打ち込んだ上にコンクリートを分厚く敷いた基礎も据えられていた。こうした状況のため、整地層を除去した段階では調査区中央部から東部が溜池跡による窪地になり、溜池の池岸法面および周辺部にあたる調査区西部は台地状の高まりとして残ることになった。

整地層除去後、人力掘削による調査を実施した。調査においては冬の期間にも関わらず湧水が極めて著しく、下層に砂礫土や砂質土が堆積していることもあって、土層観察のために前もって掘削しておいた排水用の側溝壁面、あるいは精査中の遺構壁面が瞬く間に崩壊することも度々であった。

当初、東西に長い長方形を呈する調査区の基本層序を確認するため、調査区北辺および西辺に沿って土層断面を残す予定であった。しかし、整地層除去後の地形が以上のように変則的のものになり、また側溝壁面の崩落が頻発しことで、北辺に沿い東西方向に連続して土層を観察することが困難になった。そのため調査区の短辺にあたる西辺（Aライン）と東辺の下層（Cライン）、および長辺の一部にあたる北辺西部（Bライン）に沿って土層断面を記録することにした（図8）。本調査区の基本層序は以下のとおりである。

**0層** 砂質シルト層、粘土質シルト層、砂層等に細分され、酸化鉄の沈着が顕著にみられる。溜池の掘削によって調査区の西部のみに遺存する。近世・近代の耕作土と考えられる。

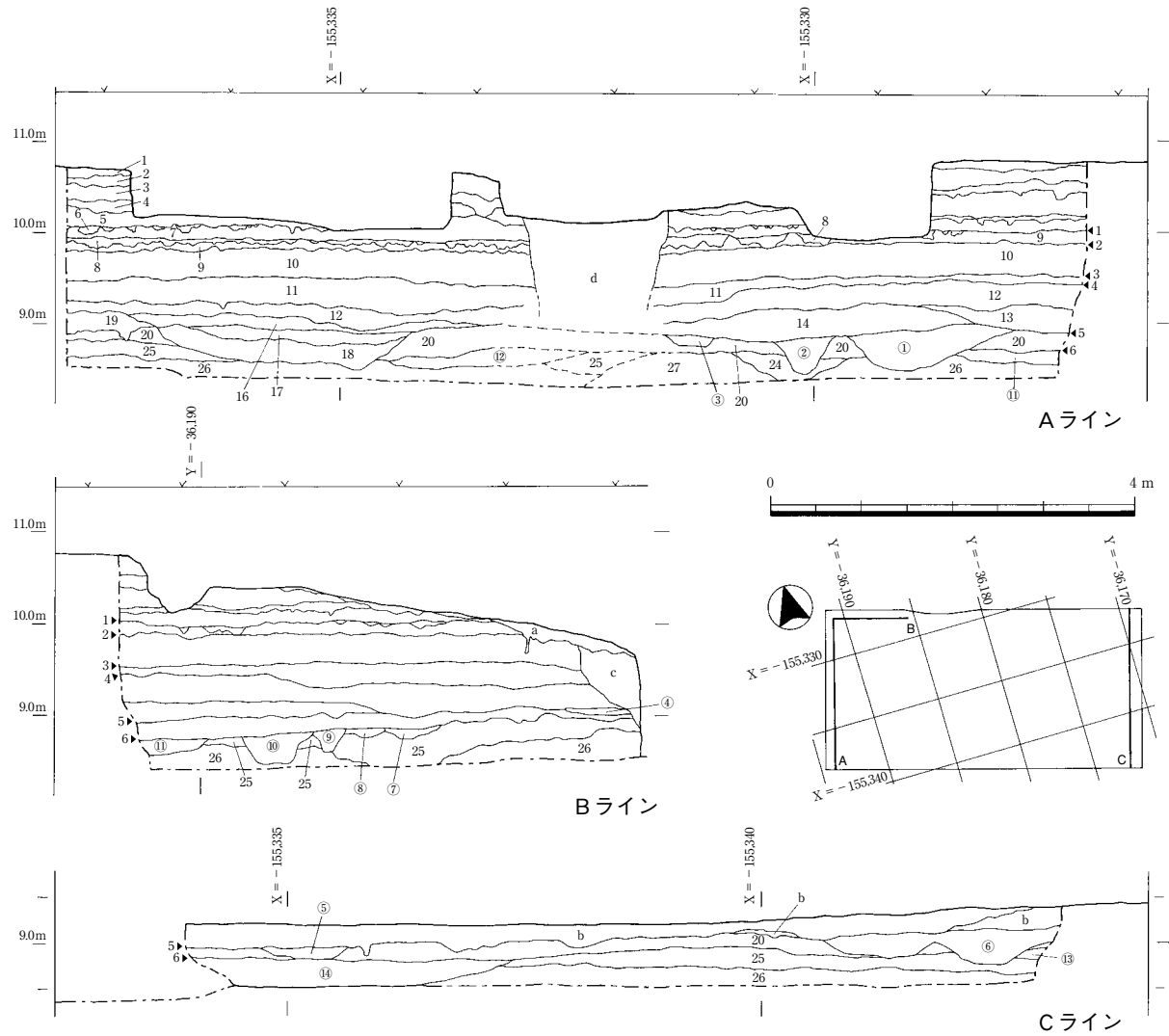
**1層** 部分的にみられる細・中砂層と粘土質シルト層から構成され、酸化鉄の沈着が顕著である。やはり、溜池の掘削によって調査区西部にだけ遺存する。本層上面を第1面とした。出土遺物はないが中世の作土層と思われる。

**2層** オリーブ灰色粘土質シルト層であり、上部で酸化鉄の沈着が顕著にみられる。2層も溜池の掘削によって調査区西部のみに遺存する。本層上面を第2面とした。弥生土器から瓦器・土師質土器まで出土し、古代から中世に形成された地層と考えられる。

**3層** 細・小礫を含む灰色粘土質シルト層で、上・下の地層に比べ暗い色調を呈している。本層も溜池の掘削によって調査区西部のみに遺存するが、南北方向の層厚をみると、南東部で厚く北西部で薄くなっている。本層上面を第3面とした。土師器や須恵器を主体に縄文晩期や弥生前期の土器片も出土しており、古墳時代に形成された地層と考えられる。

**4層** 本層も溜池の掘削によって調査区西部にのみ遺存する。7層に細分されるが、大きくは全体にみられる上層の粘土質シルト層、北半部下層の緑灰色砂質シルト層・砂層、南半部下層の灰色・オリーブ黒色の砂質シルト層・砂層に区分される。この4層が形成されるにあたっては、下層の溝を埋没させ

第1節 基本層序と遺構面



1. 灰黄 (2.5Y6/2) 砂質シルト 細～粗砂を含み、酸化鉄斑紋顕著〔0層〕
2. 灰黄 (2.5Y6/2) 砂質シルト 細～極粗砂を含み、酸化鉄斑紋顕著〔0層〕
3. 黄灰 (2.5Y6/1) 砂質シルト 細～粗砂を含み、酸化鉄斑紋顕著〔0層〕
4. 灰黄 (2.5Y7/2) 細～中砂 酸化鉄斑紋顕著〔0層〕
5. 灰 (5Y5/1) 粘土質シルト 粗砂を含み、酸化鉄斑紋顕著〔0層〕
6. 灰白 (5Y7/1) 中砂 酸化鉄斑紋僅かに入る〔0層〕
7. 灰 (5Y5/1) 粘土質シルト 粗砂を含み、酸化鉄斑紋顕著〔0層〕
8. 灰 (5Y5/1) 細～中砂 酸化鉄斑紋顕著〔1層〕
9. 灰 (5Y5/1) 粘土質シルト 粗砂を含み、酸化鉄斑紋顕著〔1層〕
10. オリーブ灰 (5GY5/1) 粘土質シルト 粗～極細砂を含み、上部で酸化鉄斑紋顕著〔2層〕
11. 灰 (10Y4/1) 粘土質シルト 細～小礫を含む〔3層〕
12. 緑灰 (7.5GY5/1) 粘土質シルト 極粗砂～細礫含む〔4層〕
13. 緑灰 (10GY5/1) シルト 粗砂～細礫含む〔4層〕
14. 緑灰 (10GY5/1) 細～中砂 粗砂～細礫含む〔4層〕
16. 灰 (5Y4/1) 細～極粗砂 小礫含む〔4層〕
17. 灰 (7.5Y4/1) 砂質シルト 中砂ブロックが多く入る〔4層〕
18. オリーブ黒 (10Y3/1) 砂質シルト 細砂～中砂多く、極粗砂・黒褐 (2.5Y3/1) シルトのブロックが多く入る〔4層〕
19. 灰 (7.5Y4/1) 粗～極粗砂 細礫含む〔4層〕
20. 黒褐 (2.5Y3/1) 砂質シルト 細～小礫含む〔5層〕
24. 灰オリーブ (5Y5/2) 極粗砂～細砂 27層が砂質化した部分〔6層〕
25. 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) 砂質シルト 粗～極粗砂含む〔6層〕
26. 灰 (5Y5/1) 粗～極粗砂・細～小礫〔6層〕
27. 灰オリーブ (5Y5/2) シルト質極細砂 風化し、砂泥化した岩塊〔6層〕

No.15, 21～23は、側溝掘削中に便宜的に付したもので、調査の進展に伴い、同一層として、或いは遺構の埋土等として確認されたものである。ただ、遺物等を当初の番号で採り上げたこともあり、その他の土層番号を書き換えて連番とすることはせず、取って欠番とした。

- ① 8溝の埋土 図15参照
  - ② 9溝の埋土 図15参照
  - ③ 灰 (10Y4/1) 細砂 中～粗砂含む〔19溝〕
  - ④ 黄灰 (2.5Y5/1) シルト 細～中砂含む〔20溝〕
  - ⑤ 灰 (7.5Y4/1) 砂質シルト 粗砂含む〔11土坑〕
  - ⑥ 12、13溝の埋土 図16参照
  - ⑦ 43ピットの埋土 図20参照
  - ⑧ 68ピットの埋土 図20参照
  - ⑨ 39ピットの埋土 図20参照
  - ⑩ 38ピットの埋土 図20参照
  - ⑪ 黒 (2.5GY2/1) 砂質シルト 細砂、炭化物粒含む〔44落ち込み〕
  - ⑫ 黒 (2.5GY2/1) 砂質シルト 細砂、炭化物粒含む〔45落ち込み〕
  - ⑬ 暗オリーブ褐 (2.5Y3/3) 砂質シルト 細砂含む〔51落ち込み〕
  - ⑭ 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) 砂質シルト 極粗砂、細礫含む〔67落ち込み〕
- a. 明黄褐 (2.5Y7/6) 極粗砂 細礫含む〔溜池堆積土-攪乱層〕  
 b. 灰 (7.5Y4/1) シルト質極粗砂 細砂含む〔溜池堆積土-攪乱層〕  
 c. オリーブ灰 (10Y6/1) シルト 細～中砂含む〔溜池護岸板裏込め-攪乱層〕  
 d. 現代の井戸掘り方〔攪乱層〕

図8 05-1-1調査区 土層断面図

た洪水による砂礫土の影響を受けていると判断した。例えば北半部にみられる砂質シルト層や砂層は、この洪水砂をベースに周辺の土砂が混濁して形成された地層であろうし、調査区南西隅にみられる細～極粗砂層は洪水砂そのものと思われる。また南半部の灰色やオリーブ黒色の砂質シルト層には、中砂ブロックや5層を母材とする黒褐色シルトブロックが多く混在しており、再堆積層の可能性が高い。おそらく洪水砂を攪拌・除去して土壌改良するための客土層のような地層ではないだろうか。これらの地層は独立した遺構面を形成していたとも考えられるが、平面的な広がり把握することができなかったため、4層に含めて取り扱うことにした。なお本層上面を第4面とした。

4層出土遺物には弥生前期の土器片が多く、縄文晩期・弥生後期（長頸壺）・土師器・須恵器は少ない。注意すべき点は少量だが弥生後期の土器がみられることであり、調査区内で当該期の遺構は検出できなかったが、例えば調査区から西側の地区に弥生時代後期の遺構が存在する可能性は高い。なお本層の時期は、最も新しい時期の遺物や周辺の調査成果を勘案して古墳時代に形成された地層と思われる。

**5層** 黒褐色砂質シルト層で細・小礫を含む。本層上面を第5面とした。5層は調査区西部および東部に遺存するが、中央部では確認できなかった。ここでも溜池の影響は大きく、池岸近くに相当する中央部では7層の砂礫層が露出している場所が多く、溜池の中心部に近い東部でも、溜池の掘削や流水による池底の攪拌等による攪乱をかなり受けていた。5層出土の土器は大半が弥生前期のものであり、わずかに縄文晩期の土器片を含んでいる。弥生時代前期から古墳時代に形成された地層である。

**6層** 大きく3層に細分され、上層は暗オリーブ灰色砂質シルト層、中層は黒色シルト質細砂層、下層は灰色砂礫（粗・極粗砂、細・小礫）層である。本層上面を第6面とした。調査予定深度に達したため下層の層厚は不明である。6層の堆積状況を調査区全体としてみると、下層の灰色砂礫層上面は調査区中央部で高く東部や西部で低くなっており、場所によっては窪地上の地形も存在する。一方、上層の灰色砂質シルト層は調査区の東部や西部で確認されるとともに、こうした下層の凹部でも厚く堆積しているが、反対に下層が高くなる調査区中央部の堆積は薄くなる傾向にあり、この付近では確認できない場所も存在する。また、中層とした黒色シルト質細砂層は土器棺墓が構築された下層の凹部でのみ確認された地層であり、その広がり不明である（図19）。ここからは縄文晩期刻目突帯文土器と弥生前期の土器片がわずかに出土しており、縄文時代晩期末葉から弥生時代前期に形成された地層と思われる。

## 第2節 遺構

### 溜池（図9、図版1-1、2-1）

はじめに、整地層除去後の溜池跡の概要を報告しておく。溜池は調査区中央部から東部を占め（8d区、8e-I・II区、9d-I・III区等）、西部も池岸の法面にあたるため、旧地形は斜めに削り取られている（9c-III区、9d-II・IV区）。調査区西辺に沿ってわずかに平坦面がみられ（10c-III区、10d-I・III区）、ここには井戸が構築されていた。

池岸の基底部は護岸工事が施され、土留めのために板を2～3段重ね、その板を留めるために木杭が打ち込まれていた。井戸は直径1.10mの円形で、コンクリート製の円筒形井戸側を積み重ねたものである。さらに溜池と井戸の間は木製の樋で結ばれ、溜池の水が井戸に導かれる仕組みになっていた。この導水用木樋は長さ7.80mあり、溜池側の木樋上面は細い角材を長さ1.70mに渡り隙間を空けて並べた連



## 第2節 遺構

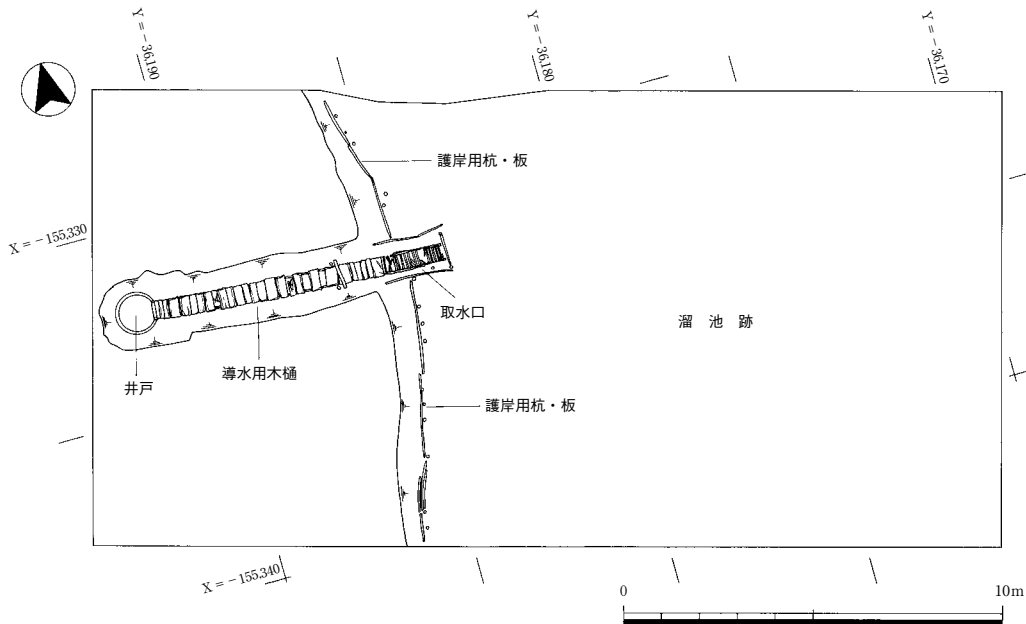


図9 溜池跡 全体図

子格子で、取水口の役目を果たすように細工されていた。

こうした溜池および井戸は周辺の田畑を潤す灌漑用の施設である。おそらく井戸の傍らには「はね釣瓶」が据え付けられて、典型的な河内の農村風景が展開していたものと想像される。

### 第1面 (図10、図版1-2)

近世・近代の耕作土層と考えられる0層を除去して検出される遺構面。調査区西部のみに遺存する。遺構面の標高は9.90～10.00mを測り、ほぼ水平である。畦畔1条が検出され、ヒトや牛等の足跡が畦畔上も含め全面に遺されていた。

1畦畔は9d-II区～10d-I区で検出された東西方向の高まりで、高さ0.05～0.10m・幅1.10m以上であるが、幅については南側が溜池と井戸を結ぶ木樋の掘り方で攪乱されており不明である。畦畔の方向は座標の東西軸に沿っており、第1面は条里地割にほぼ則した中世の水田面と考えられる。

### 第2面 (図10、図版1-3)

中世の作土層である1層を除去して検出される遺構面。第1面と同じく調査区西部のみに遺存する。標高は9.80～9.90mを測り、ほぼ水平である。溝1条とヒト・牛等の足跡が検出された。中世の耕作面と考えられる。

2溝は9d-II区で検出された。座標の東西軸に沿っており、東側は溜池の掘削で削平されている。現存長3.20m・幅0.16～0.35m・深さ最大0.08mを測る。

### 第3面 (図10、図版2-1)

古代から中世に形成された2層を除去して検出され、調査区西部のみに遺存する。遺構面の標高は9.50～9.60mを測り、ピット1基、溝1条が検出された。古代の遺構面と思われる。

3ピットは9c-IV区で検出され、長径0.59m・深さ0.41mを測る (図13)。4溝は9d-II区で検出された南北方向の溝である。溜池や木樋の掘り方でほとんど削平され、現存長およそ2.00m、幅は不明である。

### 第4面 (図10、図版2-2、3)

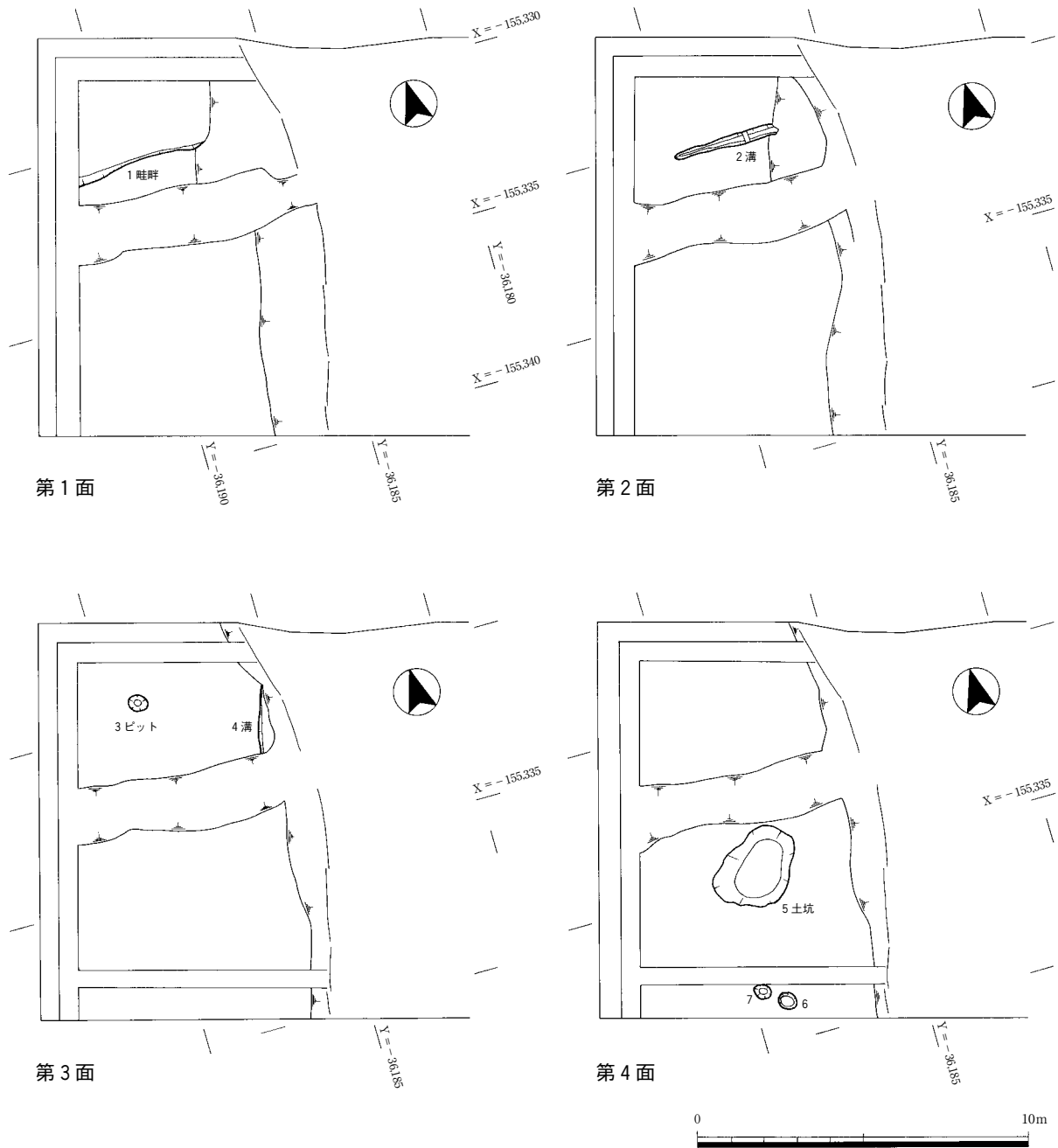


図10 第1～4面 全体図

古墳時代に形成された3層を除去して検出され、やはり調査区西部のみに遺存する。遺構面の標高は9.10～9.50mを測り、調査区北西の一面がやや高くなっている。土坑1基、ピット2基が検出された。古墳時代の遺構面と思われる。

5土坑は9 d - II・Ⅲ区で検出された不整楕円形の浅い土坑で、長径2.60m・短径2.10m・深さ0.30mを測る。3層に類似したオリーブ黒色シルトを埋土とし、土師器坏や弥生後期の長頸壺が出土している(図12)。9 d - Ⅲ区で検出された6・7ピットは不整円形で、それぞれ長径0.55m・深さ0.10m、長径0.46m・深さ0.18mを測る(図13)。なお、第4面を覆う3層の9 d - IV区では、標高9.22～9.37mの間に布留式の小・中形甕が比較的まとまって出土した(図11)。

第2節 遺構

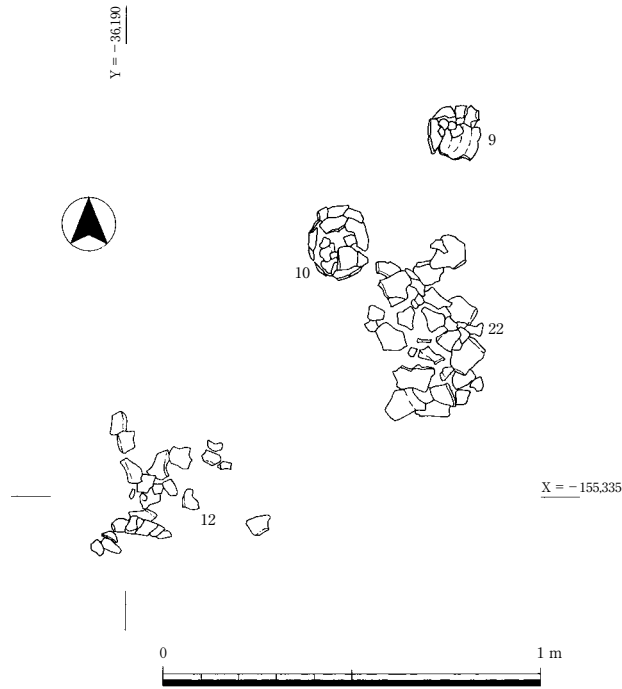


図11 3層9d-Ⅳ区 土器出土状況図

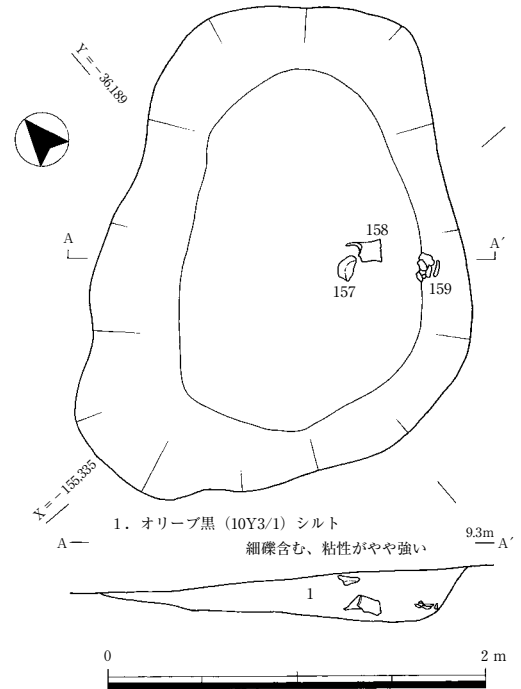


図12 5土坑 平面・断面図

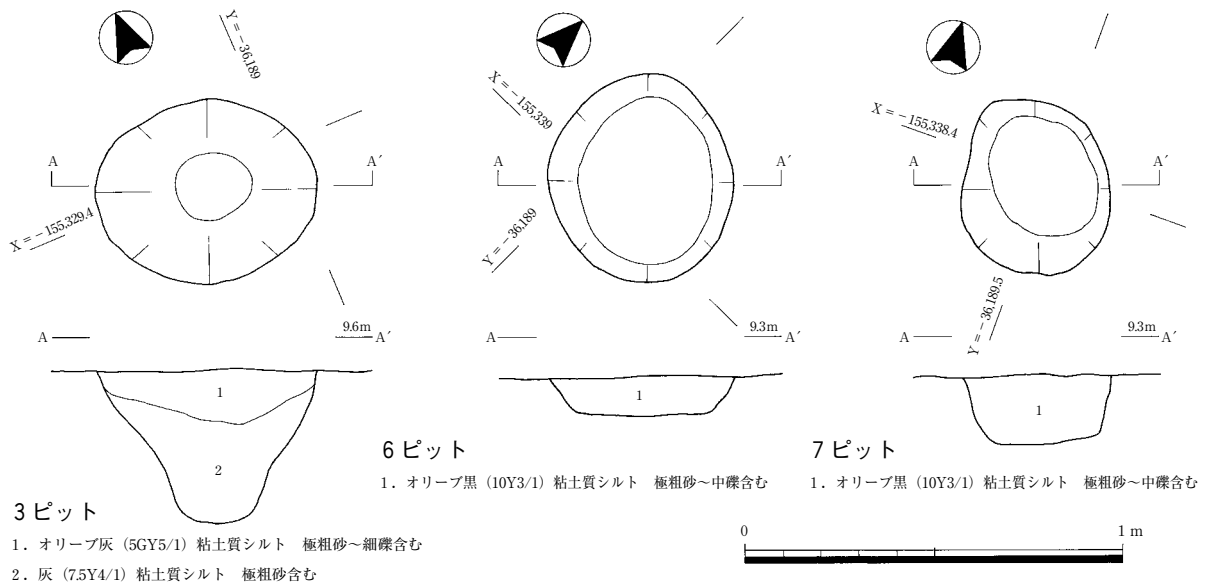


図13 3・6・7ピット 平面・断面図

第5面 (図14、図版3-1)

古墳時代に形成された4層を除去して検出される遺構面。標高は8.80~9.20mを測り、大きくみれば調査区南東部から北西方向に向けて下がるように緩やかに傾斜している。ただし溜池によって遺構面の旧状を留めていない箇所も多い。例えば、座標のY = -36,185ラインに沿った池岸基底部の護岸板や木樋取水口の付近には攪乱坑・溝がみられるが (図14)、溜池全体からみてもこの池岸近くは特に攪乱されており、遺構面のベースになる5層がなく、その下層にあたる6層の砂礫層等が露出している箇所も広くみられる (図14の一点破線で囲まれた範囲)。また溜池の中心部にあたる調査区東部の地区では、

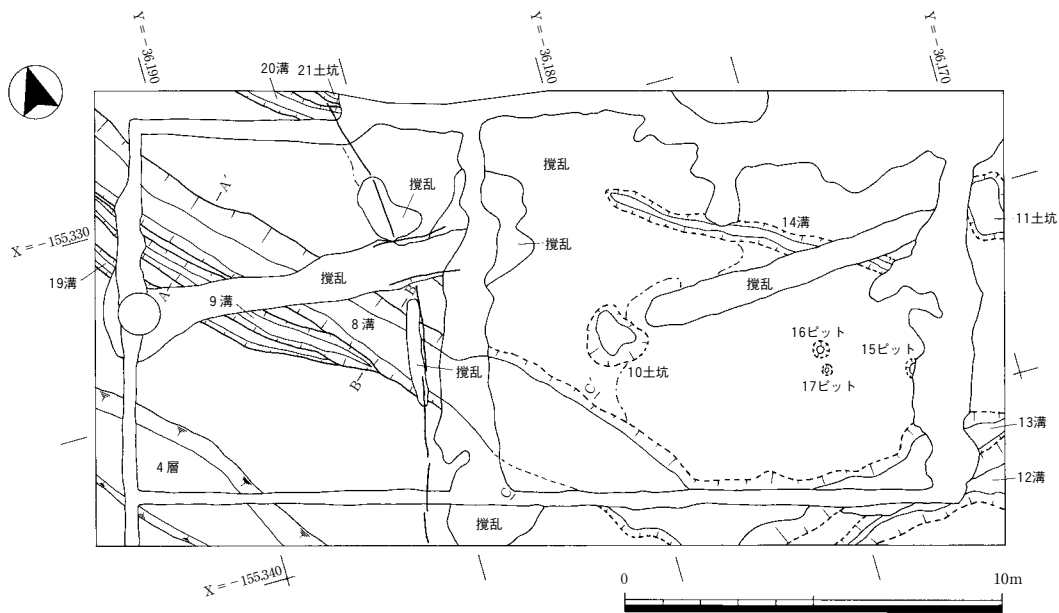


図14 第5面 全体図

5層は遺存するものの、その上部は溜池による攪乱を一様に受けているものと思われる。こうしてみると遺構面の地形的な現状も当初のものとは異なる可能性があり、最も攪乱の影響を受けている調査区中央部付近が、旧地形としてはあるいは高所であったかもしれない。

なお本遺構面の調査では、従来からの側溝も含めて、調査区の各辺に沿って排水用の側溝を掘削したが、中央部における湧水も著しく、その溢出水を側溝に導くため9 d - II・Ⅲ区を南北に貫く排水溝も掘削した。しかし中央部の湧水はこの排水溝だけでは処理しきれず、結果的に木樋の掘り方や遺構の8溝にも流入し、その壁面や溝底を削り流すことになった。また側溝を流れる湧水の流勢も強く、先にも述べたように側溝の壁面は大きく度々崩壊することになった(図14)。

以上のような遺構面および調査の状況によって実質的な調査範囲の形状は不整形なものになり、遺構の状況を十分に把握できなくなった箇所も存在するが、第5面からは溝7条・土坑3基・ピット3基が検出された。なお10 d - I・Ⅲ区にみられる北西-南東方向の溝状の窪地は、4層下底部の凹部に相当すると判断し、第5面の遺構としては取り扱っていない(図版4-3)。また第5面の時期は、上・下の地層から出土する遺物の時期からみて弥生時代前期から古墳時代中期の範囲が想定されるが、遺構面の標高等を隣接する95-1・96-2調査区の成果に照合すると、古墳時代中期に比定することが妥当のように思われる。

8溝は、主に10 c - Ⅲ・9 d - II・9 d - Ⅲ・8 e - II区で検出された南東-北西方向の溝であり、その規模は北西側のAA'断面で幅1.38m・深さ0.45m、9溝も含む中央のBB'断面で幅(2.18)m・深さ0.37mを測る(図版3-2)。しかし溜池の池底にあたる南東側では、例えばCC'断面でみるように溝の北側肩部・南側法面・埋土など多くの箇所で攪乱を受けており、その規模ははっきりしない。また埋土には草木などの有機物を含む地層がみられず、ラミナが顕著な砂・砂礫・砂質シルト層が互層に堆積している(図15、図版4-1)。こうした堆積状況と溝底の標高が北西側でより低いことを考え合わせると、8溝は南東から北西方向に流れる人工流路であり、洪水で埋没した可能性が高い。砂層中

第2節 遺構

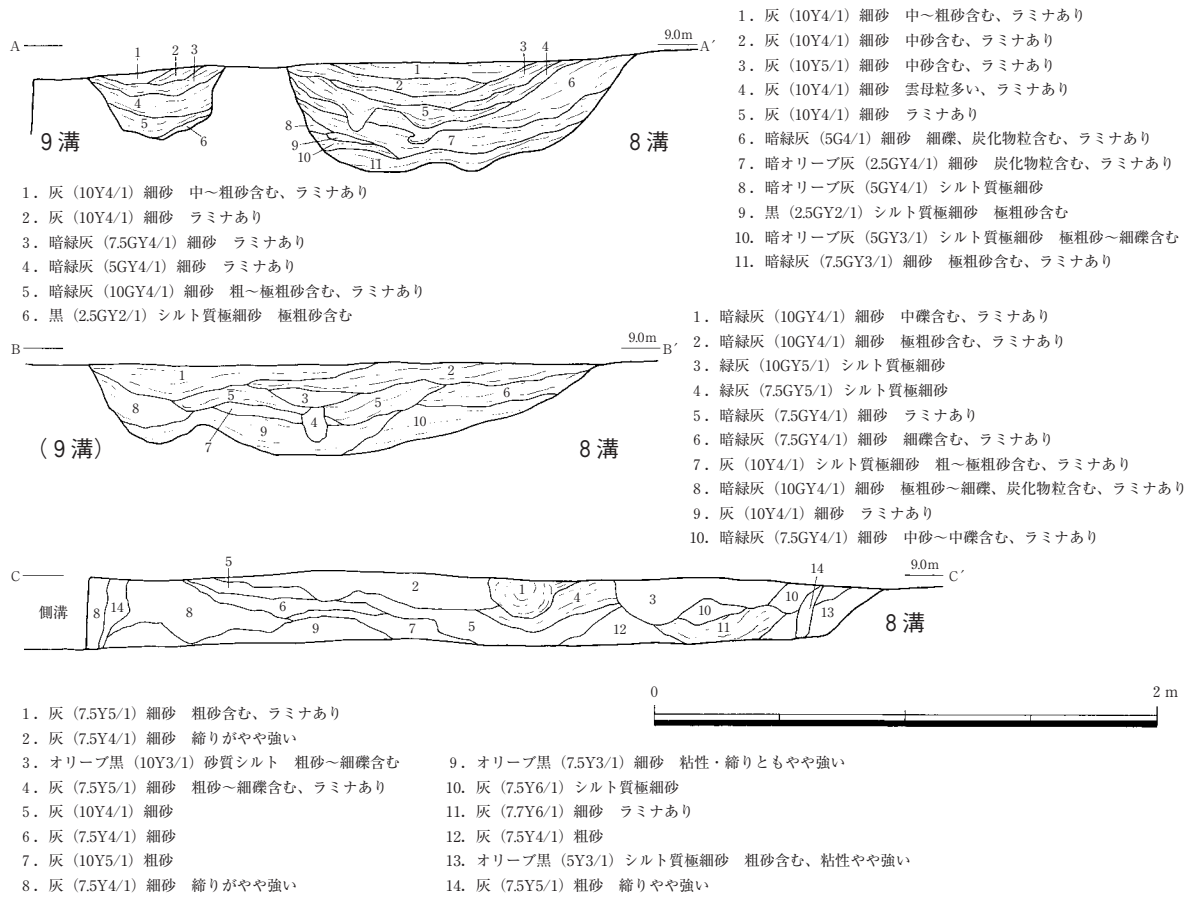


図15 8・9溝 断面図

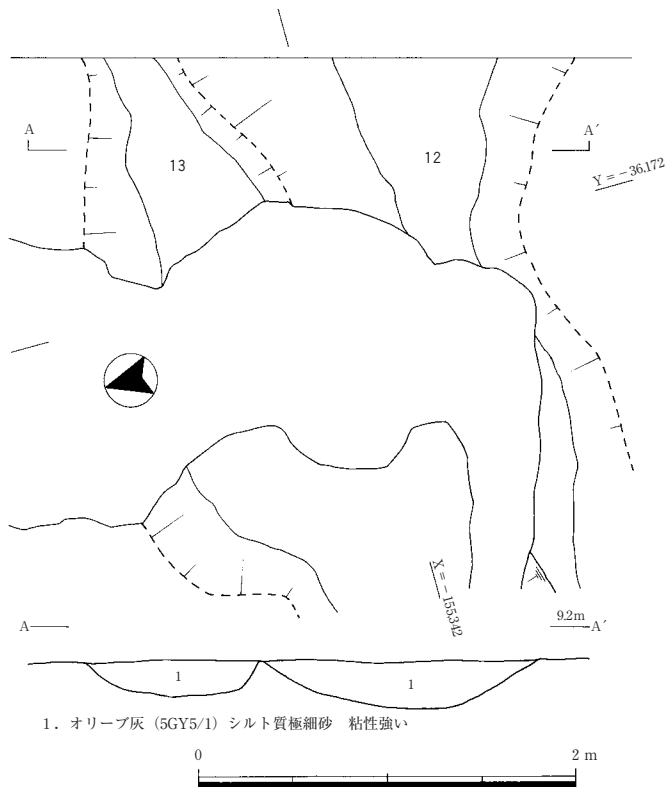


図16 12・13溝 平面・断面図

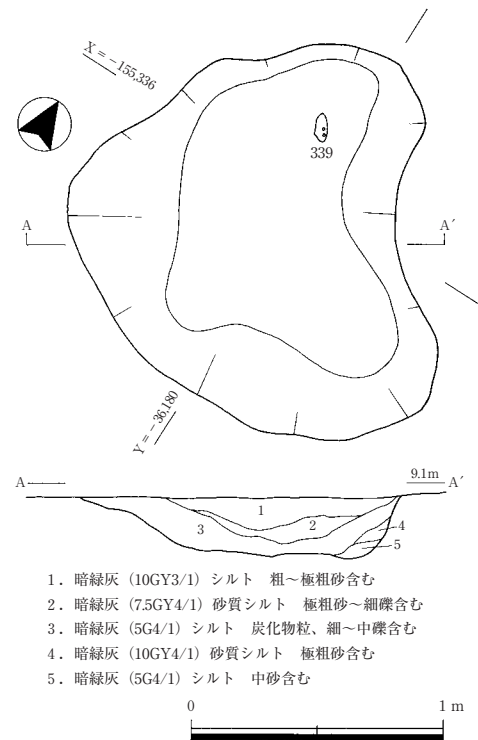


図17 10土坑 平面・断面図

で弥生前期の土器片やサヌカイト片がわずかに出土している。

8溝からは9d-II区で9溝と19溝が分流している。9溝は10d-I区のAA'断面で幅0.56m・深さ0.29mを測る(図15)。8溝と同じようにラミナのみられる砂層が堆積する。19溝は幅0.57m・深さ0.12mを測る。いずれの溝も8溝の南側に並行している。

8e-I・II区には8溝に接して東西方向に延びる12・13溝がみられる。両者については、それが単独の溝であるのか、あるいは8e-II区で東に屈曲した8溝そのものであるのか、という点が問題になるが、8溝の南東側が調査区外に延びるためはっきりしない。また12・13溝の位置関係は、この付近でも遺構面上部が攪乱されているために把握しにくい。8e-II区ではやや離れ、8e-I区では近接あるいは重複していたらしい(図14、16)。なお12・13溝の現況の規模は、断面AA'の位置で、12溝は幅1.46m・深さ0.26m、13溝は幅0.93m・深さ0.19mを測る。

14溝は8d-II・III区で検出された南東-北西方向に延びる細い溝で、長さ7.50m以上・最大幅0.60m・深さ0.08mを測る。20溝は9c-IV区で検出された南東-北西方向の細い溝で、長さ1.10m以上・最大幅0.70m・深さ0.12mを測る。

10土坑は8d-IV・9d-III区で検出された不整形の土坑で、現況の最大長1.65m・深さ0.24mを測る。弥生前期の土器片や完形の石包丁が出土している(図17、図版4-2)。7d-II・IV区で検出された11土坑は平面形が長方形の浅い土坑で、現況では長辺1.75m・短辺1.02m・深さ0.15mを測る。弥生前期の土器片が3点出土している。21土坑は9c-IV区で検出され、大半が調査区外にあるため規模・形状ともに不明。深さは0.09mを測る。

8d-III区では3基のピットが確認された。15ピットは現況の長径0.38m・深さ0.08m、16ピットは現況の長径0.44m・深さ0.07m、17ピットは現況の長径0.22m・深さ0.06mを測る。

#### 第6面(図18、図版5-1)

弥生時代前期以降に形成された5層を除去して検出される遺構面。遺構面の標高は8.60~8.95mを測り、調査区の東側で高く西側に低い。第5面と同じように湧水が激しく、排水用の側溝だけでなく井

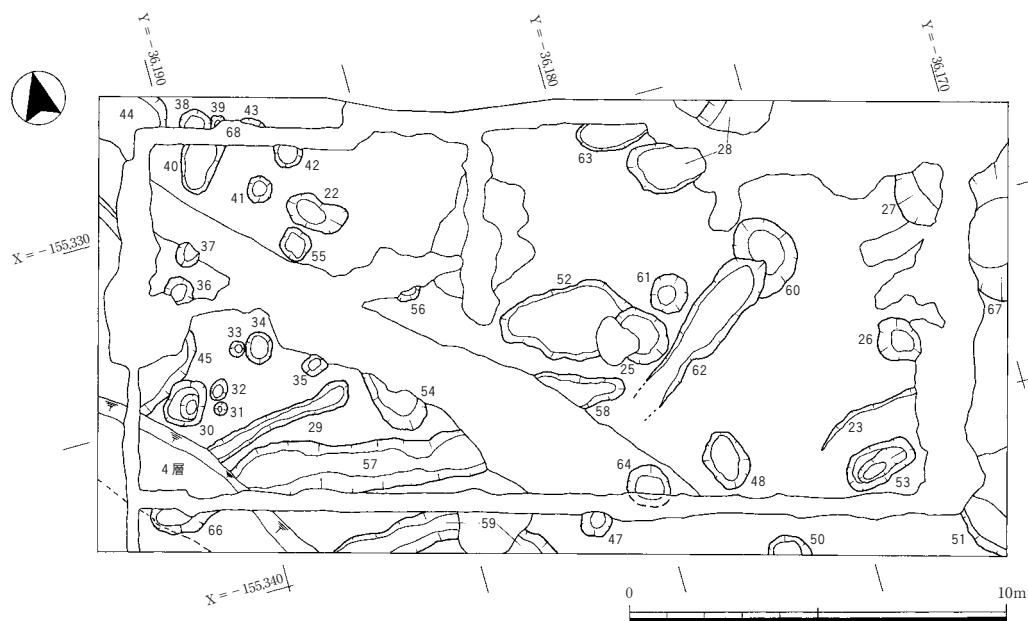


図18 第6面 全体図

第2節 遺構

戸・木樋の掘り方・遺構の壁面等も度々崩壊し、調査範囲の形状も不規則なものになった。

第6面からは土器棺墓1基・土坑13基・ピット16基・落ち込み6箇所・溝5条が検出された。遺構面の時期は、遺構および遺構面を覆う5層出土の土器が弥生時代前期と縄文時代晩期に限られており、弥生時代前期と考えられる。

〔土器棺墓〕(図19、図版5-2、6-1~3))

22土器棺墓は9d-IV区で検出された。墓坑の平面形は長円形であるが、一部が括れており瓢形とも呼べる形状である。最大の長さ1.63m・幅0.91m・深さ0.40mを測り、長軸はN-53°-Wの方向を示している。土器棺には、棺身として高さ58.6cmの大形壺(太頸広口壺)(166)、棺蓋として高さ28.7cmの鉢(165)が利用され、鉢は伏せた状態で大形壺の口縁部に被せられていた。この土器棺は、墓坑の南半部を利用して墓坑のほぼ長軸上に60~65°の角度で斜位に据えられていたが、この角度は検出時の印象からすると立ち過ぎてているようにも思われる。しかし土圧による土器棺上半部の変形や破損の影響を省き、広口壺の胴下半部から底部の形状で判断すると、こうした比較的緩やかな角度に落ち着くものと考えられる。なお土器棺と墓坑壁面の間には精良な粘土質シルト層があり、墓坑内の他の箇所では確認できないことから、これは土器棺を支持して埋設角度を調整するために充填された地層であろう。また土器棺内部には礫を含む砂質シルト層がみられ、大形壺や鉢の破片とともに縄文土器片なども出土している。一方、墓坑の北半部は比較的礫の多いシルト層を埋土としており、墓坑底近くでは骨の断片が検出された。その形状から関節に近い部位とも思えるが、遺存状態が極めて悪く、人骨あるいは動物骨の判断は困難である。なお墓坑の埋土からは炭化した種実や米なども出土している。

こうした土器棺墓では、土器棺よりも一回り大きい程度の墓坑を用意することが通常であり、墓坑の中に土器棺を据えない大きな空隙部をもつ22土器棺墓は、その点で異例の形態といえよう。この空隙部

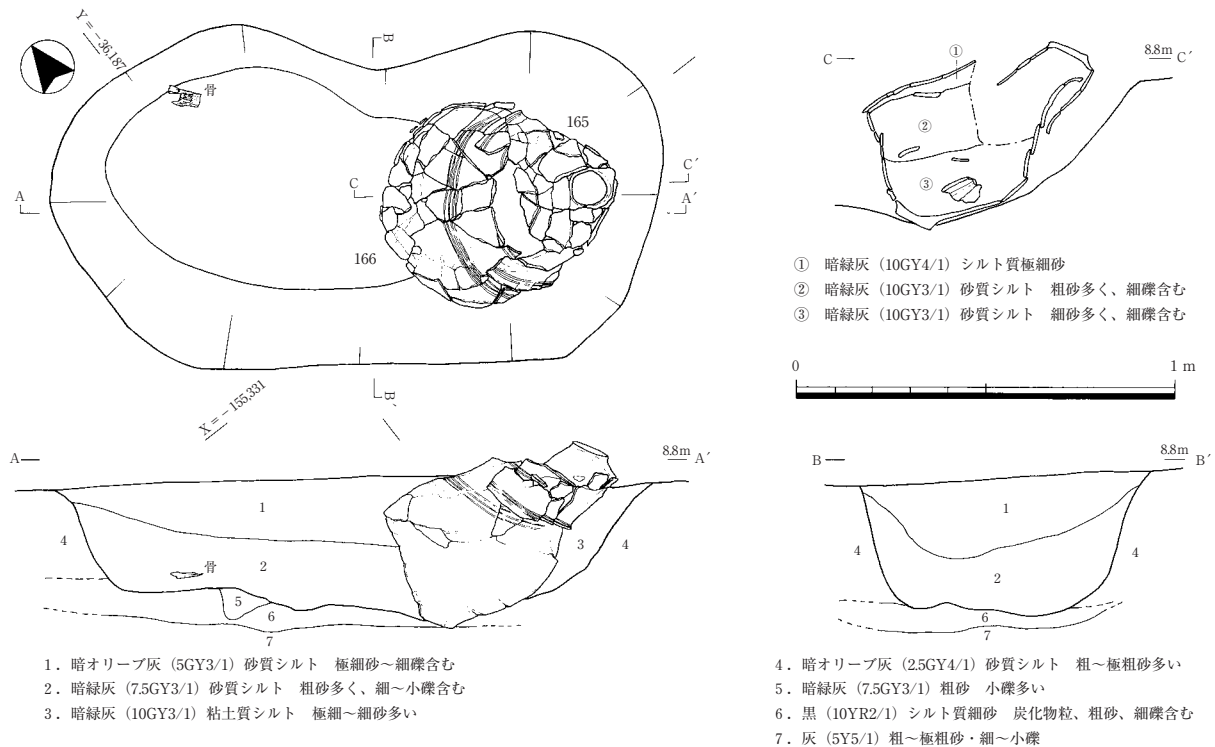


図19 22土器棺墓 平面・断面図

については、土器棺による葬送の当初から用意されていたようにも思えるが、墓坑の平面形にみる括れ部を評価すると、1次埋葬後に2次埋葬として掘り加えられたという可能性もある。さらに骨片や炭化米についても、追葬、葬送儀礼の祭具、偶然の混入など、空隙部の評価とともに種々の解釈の可能性が成立する。しかし今回の土層断面を観察する限りでは、その結論を得ることは難しい。田井中遺跡における類例の増加・検討を通してより適当な解釈の方向性を探りたい。

ところで22土器棺墓の土層断面や周辺の地層の堆積状況によると、この墓坑が掘削された場所は6層の下部層にあたる灰色砂礫層上面の凹部に相当する。調査区全体をみるとこの灰色砂礫層上面には場所によってかなりの起伏があり、凹部に相当するような場所では6層の上部層である暗オリーブ灰色砂質シルト層が比較的厚く堆積しているらしい。つまり、22土器棺墓はこうした地形や土質を考慮して場所が選定され、掘削された可能性が高いように思われる。ここで注意されるのは、6層中の暗オリーブ灰色砂質シルト層と灰色砂礫層の間に基本層序としては捉えられない黒色シルト質細砂層（6層中部層）が存在する点である。他の場所では確認できないことから、例えば窪地などの地形を条件として限定的に堆積・遺存した地層かもしれない。この地層からは縄文晩期と弥生前期の土器片がわずかに出土しているが、5層出土の土器と比較して時期的な隔たりは少ないように思われる。

#### 〔土坑、ピット、落ち込み〕（図20～22）

溜池の池底から外れた調査区西部地区では、その北半部で土坑やピットが比較的まとまって検出されている。38・39・68・43ピットは9c-Ⅲ区で相互に接した状態で検出された（図20）。いずれも排水用の側溝で断ち切られているため規模・形状などは不明であり、特に68ピットは側溝の断面で確認されただけである。ピットの深さは38ピットが0.41m、39ピットが0.18m、68ピットが0.16m、43ピットが0.15mを測る。38ピットで21点、43ピットで5点の弥生前期土器片が出土した。9c-Ⅲ区では他に41・42ピットが検出されている。41ピットはほぼ長円形で長径0.70m・深さ0.21mを測り、21点の弥生前期土器片が出土している（図20）。42ピットも長円形と思われるが、北側が側溝で断ち切られていて長径は不明。短径0.77m・深さ0.29mを測り、弥生前期土器片が3点出土している（図20）。

33・34・35・55・56ピットが9d-Ⅱ区から検出された。33ピットは円形で径0.45m・深さ0.08m（図21）。34ピットは長円形で長径0.83m・深さ0.51mを測る。壁面はほぼ垂直で底面は砂礫層に達しており湧水が顕著である（図21）。43点の弥生前期土器片が出土した。35ピットは隅丸方形で北側が第5面の8溝で削られている。短辺0.48m・深さ0.17mで、弥生前期の土器片が7点出土している（図20）。55ピットも隅丸方形で一辺0.80m・深さ0.11mを測る（図20）。縄文晩期土器片1点・弥生前期土器片8点・サヌカイト片1点が出土した。56ピットも隅丸方形と思われるが、ほとんどの部分が木樋の掘り方によって削られており平面規模は不明。現況の深さは0.22mを測る。

31・32・36・37ピットが10d-I区から検出されている。31ピットは長円形で長径0.39m・深さ0.09mを測り、弥生前期土器片3点が出土した（図21）。これに接する32ピットも長円形で長径0.63m・深さ0.10mを測る（図21）。36ピットは円形で南側が井戸の掘り方で削られていて、径0.80m・深さ0.20mを測る（図20）。37ピットは長円形と思われるが北側が第5面の8溝で断ち切られており、短径0.65m・深さ0.24mを測る（図20）。

47ピットが9e-I区から検出された（図22）。ほぼ隅丸方形だが北側は排水用の側溝で削られている。一辺0.78m・深さ0.17mを測り、弥生前期の土器片27点、サヌカイト片1点が出土している。

40土坑が9c-Ⅳ区で検出された。土坑の形状は北側が側溝で削られているためはっきりしないが、



第2節 遺構

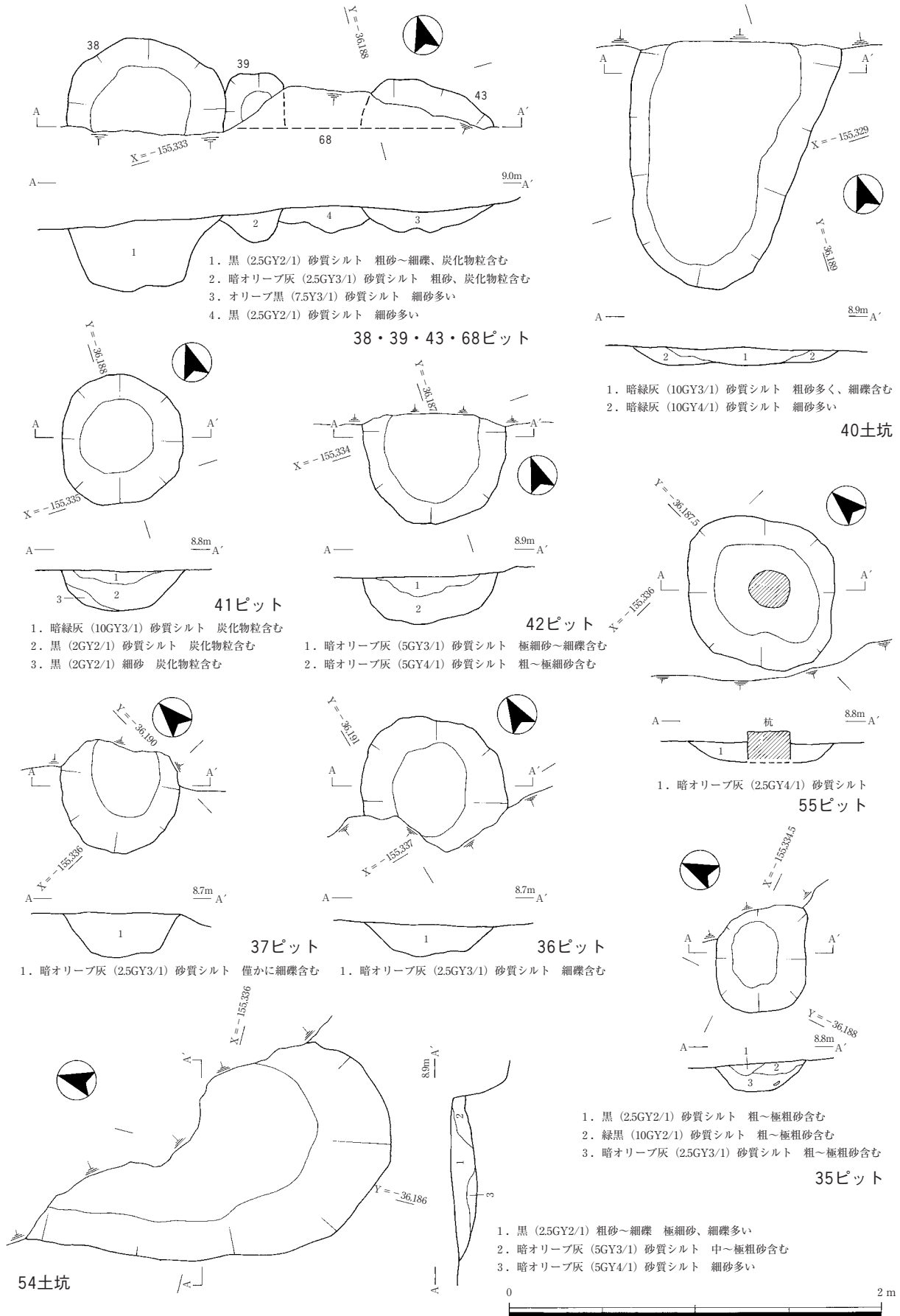


図20 第6面の土坑、ピット (1) 平面・断面図

楕円形に近いと思われ、長軸はおよそ北北東-南南西の方向を示す。現存長1.46m・幅1.07m・深さ0.10mを測り極めて浅い(図20)。縄文晩期の土器片1点、弥生前期の土器片5点が出土している。

30土坑は10d-I区で検出された隅丸長方形で2段掘りの土坑である(図21)。上部は長辺1.29m・短辺1.04mを測るが、下部は長径0.77mの長円形に深く掘り込まれており、全体の深さは0.41mになる。底面は砂礫層に達し33ピットと同じように湧水が顕著である。縄文晩期土器片1点、弥生前期土器片42点が出土している。なお土坑の西側で45落ち込みと重複しており、30土坑がより新しい。

54土坑は9d-IV区で検出された。形状は楕円形に近いが北半部は第5面の8溝で断ち切られている(図20)。現存長1.92m・幅1.20m・深さ0.14mを測り、長軸はおよそ北北西-南南東の方向を示している。弥生前期の土器片が22点出土した。

63土坑は8d-II区で検出されたもので、現状は極めて浅い土坑である(図21)。平面形は楕円形に近いと思われるが、北・東部が側溝の掘削や崩壊による攪乱によって削られているためにはっきりしない。現存長1.89m・幅0.93m・深さ0.05mを測り、長軸はおよそ東-西方向を示す。土坑に分類したが溝の可能性もある。土坑西端部近くの底面からは、柄を欠損した匙形土製品(366)が体部を西に置き上面を上にした状態で出土している(図版8-3)。

25土坑は8d-IV区で検出された(図22)。不整形の浅い土坑であり長径1.62m・短径1.35m・深さ0.12mを測る。弥生前期土器片8点、土師器片1点が出土している。52土坑と重複している。

その52土坑は8d-II・IV区、9d-I・II区で検出されている(図21)。不整形で現存長3.54m・幅2.13m・深さ0.12mを測る。弥生前期の土器片が29点出土している。

60土坑は8d区のはほぼ中央で検出され、現状は長円形で皿状の土坑である(図21)。長径2.16m・短径1.68m・深さ0.26mを測り、長軸はおよそ南-北方向を示す。土坑西辺で62溝と重複しており、溝によって切られている。また土坑中央部やや西寄りの位置で、弥生前期に属する多条沈線の施された広口壺(196)の下半部が正置された状態で出土した(図版8-2)。ただし壺の上半部は60土坑からは出土せず、土坑から東に5m程離れた27落ち込みから出土している。こうした広口壺の出土状態からは、壺と62溝の位置関係を考慮すると、溝の掘削によって広口壺上半部が破壊された可能性が十分考えられよう。しかし一方では、もし広口壺が本来完形だったとすれば壺を埋設するための土坑の深さが不足しているという状況も存在する。もちろん、広口壺の口頸部と胴部を別々に埋設した、あるいは60土坑に埋設した広口壺が故意に破壊され一部が持ち出された、などの可能性も否定できないが、現状で60土坑や62溝の深さがかなり浅いことを考えると、遺構面を覆う5層が形成される過程で60土坑周辺が削平され、広口壺口頸部を含む土砂が東側に運ばれて堆積したことを示しているようにも思われる。なお、60土坑からはこの広口壺も含めて弥生前期の土器片54点が出土している。

61土坑は8d-IV区で検出された(図21)。平面形が隅丸方形の土坑で長辺1.05m・短辺0.96m・深さ0.24mを測る。弥生前期土器片5点が出土している。

64土坑は8-d・e区、9-d・e区で検出された(図22)。平面形は円形に近いが南側は側溝で切られている。現存部は長径1.17m・深さ0.17mを測り、遺物は出土していない。

48土坑は8d-IV・8e-II区で検出された(図22)。平面形は不整な長方形で長辺1.53m・短辺1.05m・深さ0.29mを測る。当初は48・49という2つの土坑と誤認しており、最終的には1つになったため49土坑は欠番になる。縄文晩期の土器片1点、弥生前期の土器片50点が出土している。

50土坑は8e-II区の矢板際で検出され、南側の半分は調査区外になる(図22)。規模・形状ともに

第2節 遺構

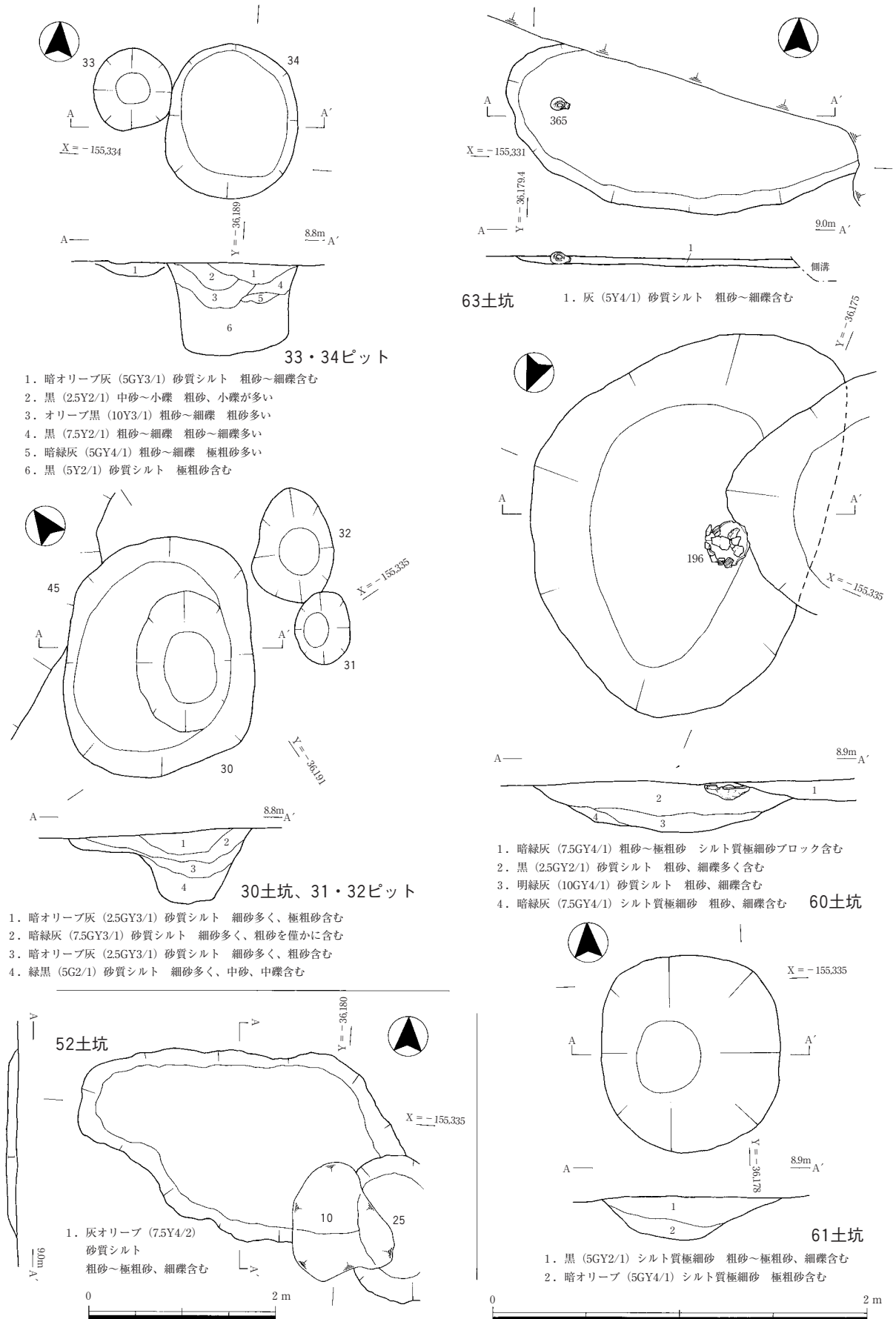


図21 第6面の土坑、ピット (2) 平面・断面図

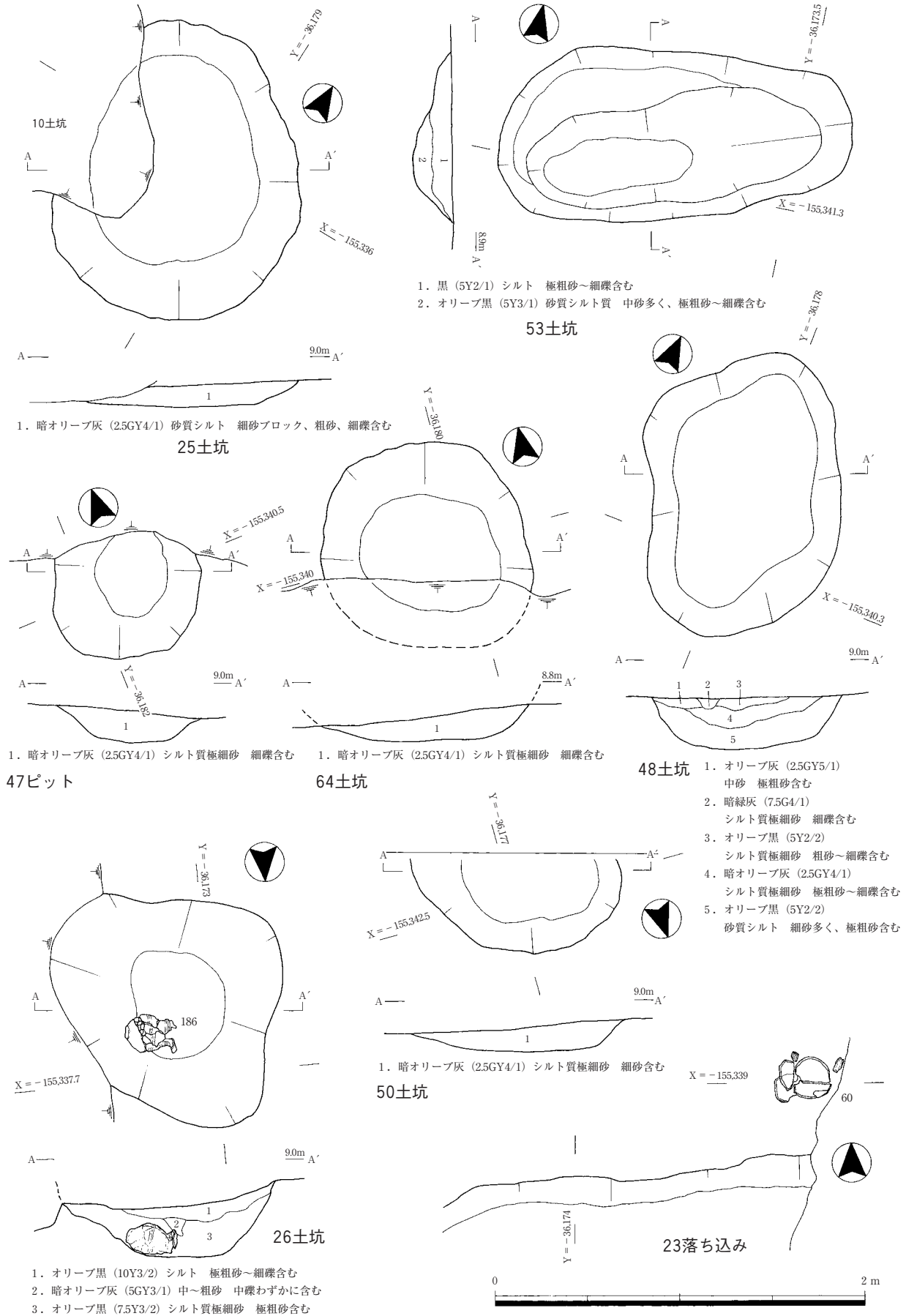


図22 第6面の土坑、ピット (3) 平面・断面図

## 第2節 遺構

不明だが、深さは0.17mを測る。遺物は出土していない。

53土坑は8 e - I区で検出されたもので、平面形は長円形を呈している（図22）。長径1.92m・短径0.96m・深さ0.21mを測り、2段に掘り込まれた土坑である。底面は砂礫層に達しており湧水が著しい。弥生前期の土器片50点が出土した。

26土坑は8 d - III区ほぼ中央で検出された（図22）。平面形は隅丸方形になると思われるが、東側は排水用に掘削した側溝壁面の崩落による攪乱を受けており本来の形状ははっきりしない。現状は長辺1.35m・短辺1.20m・深さ0.42mを測る。26土坑の底面からは頸部と体部上半に多条沈線を施文した弥生前期の広口壺（186）が、口縁部を西に向けた横倒しの状態で出土した（図版8 - 1）。他に縄文晩期土器片1点、弥生前期土器片23点、サヌカイト片6点が出土している。なお土坑の底面は砂礫層に達しており、壁面は激しい湧水により瞬く間に崩落した。

44落ち込みは、調査区の北西角に当たる10 c - III区で検出された（図18）。ほとんどの部分が調査区外になり、調査区内でも排水用の側溝や第5面の8溝等で削られていて規模・形状は不明である。深さについては遺存部分で最大0.22mを測る。炭化物粒を含む黒色砂質シルト層を埋土として（図8）、縄文晩期の土器片5点、弥生前期の土器片41点が出土した。

45落ち込みは調査区の西辺に当たる10 d - I区で検出された（図18）。調査区外になる部分が多く、調査区内でも井戸の掘り方や排水用の側溝による攪乱、また4層底面の掘り込みなどによって、規模・形状ともはっきりしない。深さは最大で0.18mを測る。44落ち込みと類似した炭化物粒を含む黒色砂質シルト層を埋土として（図8）、縄文晩期土器片1点と弥生前期土器片75点が出土している。

27落ち込みは8 d - I区で検出されたが、多くの部分が排水用に掘削した側溝壁面の崩壊によって削り流されてしまい規模・形状とも不明である。深さは0.25m以上になると思われ、埋土は暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）細砂で極粗砂や細礫を含んでいる。弥生前期土器片42点が出土している。その中には先述したように60土坑に埋設された広口壺の一部がみられることから、60土坑の周辺が削平されてその土砂がここに持ち込まれたことも考えられる。また、調査開始当初に掘削した調査区北辺側溝の8 d - I区部分で確認し、その後の側溝崩壊によって露出することになった沈線文の広口壺（288）も、位置関係からみてこの27落ち込みに所属した可能性がある。

67落ち込みは7 d - II・IV区の調査区東辺で検出されている（図18）。多くの部分が調査区外になることに加えて西・北側も側溝の掘削と側溝壁面の崩壊によって削られており、ここでも規模・形状がはっきりしない。暗オリーブ灰色砂質シルトを埋土として（図8）、深さは最大0.44mを測る。27落ち込みとの位置関係をみると一つの遺構になる可能性もあるが、両者の間には側溝などの攪乱が介在して検出状況がはっきりせず、加えて67落ち込み北側の傾斜が27落ち込みと整合しないこともあり、ここでは別の遺構として把握した。

23落ち込みは8 d - III区と8 e - I区付近で検出された小さな段状の落ち込みである。西側では消滅し、南・東側は側溝による攪乱を受けている（図18・22）。段差は最大で11cmを測る。弥生前期土器片43点が出土した。なお23落ち込みと26土坑の間で段から北に42cm程離れた位置からは、弥生時代前期に属する削出突帯を施文した広口壺（60）の頸胴部が出土している（図22）。

51落ち込みは8 e - I区の調査区南東角で検出されている（図18）。多くの部分が調査区外にあり、西側は側溝に伴う攪乱、北側は第5面の12・13溝によって削られており、規模・形状は不明である。ただし12・13溝よりも北側の地区では対応する落ち込みの法面が検出されていないので、落ち込みの範囲

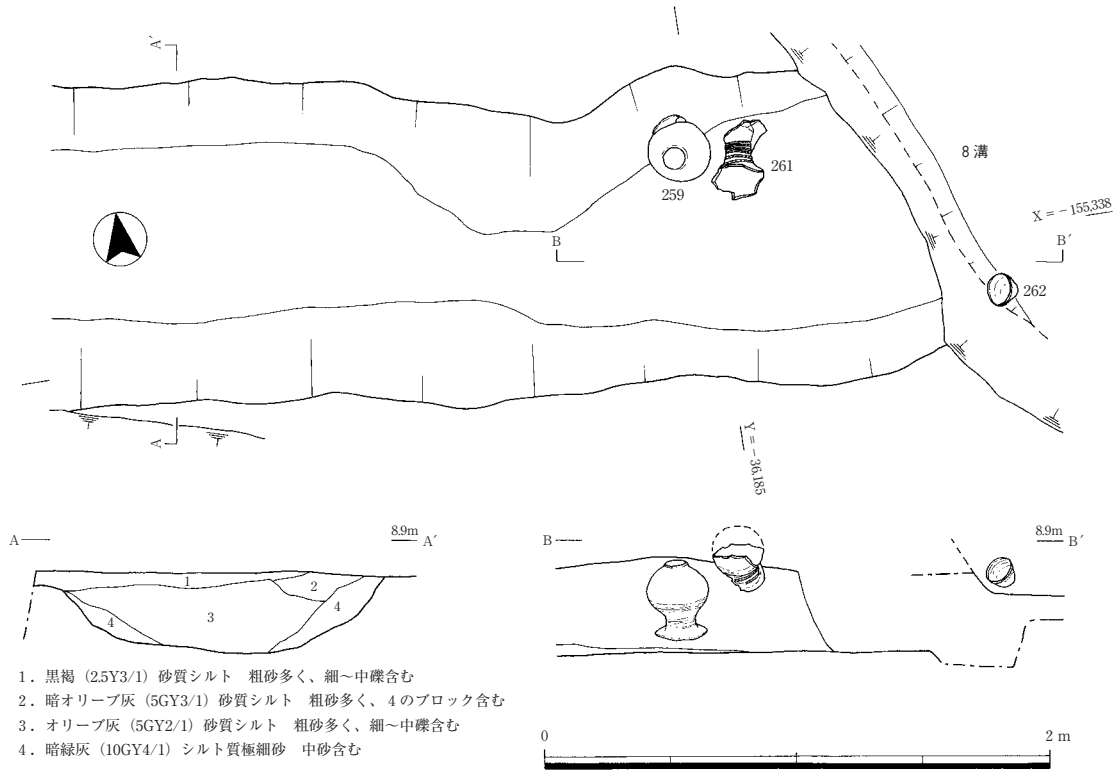


図23 57溝 平面・断面図

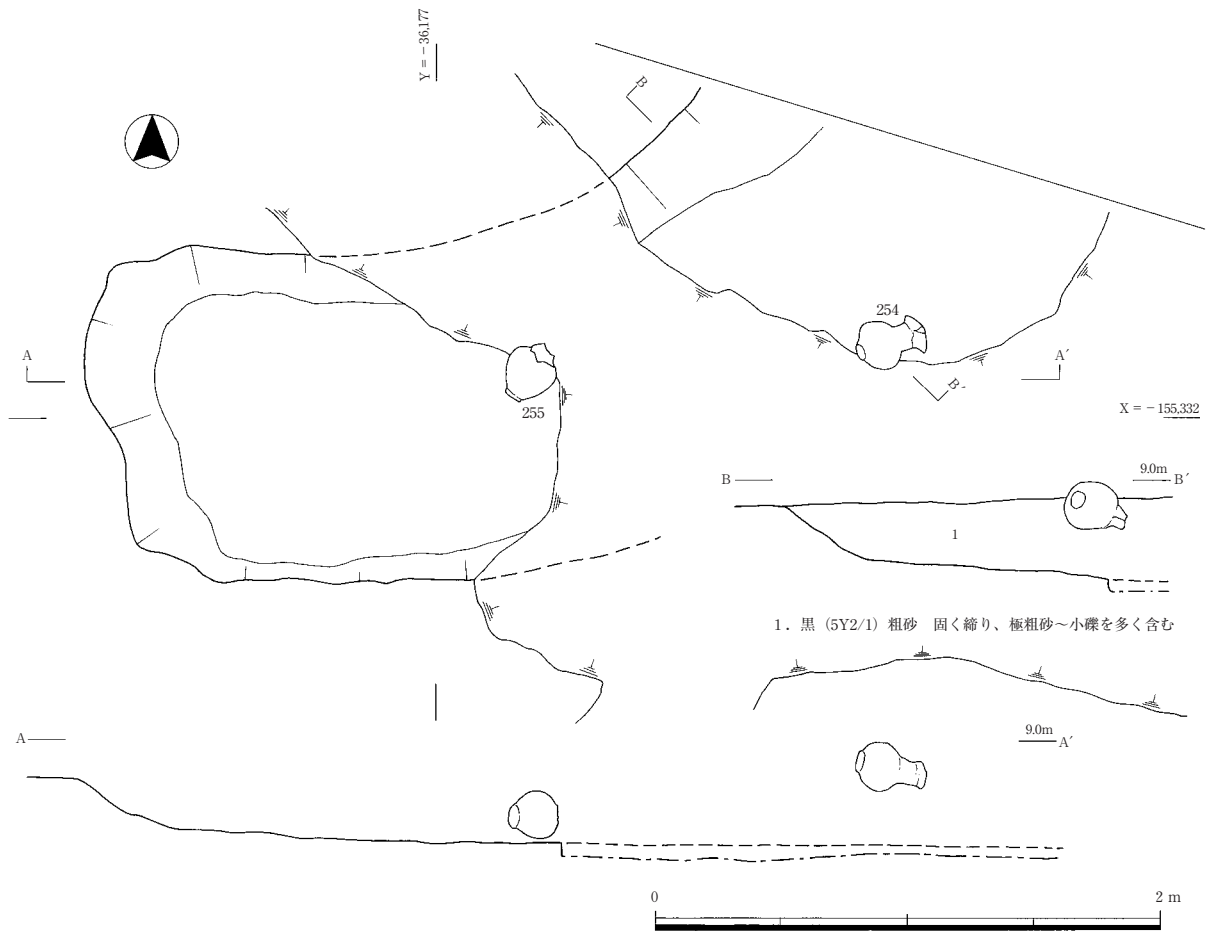


図24 28溝 平面・断面図

第2節 遺構

が北側に大きく広がることはないように思われる。暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂質シルトを埋土として、深さは最大で0.10mを測る。弥生前期の土器片が3点出土している。

〔溝〕 (図18・23～25)

57溝が9 d - III・IV区と10 d - III区で検出された。東西方向に延びる溝であるが、その東側は第5面の8溝で、西側は4層下底部や排水用の側溝でそれぞれ断ち切られている。なお57溝は、東端部では北向きに西端部では南向きにわずかに屈曲しているが、9 d - III区の58溝と10 d - IV区の66溝も位置関係からみると57溝の一部になると思われ、その場合に溝全体は緩やかな逆S字形を呈することになる (図18)。直線的な長さは13.00m、溝幅と深さは断面A A' の位置で幅1.28m・深さ0.33mを測る。57溝からは完形土器が出土している (図23)。頸部と肩部に3条の沈線文帯がみられる広口壺 (259) は溝の北側法面に接するようにして倒立状態で検出された。ただし溝の底面には接していない。また頸部に多条の貼付突帯を施文した広口壺 (261) が、この土器と交叉する様に溝の上部で口縁部を北に向けほぼ横倒しの状態で出土した。この土器は検出当初は完形に近い状態を留めていたが、遺存状態が極めて劣悪で、取り上げた時点では頸部から肩部と底部を留めるのみになってしまった。こうした壺とは別に、口縁部に連続した爪形の刺突文を施した小形の鉢 (262) も出土している。この土器は、実は第5面の8溝法面を精査中に検出したもので、8溝を流れる湧水によって土器周辺の土砂が押し流されて露出状態になったため、57溝調査以前に取り上げを済ませていたものである。57溝上部の南側法面近くで口縁部を西に向け横倒しの状態で遺存したものと思われる。57溝からは他に弥生前期土器片18点、58溝からは弥生前期土器片3点が出土している。

28溝が8 d - I・II区の調査区北辺で検出された (図24)。この溝は、調査区内では東北東 - 西南西

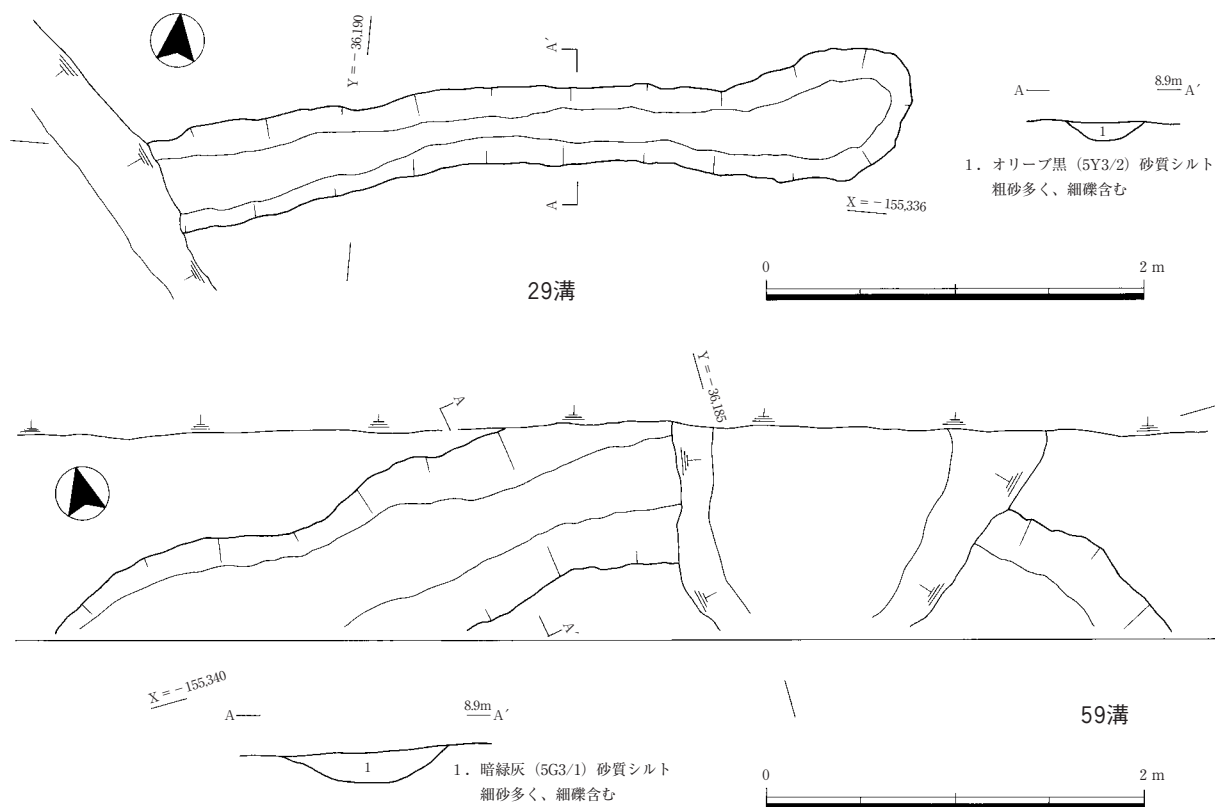


図25 29・59溝 平面・断面図

方向に緩く弧を描いて延びているが、北側は調査区外になるため全体的な形状や長さは分らない。調査区北辺については排水と土層断面の観察を兼ねて調査当初から側溝を掘削していたため、28溝についてもその一部が側溝で断ち切られただけではなく、激しい湧水・流水によって大きく浸食されることになった。したがって溝の規模も明確ではないが、幅は西側の端部付近で1.30m程、深さは0.26～0.33mである。溝の埋土は極めて単純で極粗砂や細～中礫を含む固く締まった黒色粗砂層の一層である。溝からは2個体の完形土器が出土しており、いずれも全体をヘラミガキ調整した無文の広口壺である。一つは溝の上部で検出した壺(254)で、口縁部を東北東に向け横倒しの状態で出土した。他の一つは溝の底面近くで検出した壺(255)で、口縁部を北北東に向け横倒しの状態で出土した。なお両者の間には20cm程度のレベル差が認められる。他に縄文晩期土器片2点、弥生前期土器片58点が出土している。

29溝は9d-Ⅳ区と10d-Ⅲ区で検出された東西方向に延びる細い溝である(図25)。57溝の北側にあたり、その西側部分とほぼ平行している。長さは西端部が断ち切られているため明確ではないが、現存長4.03mを測り、幅と深さは断面A A'の位置で幅0.40m・深さ0.10mである。縄文晩期の土器片1点、弥生前期の土器片17点が出土している。

59溝は9d-Ⅲ・Ⅳ区と9e-Ⅰ・Ⅱ区で検出された(図25)。ここは調査区南辺にあたり、溝は北側にやや突出するように緩やかな弧を描いているが、多くの部分は調査区外にあるものと思われる。なおこの溝は攪乱坑によって東西に分断され、北側も側溝によって削られている。調査を実施できた範囲が小さく全体の形状・規模は全く不明だが、側溝と銅矢板に挟まれた断面A A'の位置では幅0.80m・深さ0.17mを測る。59溝からは弥生前期の土器片が43点、サヌカイト片が2点出土している。

62溝は8d-Ⅳ区で検出された北東-南西方向の溝である(図18)。南西方向に向けて徐々に浅くなっており、南西側の端部を明確に捉えることができなかつたが長さは4.80m以上になるとと思われる。溝幅は広い部分で1.28m、狭い部分で0.60mを測り、深さは最大0.21mを測る。なお溝の北東部は先述したように60土坑の南西部と重複している。弥生前期の土器片8点が出土している。

### 第3節 遺物

05-1-1 調査区からはおよそ3500点の遺物が出土した(表1)。このうち重機で除去した溜池等の整地土を除き、人力で掘削した溜池底の堆積土および木樋の埋め戻し土からなる攪乱層では、出土遺物総点数の6分の1にあたる約600点が出土している。また出土遺物の大半は弥生時代前期の土器片であるが、弥生時代前期に相当する5層および第6面からは約1750点の弥生土器が出土し、次いで攪乱層から約500点の弥生土器が出土している。ここでは、これらの遺物について土器、石器、土製品の項目に区分して掲載・記述する。

なお土層断面図(図8)からもわかるように、溜池の掘削や木樋・井戸の埋設によって5層や第6面の遺構等は著しく削られており、これら攪乱層出土の多量の遺物も本来の包含層から遊離・再堆積したものと考えられる。この攪乱層からは溜池に投棄された近・現代の雑器や食物残渣も出土しているが、一方では施文された大きな土器片も含まれている。こうした遺物は、もちろん位置情報の欠落した2次的な資料ではあるが、本来は5層等に包含されていた弥生前期の遺物と推測されることから、この報告書では各層・各遺構出土土器の後に攪乱層出土土器として掲載・報告し、攪乱層出土の石器や土製品に



第3節 遺物

層・面	遺構	縄文	弥生	土師器	須恵器	黒色	瓦器椀	土師皿	石器	その他
攪乱層	溜池堆積土	1	484	12	8		1		9	蛤、蜆、骨、陶器、スプーン、木、土製円盤1 瓦2、瓦質土器1、(磨製石斧片)、他
	木樋等埋土	1	27	4	1			1		陶器3
	不明		2							
2層			6	136	25		7	11	1	陶器1
3層		1	44	295	32				3	ミニチュア甕1
4層		5	316	48	9				2	(Y長頸壺1、H縄蓆文1)
5層		10	871						4	土製円盤2、軽石1
(6層)		2	14							【22土器棺墓下層】
第4面	5土坑		49	16					1	(長頸壺2、石包丁片1)
第5面	15ピット		2							
	10土坑		17						1	(石包丁1)
	11土坑		3							
	8溝		23						2	
	9溝		6							
	12溝		4							
	14溝		23							土錘1
第6面	22土器棺墓		2							【棺】(太頸広口壺1、鉢1)
		1	40							【棺内】
			32							
	31ピット		3							
	34ピット		43							
	35ピット		7							
	38ピット	1	21							
	41ピット		21							
	42ピット		3							
	43ピット		5							
	47ピット		27						1	木1
	55ピット	1	8						1	
	56ピット		1							
	25土坑		8	1						
	26土坑	1	24						6	(広口壺1)
	30土坑	1	42							
	40土坑	1	5							
	48土坑	1	50							
	52土坑		29							
	53土坑		50							
	54土坑		22							
	60土坑		54							(広口壺1)
	61土坑		5							
	63土坑									匙形土製品1
	23落ち込み		43						1	輪状土製品1
	27落ち込み		42							
	44落ち込み	5	41							
	45落ち込み	1	75							
	51落ち込み		3						2	
	28溝	2	60						1	(広口壺2)
	29溝	1	17							
	57溝		21							(広口壺2、小形鉢1)
	58溝		3							
59溝		43						2		
62溝		8								
合計		36	2749	512	75	0	8	12	37	

表1 05-1-1 調査区出土遺物数量表

についても各項目の中で適宜掲載した。

各層および遺構出土の遺物は表1のとおりであるが、0・1層と第1～3の遺構面からは遺物は出土しなかった。

## 2層出土の土器

2層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦器椀、土師器小皿、陶器など約200点の土器が出土した。土師器が最も多く136点、次いで須恵器が25点である。土師器には坏、高坏、甕、把手等があり、須恵器には蓋坏、高坏、甕等がある。いずれも小片で図化できる資料は認められなかった。

## 3層出土の土器（図26、図版9・14・20）

3層からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器など約370点が出土している。最も出土点数の多い土器は土師器295点で、次いで弥生土器44点、須恵器32点である。2層の土器と同じように小片が多く、図化できる資料は少ない。

土師器には坏、高坏、器台、小形壺、甕、把手等がある。1は全体にナデ調整された坏で口径14.0cm・高さ3.8cm。2は高坏の小片で摩滅が著しい。3は小形の器台。全体にヘラミガキ調整され、坏部は欠損、脚部の3方向に円孔がみられる。4～6は小形の高坏。4は小片で内面にヘラミガキ調整痕が遺る。5はハケ調整後にヘラミガキ調整され口径15.2cm。6も同様の調整で脚部の3方向に円孔があり口径15.0cm・高さ12.1cm。7と8は中形の高坏。7は摩滅が顕著であるが口縁部の内外面にヨコナデ調整痕が遺り、口径17.2cm・高さ14.1cm。8の坏部はナデ調整、脚部はハケ調整後にナデ調整、脚部に円孔2ヶ所と円形くぼみ3箇所があり、口径19.9cm・高さ13.1cm。9と10は小形の甕である。9の胴部はハケ調整後にナデ調整され、口径11.6cm・高さ14.2cm。10の口縁部から胴部上半は粗いハケ調整後にナデ調整、胴部下半はヘラケズリ調整され、口径12.4cm・高さ15.9cm。11と12は中形の甕。11は全体にハケ調整された後に口縁部から肩部はヨコナデ調整、口径13.6cm・高さ19.2cm。12はハケ調整後にナデ調整され、口径14.2cm。13は小形の壺であるが摩滅が著しく調整は不明である。

須恵器には蓋坏、甕、短頸壺等がある。14と15は蓋坏の身。立ち上がりの内傾度は14の方がやや強いが、口径はいずれも13.2cmである。16は蓋坏の蓋で天井部を欠損するがわずかに回転ヘラケズリ調整部が遺り、口径8.4cm。17は短頸壺で全体に回転ナデ調整される。

弥生土器には壺、甕等がある。18は壺の小片であり櫛描文が施文された黄橙色の土器である。19は壺の頸部片でくびれ部に刻目突帯が貼付され、肩部はヘラミガキ調整、生駒西麓産の胎土で暗灰黄色を呈する。20～22は底部である。いずれもヘラミガキ調整され、底面はわずかにくぼみ、底径はそれぞれ5.9cm、6.9cm、8.3cmを測る。

23は縄文土器深鉢の口縁部小片で、口縁端部に小O字を呈する刻目が施された突帯がみられる。生駒西麓産の胎土でオリーブ黒色を呈する。

3層からは古墳時代前期から中期の土師器がややまとまって出土するものの、全体としてみれば古墳時代全般および飛鳥時代の土器が出土している。また18の弥生土器は本調査区では唯一の弥生時代中期の資料である。

## 4層出土の土器（図27、図版13・20）

4層からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が約380点出土している。最も出土点数の多い土器は弥生土器316点で全体の8割を占め、次いで土師器48点になっている。いずれも小片であり、特に土

第3節 遺物

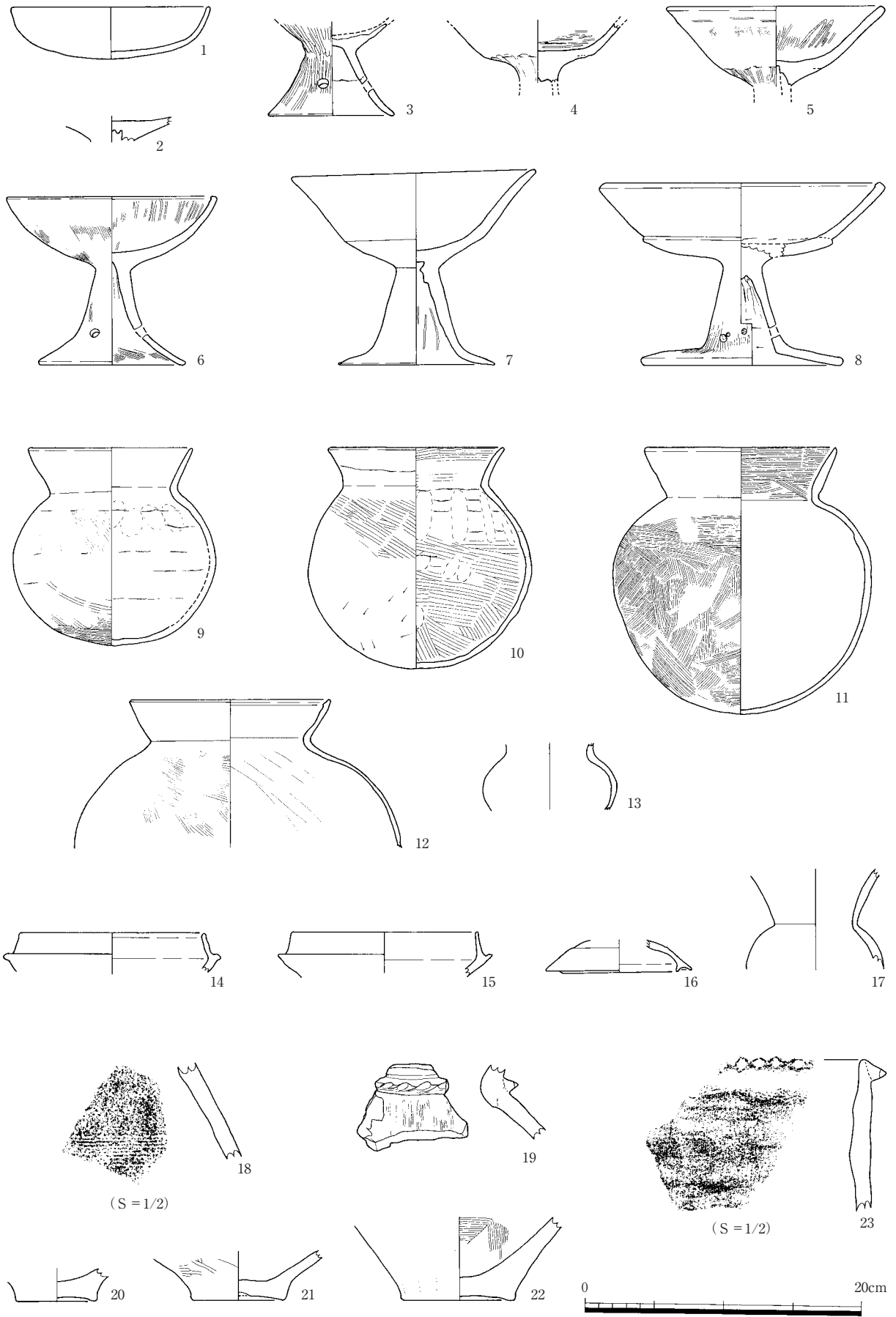


図26 05-1-1 調査区 3層出土の土器

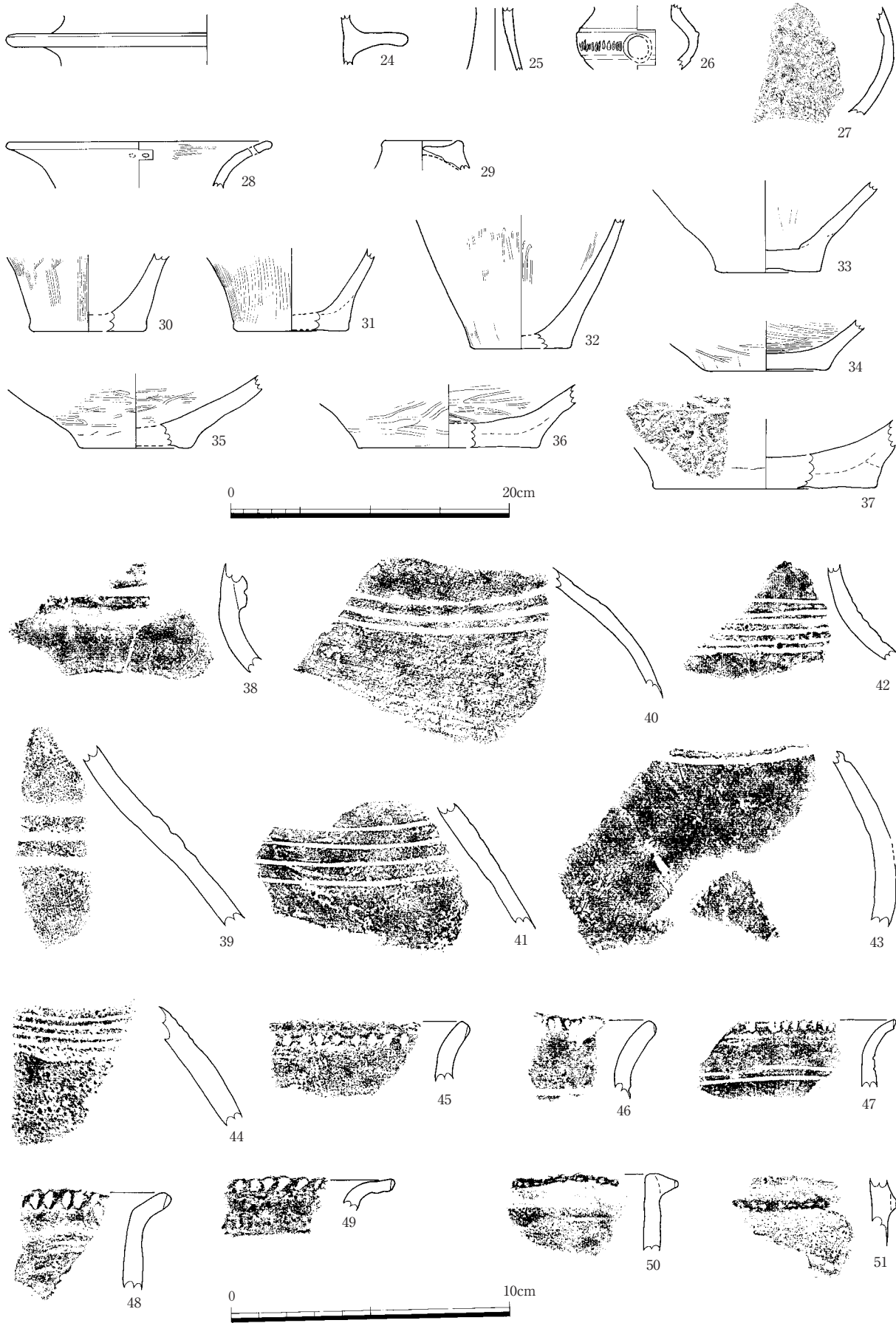


図27 05-1-1 調査区 4層出土の土器

### 第3節 遺物

師器等の無文の土器は図化できる資料が少なかった。

土師器には高坏、甕、羽釜等がある。25は高坏脚部で摩滅が著しい。24は羽釜の小片である。27はとりあえず小形の壺あるいは甕の胴部下半として図化したが、器形は判然としない。外面に縄蓆文（タタキ）がみられ、韓式系土器である。胎土は密で砂質感が強く、長石・くさり礫などをわずかに含んでいる。内外面ともに黒色の付着物で覆われているが、これは漆ではないかと考えられる。

須恵器には蓋坏、甕、甕等がある。26は甕の胴部片で上部は回転ナデ調整、下部はナデ調整、沈線で区画された刺突文帯がみられる。

弥生土器には広口壺、甕、蓋、底部等の破片がある。28・38～44は広口壺の破片である。いずれの器面も摩滅しており調整は明確ではない。28は口縁部破片で2個1組の紐孔が穿たれ、口径は18.4cm。38～44は頸部から胴部の破片である。38と39には沈線1条が加えられた削出突帯がみられる。40は沈線3条であるが、上端の沈線は部分的にヘラミガキ等が施されて段状になる〔井藤1983〕（こうした手法については沈線／削出と表記し、この場合は沈線／削出段となる）。41は間隔の広い沈線4条、42は間隔の狭い沈線6条である。43と44は欠損のため沈線の条数は不明である。45～49は甕の口縁部破片である。いずれの口縁部も短く外反した形態を示し、端部には刻目が施されている。調整は摩滅のため明瞭ではないが、48にはヘラミガキ調整が施されている。また46には沈線1条、47には沈線2条がみられる。29は蓋の天井部破片で、甕の蓋と思われる。30～37は底部の破片。胴部の傾きが強いもの（30～32）と緩やかなもの（33～37）があり、それぞれ概ね甕と壺に対応するものと思われる。いずれも底面はほぼ平坦であり、30と31がハケ調整、32・34～36がヘラミガキ調整、33と37がナデ調整である。なお37の底面には木の葉の葉脈が認められる。また31の胎土には角閃石が若干含まれている。

縄文土器は無文の土器片も含めて5点出土しているが、有文の2点を掲載した。50は刻目突帯文の深鉢口縁部、51は同じく胴部の破片である。いずれも調整は不明瞭であるが刻目は小O字を呈している。角閃石や雲母を含む生駒西麓産の胎土である。

#### 5層出土の土器（図28～32、図版11～14・16・17・20）

5層からは10点の縄文土器と871点の弥生土器が出土している。無文・小片の土器片がほとんどで図化できないものも多いが、有文の土器片については多くの資料を掲載・報告できるように努めた。

弥生土器には広口壺、大形壺、甕、鉢、蓋、底部等がある。このうち広口壺の文様としては、文様上・下端の削出が不明瞭な削出突帯文を主体に、沈線文や貼付突帯文等をみることができる。

52～58は広口壺の口縁部破片である。これらの口径は52が16.7cm、53が17.4cm、54が20.8cm、55が16.0cm、56が14.9cm、57が16.1cm、58が24.1cmを測る。調整はほとんどが横方向のヘラミガキ調整で、52のみ縦方向になっている。頸部文様としては55で削出突帯＋沈線、56で沈線3条、57で貼付突帯＋刻目がみられる。なお52と53には紐孔が穿たれている。また53は胎土に角閃石や雲母が含まれている。

59は2 I - 10 d - I区で出土した土器で、口頸部を欠失した広口壺の胴部片である。やや扁平な形態を呈し、最大径32.7cm・底径10.2cmを測る。外面は横方向のヘラミガキ調整、内面はナデ調整が施され、肩部に沈線6条が巡っている。なお胴部下半の2ヶ所に焼成後の穿孔が認められる。にぶい黄橙色を呈し、胎土には長石や石英の粗・極粗砂が多く含まれている。60は2 I - 8 d - III区で出土した広口壺の頸部から胴部片である。胴部最大径26.1cm・底径8.7cmを測る。外面には縦・横方向のヘラミガキ調整、内面にはナデ調整が施され、頸部に削出突帯（沈線の有無は不明）、肩部に低い削出段＋沈線4条（ただし欠失部分が多いため段の作出に先行する沈線の有無は不明）が巡る。外面は灰褐色、内面はにぶい

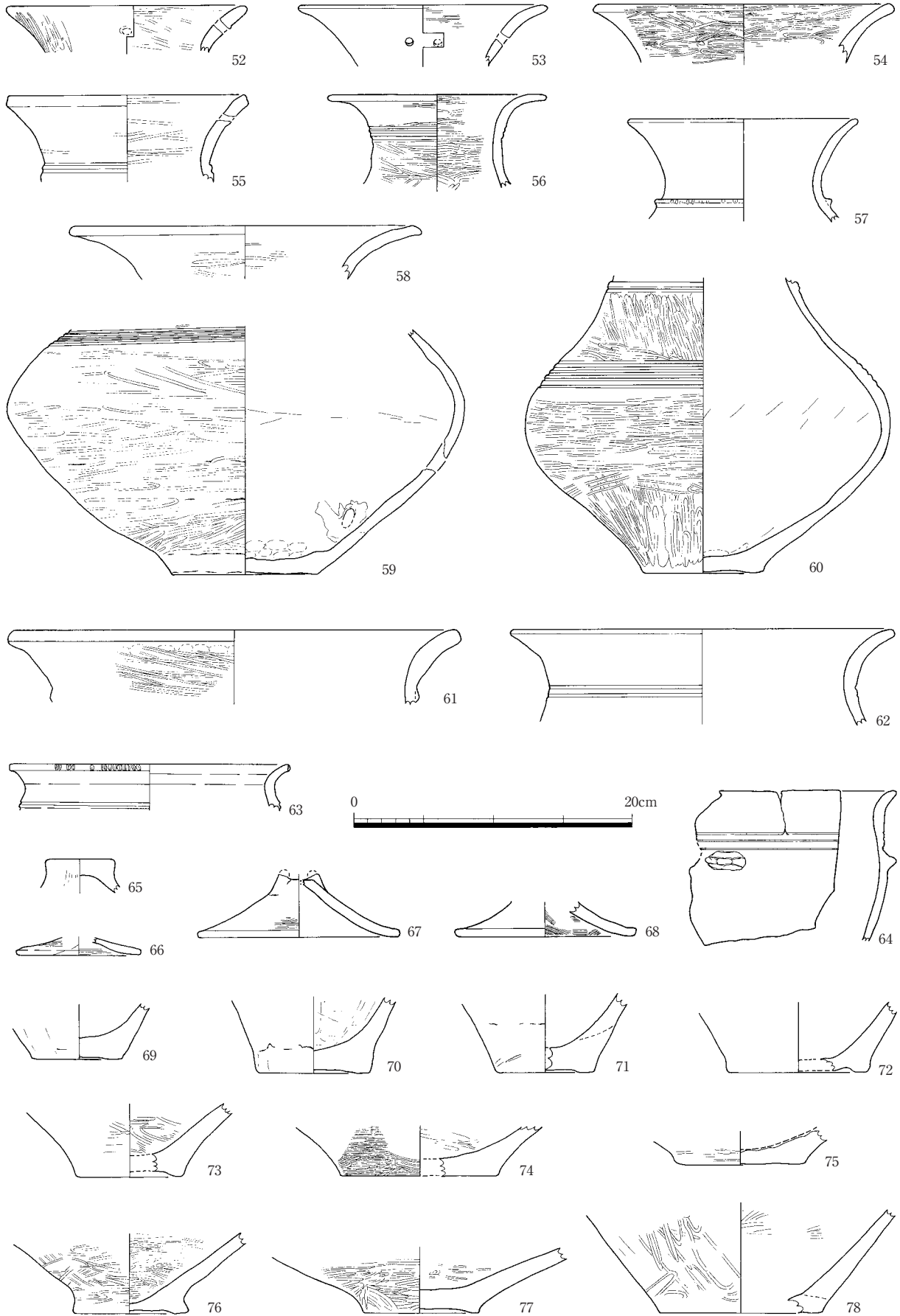


図28 05-1-1 調査区 5層出土の土器 (1)

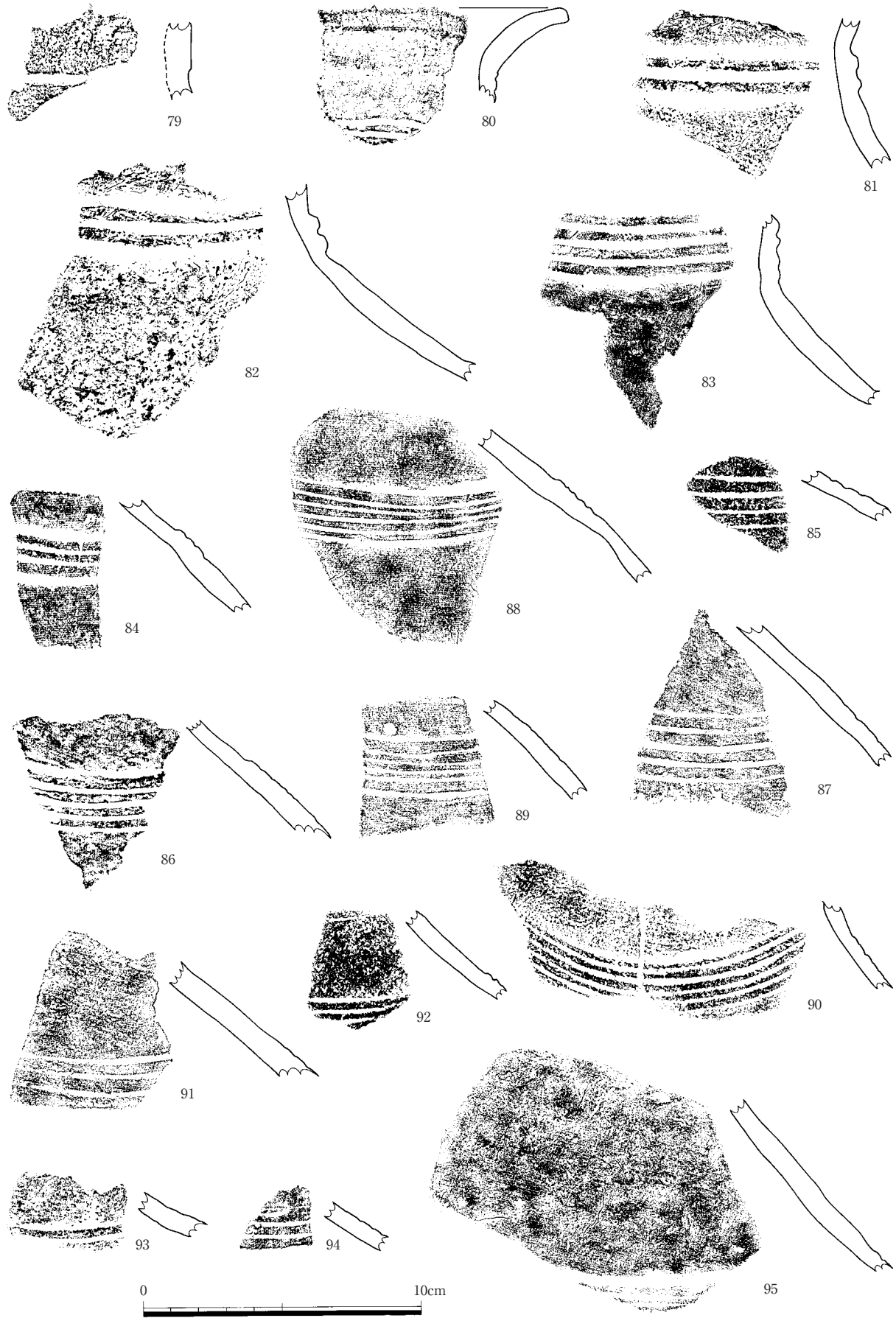


図29 05-1-1調査区 5層出土の土器(2)

赤褐色を呈し、角閃石や雲母を多く含む生駒西麓産の胎土である。

79～95も広口壺の破片である。79は口縁部の小片で段がみられる。80も口縁部の小片で沈線2条がみられる。81～83は頸部の破片で削出突帯に沈線1条あるいは3条が加えられている。84～95は頸・胴部間の破片で低い削出突帯や沈線が施文されているが、その手法には様々なバラエティがあり、84はやや高い削出突帯+沈線2条、90は低い削出突帯+沈線4条、88は沈線/削出突帯+沈線4条、85と86は削出段+沈線3条あるいは4条、87は沈線/削出段+沈線4条、89は削出突帯（下端は沈線/削出）+沈線4条等の手法がみられる。なお89には削出突帯文の上側に円形の浅い凹みがあるが、これは円形浮文が剥離した痕跡であろう。また91～95には削出段+沈線文帯がみられるが、破片のため段であるのか削出突帯であるのかははっきりしない。これらの土器の器面調整については、摩滅して不明瞭なものが多くみられるものの、ヘラミガキ調整された土器がほとんどであり、胎土については88・89・91・95の土器で角閃石や雲母が多く含まれている。

96～107・110も広口壺の頸部から胴部の破片である。96～99には沈線文がみられるが条数は不明である。100には2条を1単位として沈線文と斜線文が施文されている。101～105には刻目の施された貼付突帯がみられ、その中には103のように沈線文と組み合わせられるものもあるが、104と105の沈線は突帯の貼付位置を下描きしたものである。107は部分的に剥落しているが巴状の文様を貼付したもので、破片の下側は削出段になっている。110は乳頭状の突起を連続的に貼付したものである。これらの土器の器面調整は、摩滅のために不明瞭なものも多いが、ほとんどヘラミガキ調整が施され、胎土には96・103～106の土器に角閃石や雲母が顕著に混入されている。

61・62・108・109は大形の壺である。61は口径31.1cmを測り、器面はヘラミガキ調整され、頸部に形骸化した断面三角形の突帯がみられる。62は口径26.7cmで、頸部に沈線2条が施文されている。108は頸部に沈線、109は頸部に削出突帯がみられる。

63・111～144は甕の破片である。小片が多く器形を実際に復元できるものはみられなかったが、その中で63は唯一口径が復元できる土器である。口径20.0cmと推測され、刻目を施した如意形口縁で肩部の張出しがやや強く、頸部に沈線を2?条施文したものである。甕の器形については、112も63に類似して肩部の張出しが強いものの、ほとんどは口縁部が緩く外反する如意形口縁で倒鐘形と推測される。また多くの甕が口縁端部に刻目を施しているが、113～115のように施されないものもある。頸部の文様については有文のものとして113・115のように無文と推測されるものがあり、有文の117～120・131等は沈線2条、121～125・132～139等は沈線3条、125・141は沈線4条が施文されている。また142では沈線2条を1単位とする沈線文と斜線文が、143では沈線2条の間に矢羽根状の刺突文が、144では沈線2条を1単位とする沈線文帯の間に竹管文が施文されている。これらの土器の器面調整はほとんどがハケあるいはナデ調整で、胎土については115・121・123で角閃石や雲母がやや目立っている。

64・145・146は鉢の破片である。いずれも小片で口径等を復元できるものはない。64は摩滅が著しい破片であるが、口縁部が緩く外反し把手が付く鉢で、頸部には沈線3条が施文されている。一方145・146の破片では頸部の沈線は1条である。

66～68・147・148は蓋の破片である。66は径9.0cm、67は径14.1cm、68は径13.0cmを測る。67の天井部には、現状では欠失しているが2個1対の突起が付くものと思われる。また147では縁に沿って削出突帯が巡り、148では天井部から放射状に2条を1単位とする沈線文が施文されている。なお65・67・69で胎土に雲母や角閃石が含まれている。



第3節 遺物

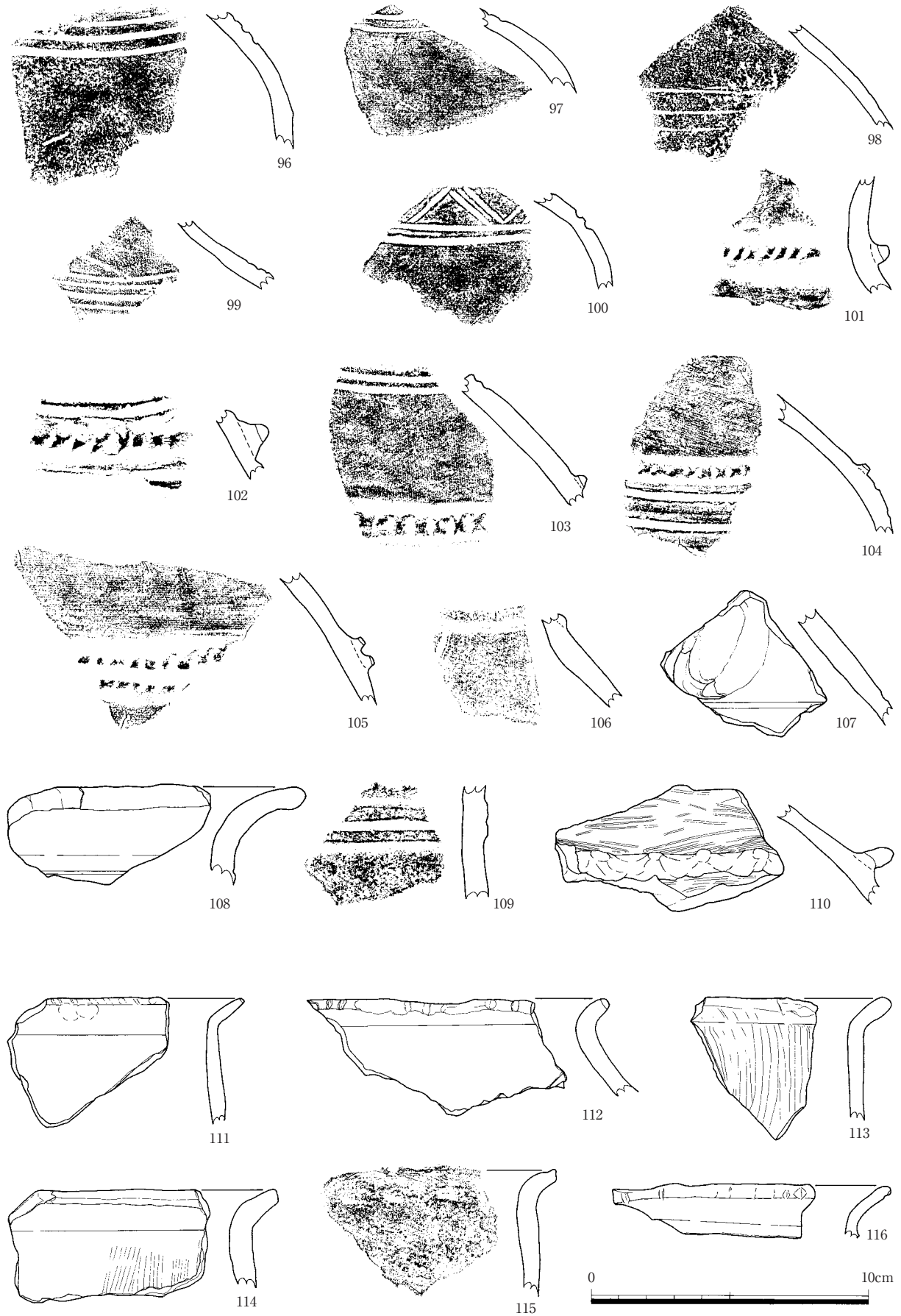


図30 05-1-1調査区 5層出土の土器(3)

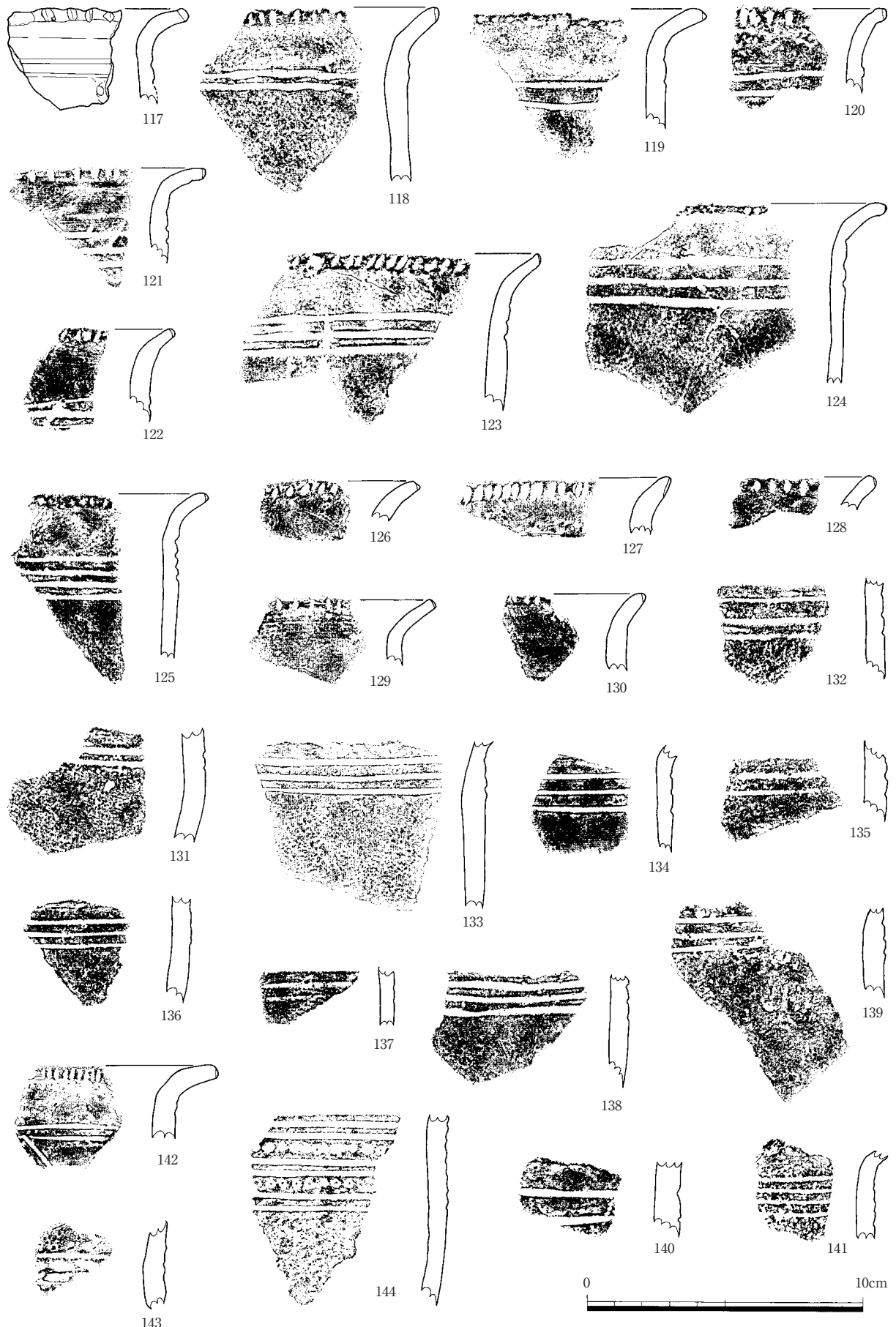


図31 05-1-1 調査区 5層出土の土器 (4)

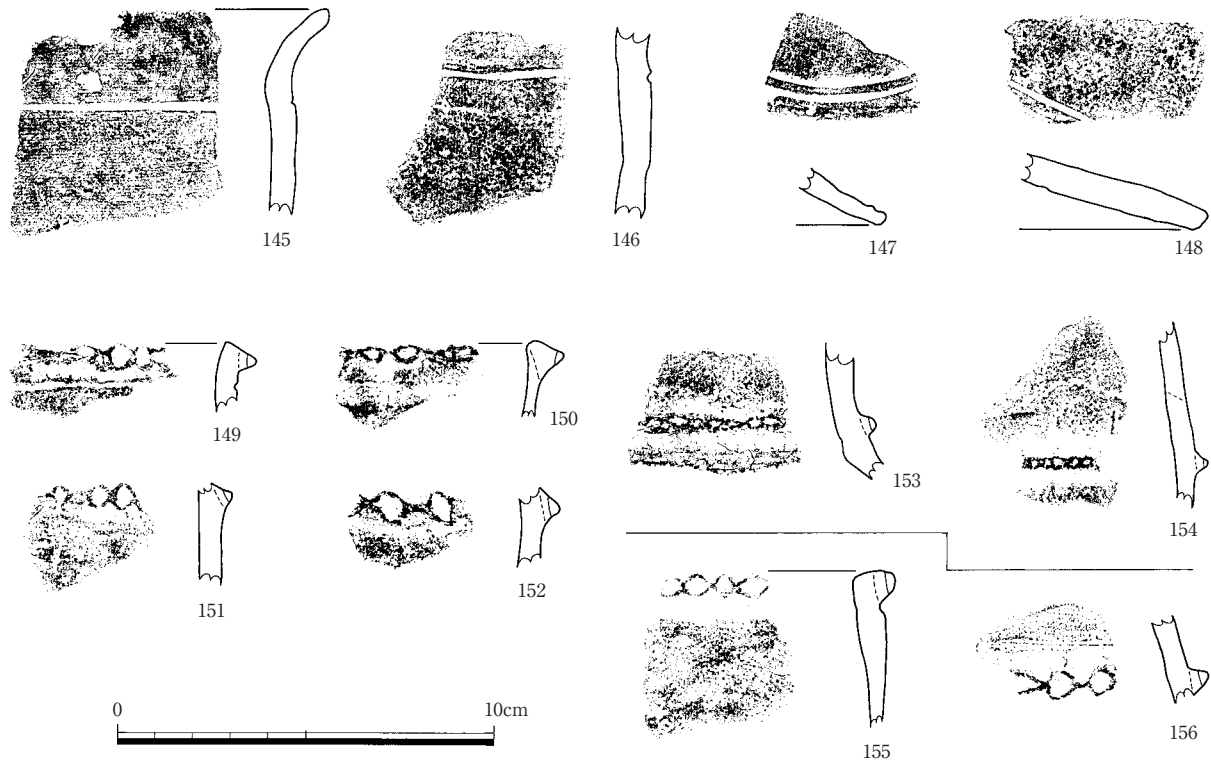


図32 05-1-1調査区 5層出土の土器(5)、6層出土の土器

69～78は底部の破片である。底径は69が6.5cm、70が8.0cm、71が7.0cm、72が10.4cm、73が7.8cm、74が11.2cm、75が9.4cm、76が8.3cm、77が8.3cm、78が11.6cmを測る。底面は平坦なものとならずに凹面になるものがあり、胴部下半の傾斜には緩やかなものと急なものとみられる。器面の調整は、摩滅してはつきりしないものもあるが、ほとんど丁寧にヘラミガキ調整されている。なお69・75～78の胎土には角閃石や雲母が目立つ。

縄文土器片は10点出土しており、有文の土器片6点を掲載した。いずれも縄文晩期の刻目突帯文土器深鉢である。149と150は口縁端部に突帯が付され刻目はO字状である。151～154の胴部破片にも突帯がみられ、151と152にはO字状の刻目、153と154には小O字状の刻目が施されている。また149・150・154の胎土に角閃石や雲母が含まれている。

#### 6層出土の土器 (図32、図版20)

6層からは第6面22土器棺墓の下層で縄文土器片2点と弥生の無文土器片14点が出土した。いずれも小片であり、有文の縄文土器片を掲載した。155は縄文晩期刻目突帯文土器の深鉢口縁部片で、端部に接してO字の刻目をもつ突帯が貼付されている。156は同じく胴部片で、D字の刻目をもつ突帯が貼付されている。どちらの土器の胎土にも角閃石や雲母が含まれている。

#### 第4面遺構出土の土器 (図33、図版9・10)

第4面の5土坑から弥生土器片と土師器片が65点出土した。小片が多く図化できたものは少ないが、比較的大きな破片の3点を掲載した。157は土師器の坏で、口径15.0cm・高さ3.9cm、外面はヨコナデ調整、底面はユビオサエの後にナデ調整、内面は放射状のヘラミガキ調整が施されている。胎土は密、色調はにぶい黄橙色を呈している。158は弥生時代後期の長頸壺の口縁部片である。口径10.3cm・口頸部の長さ14.0cmを測り、外面はヘラミガキ調整、口縁部はヨコナデ調整されている。なお頸部下半に朱が

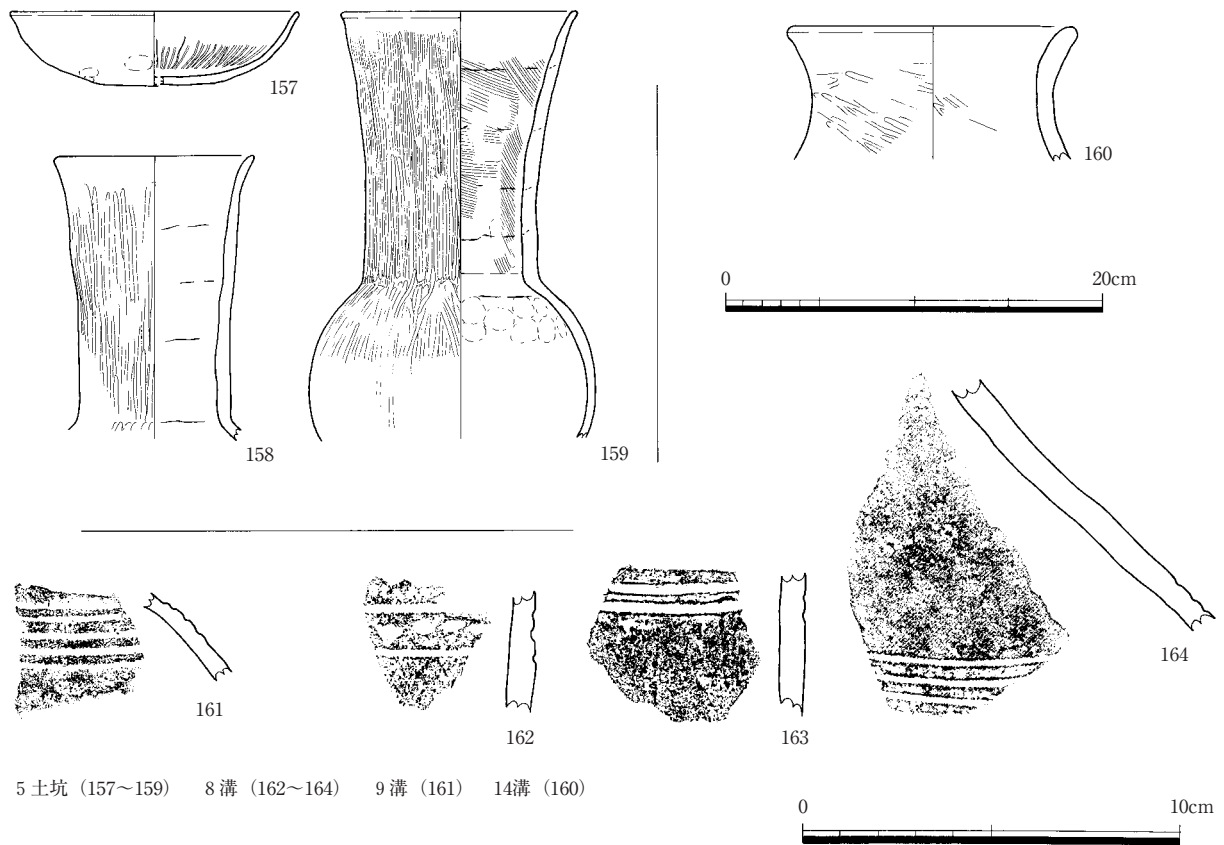


図33 05-1-1 調査区 第4面・第5面遺構出土の土器

遺存する。159も長頸壺で胴部下半を欠失している。口径12.0cm・口頸部の長さ14.5cmを測り、外面はハケ調整の後にヘラミガキ調整、口縁部はヨコナデ調整、内面はハケ調整の後にナデ調整が施されている。158・159ともにはぶい黄橙色を呈し、胎土には角閃石や雲母が含まれている。

**第5面遺構出土の土器** (図33、図版12・13・16)

第5面の遺構からはおよそ80点の弥生土器片が出土したが、やはり小片あるいは無文のものが多く図化できるものは少ない。ここでは8・9・14溝出土の資料を掲載した。

162~164は8溝から出土した弥生土器片である。164は広口壺の肩部片で、ヘラミガキ調整が施された器面には沈線が3?条施文されている。162と163は甕の頸部片で、162には2条の沈線間に刺突文が、163には2条の沈線が施文されている。なお163の胎土には雲母や角閃石が若干含まれている。

161は9溝出土の広口壺肩部片で、文様は削出段+沈線4条である。

160は14溝出土の広口壺口縁部片で、口径14.5cmを測る。頸部は短く口縁部はあまり外反しない。全体に摩滅しているが、内・外面ともにヘラミガキ調整が施されており、にはぶい橙色を呈する。

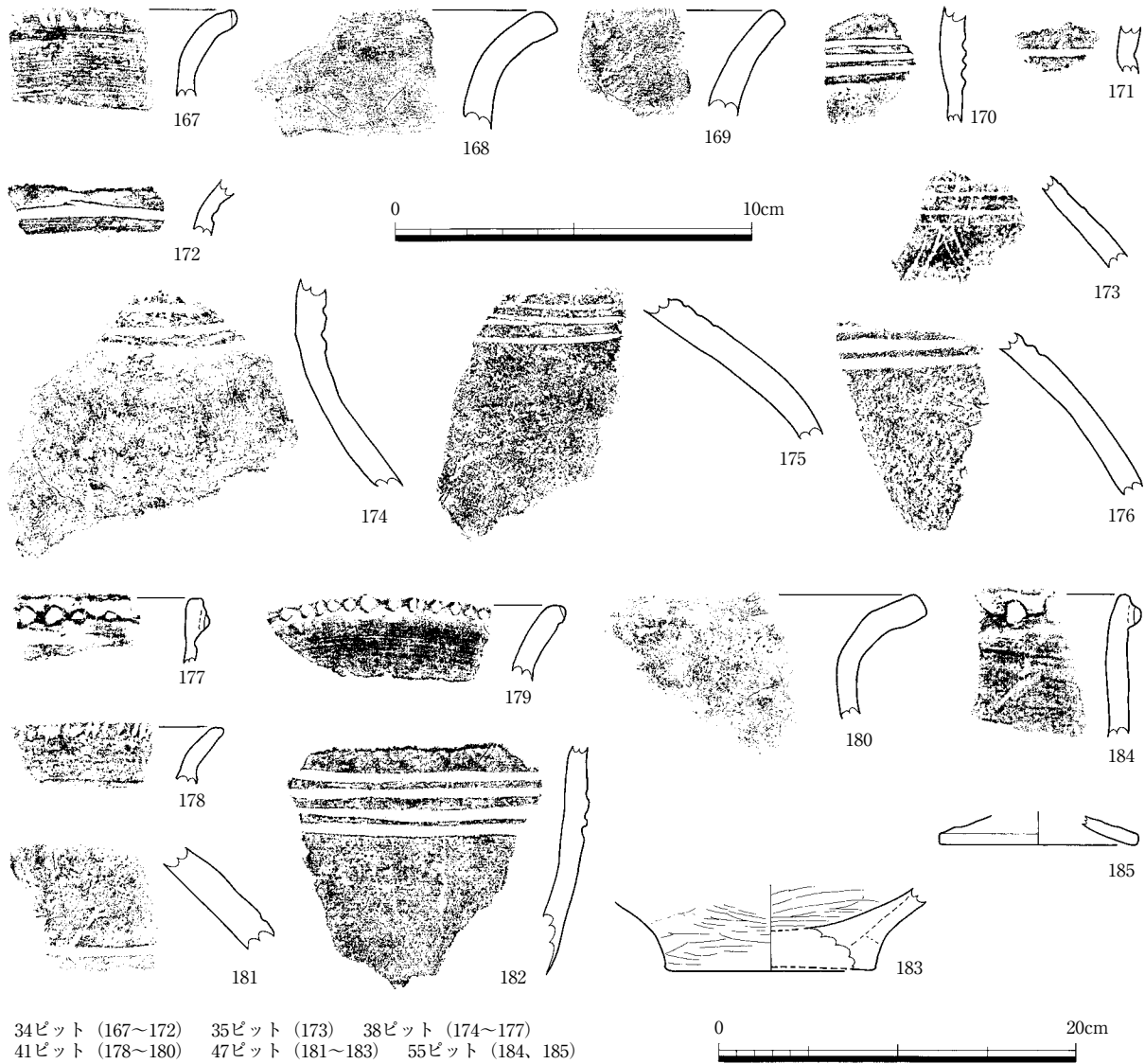
**第6面遺構(22土器棺墓)出土の土器** (図34・37、図版10・20)

22土器棺墓から土器棺と約70点の土器片が出土した。土器片には土器棺の未接合破片も含まれ、加えてほとんどが小片・無文片であるため、ここでは土器棺の他に縄文土器片1点(図37)を掲載した。

165と166は土器棺の土器である。このうち165は蓋として使用されていた鉢である。口径38.8cm・底径10.3cm・高さ28.7cmを測る。口縁部は短く緩く外反する如意形口縁で、底面はほぼ平坦である。器面



図34 05-1-1 調査区 22土器棺墓で使用された土器



34ピット (167~172) 35ピット (173) 38ピット (174~177)  
 41ピット (178~180) 47ピット (181~183) 55ピット (184, 185)

図35 05-1-1 調査区 第6面ピット出土の土器

調整としては、外面はヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラミガキ、底面はナデの各調整が施され、口縁部外面には整形のためのユビオサエ痕が遺存している。また頸部には沈線が2条施文されている。色調は明赤褐色を呈し、胎土には長石・石英の極粗砂や細礫が多量に含まれている。166は身として使用された大形壺（太頸広口壺）である。口径32.8cm・胴径48.7cm・底径10.5cm・高さ58.6cmを測る。口縁部は短く外反し、全体高のほぼ中央位置に最大径があり、底面はほぼ平坦である。外面の器面調整には、口縁端部はヨコナデ、口縁部は横方向のヘラミガキ、頸部はタテハケ後に横方向の粗いヘラミガキ、胴部上半はヨコハケ後に縦・横方向の粗いヘラミガキ、胴部下半はタテハケ後に縦・横方向の粗いヘラミガキ、底面はナデの各調整が施されている。一方内面は横あるいは斜め方向のヘラミガキ調整が施されている。また文様としては口頸間に沈線が3条、頸胴間に沈線／削出段＋沈線3条が施文されている。色調は橙色を呈し、胎土は165の鉢に類似している。

なお、棺内から出土した縄文土器片197は図37に掲載した。縄文晩期刻目突帯文土器の深鉢口縁部片で、口縁端部に接して突帯が貼付され刻目はD字を呈している。胎土には角閃石や雲母を含む。

第6面遺構（ピット）出土の土器（図35、図版14・20）

第6面で検出されたピットでは、31・34・35・38・41～43・47・55・56の各ピットから縄文土器片2点、弥生土器片139点が出土している。いずれも小片であり、無文土器片が多い。

167～172は34ピット出土の弥生土器片。167～169は甕の口縁部片で、167には口縁端部に刻目が施されている。170～172は甕の頸部片で、170には削出段（下）＋沈線3条、171と172には沈線1?条が施文されている。

173は35ピット出土の弥生土器片で、壺の肩部片である。沈線4条とその下に沈線による重弧文が施文されている。

174～177は38ピット出土の土器片である。174～176は弥生土器の壺片で、174には削出突帯＋沈線2?条、175には削出段＋沈線3条、176には沈線3条が施文されている。177は縄文晩期刻目突帯土器の深鉢口縁部片である。突帯は口縁端部からやや下がった位置に貼付され、刻目はO字を呈する。胎土には角閃石や雲母が含まれている。

178～180は41ピット出土の弥生土器片である。178と179は甕の口縁部片である。ともに口縁端部には刻目がみられるが、178の頸部には沈線が施文されている。180は壺の口縁部片で、摩滅が顕著であるが頸部にわずかに沈線の痕跡が遺存する。

181～183は47ピット出土の弥生土器片である。181は壺の肩部で沈線が2?条みられる。182は甕の胴部で太い沈線が4条施文され、胎土には角閃石や雲母が混入されている。183は壺の底部と思われ、底径は11.8cmを測り、外面は丁寧にヘラミガキ調整されている。

184と185は55ピット出土の土器片である。185は弥生土器の蓋片で径10.8cmを測る。184は縄文晩期の深鉢口縁部片である。口縁端部からわずかに下がった位置に突帯が付され、突帯上の刻目はO字を呈し、胎土には角閃石や雲母が含まれている。

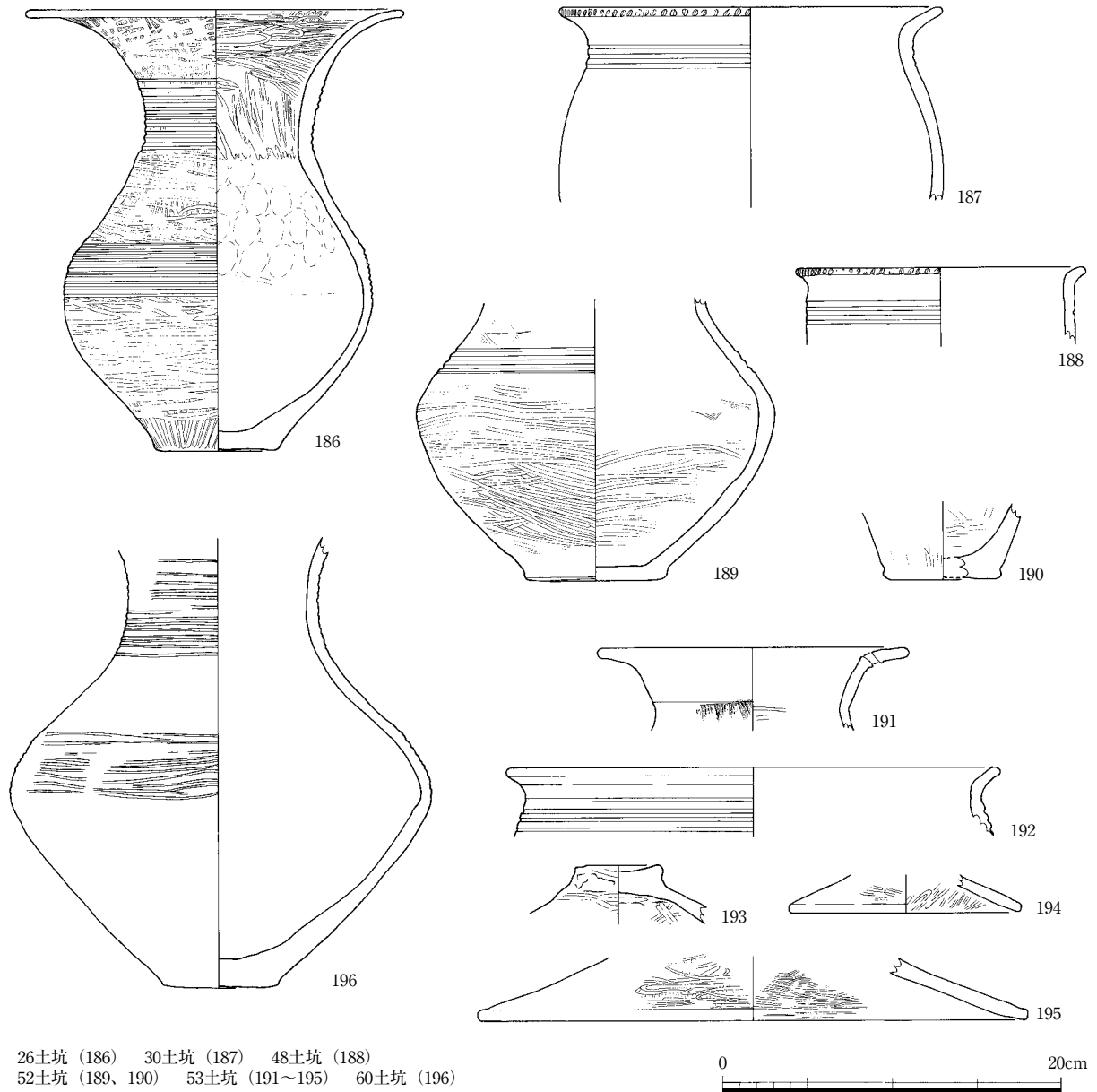
第6面遺構（土坑）出土の土器（図36・37、図版11～17・20）

第6面で検出された土坑では、25・26・30・40・48・52～54・60・61の各土坑から縄文土器片4点、弥生土器片289点が出土した。このうち25土坑では土師器の小片1点が出土しているが、これは重複している第5面10土坑の掘削等により混入したものと判断した。

186と198は26土坑出土の弥生土器である。186は広口壺で口径22.0cm・胴径18.2cm・底径7.2cm・高さ26.0cmを測る。口縁部は大きく外反し胴部は球形に近い。外面の調整としては口縁端部にヨコナデ調整、底面にナデ調整、口縁部から底部にタテハケ調整後に縦方向にヘラミガキ調整と横方向のヘラミガキ調整が加えられている。一方内面の調整としては口頸部にヘラミガキ調整、その他にナデ調整が施されているが、頸胴間にはユビオサエ痕が明瞭に遺る。文様としては10条の沈線を1単位とする沈線文帯が頸部と胴部上半に施文されている。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には石英や長石の粗・極粗砂が含まれる。198は壺の肩部片で、器面は横方向にヘラミガキ調整され、沈線による下描きの上に2条の刻目突帯が貼付されている。胎土には角閃石や雲母をわずかに含んでいる。

187と199は30土坑出土の弥生土器である。187は甕の口縁部から胴部片で口径22.0cmを測る。胴部上半がやや張出した器形に特徴があり、全体にナデ調整が施されている。口縁端部に刻目、頸部に沈線3条がみられる。199は壺の肩部片で削出突帯＋矢羽根状刺突文が施文されている。

200は40土坑出土の縄文土器。晩期の深鉢片で、器形としては頸胴間でほとんど屈曲せず、ここに小O字を呈する刻目突帯が貼付されている。胎土には角閃石や雲母を含んでいる。



26土坑 (186) 30土坑 (187) 48土坑 (188)  
52土坑 (189, 190) 53土坑 (191~195) 60土坑 (196)

図36 05-1-1 調査区 第6面土坑出土の土器 (1)

188と201~210は48土坑出土の土器片である。188は倒鐘形と推定される如意形口縁の甕片で、口径は16.5cmを測る。ナデ調整で、口縁端部に刻目、頸部に3条の沈線が施文されている。201~207は壺片であり、202は大きく外反する無文の口縁部、201・203~207は肩部片である。203には削出突帯、204には低い削出突帯+沈線3条、205には沈線3条、201には沈線4条、206には沈線による木葉?文、207には沈線4?条と貼付突帯がそれぞれ施文されている。208と209は甕片で、208は刻目のある口縁部、209は頸部で削出段(下)+沈線1条がみられる。210は縄文晩期刻目突帯文土器の深鉢口縁部片で、口縁端部から下がった位置に小O字の刻目が施された突帯が貼付されている。胎土には角閃石や雲母が含まれている。

189・190・211~213は52土坑出土の弥生土器。189は広口壺の胴部で、形は球形に近く、胴径21.2cm・底径8.2cmを測る。外面の調整には、頸部に斜め方向のヘラミガキ、胴部に横方向のヘラミガキ、底面にヘラミガキが施され、内面もヘラミガキ調整が施されている。文様としては肩部に沈線文4条が



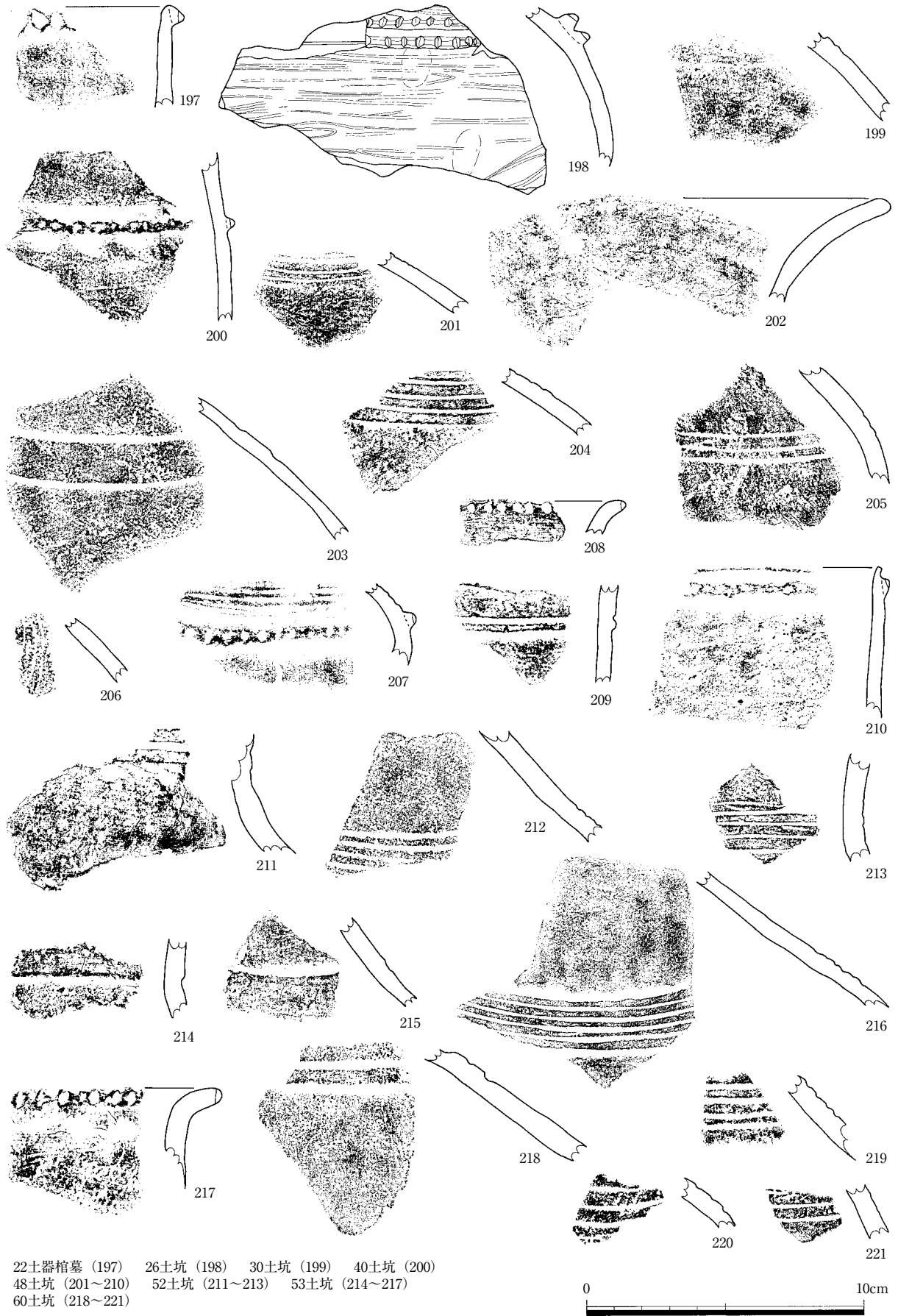


図37 05-1-1調査区 第6面土坑出土の土器(2)

みられる。190は底径7.0cmの底部片でヘラミガキ調整されている。211～213は壺片で、211は頸部に削出突帯＋沈線、213は頸部に沈線4?条、212は肩部に沈線4?条がそれぞれ施文されている。

191～195・214～217は53土坑出土の弥生土器。191・214～216は広口壺片である。191は口径17.8cmを測る口縁部で、紐孔が穿たれ、口頸間に低い削出段がみられる。214と215もほぼ類似したもので、214は口頸間、215は頸胴間に削出段がみられる。216はヘラミガキ調整された肩部片で削出突帯＋沈線4条が施文され、胎土には角閃石や雲母がわずかに含まれている。192・217は甕片である。192は口径29.0cmを測り、頸部に4条の沈線がみられる。217は口縁端部に刻目が施される。193～195は蓋片で、いずれも丁寧にヘラミガキ調整されている。194は径13.2cm、195は径32.0cmを測る。

196・218～221は60土坑出土の弥生土器。196は広口壺で口縁部を欠失する。胴部の形状は球形に近く、胴径24.8cm・底径6.7cmを測る。器面はかなり摩滅しており調整は不明瞭である。文様としては頸部に14条以上、胴部に10条の沈線が施文され、それぞれ沈線文帯を形成している。また色調はにぶい黄褐色を呈している。218～221も広口壺の肩部片で、218は削出突帯＋沈線、219・220は沈線4条、221は沈線3?条が施文されている。なお219の胎土には角閃石や雲母がわずかに含まれている。

#### 第6面遺構（落ち込み）出土の土器（図38、図版13～17・20）

第6面で検出された落ち込みからは、23・27・44・45・51の各落ち込みから縄文土器片6点と弥生土器片204点が出土した。一部には比較的大きな破片がみられるものの、そのほとんどは小片・無文土器片であり、図化・掲載できた資料は少ない。

222～224・233～237は23落ち込み出土の弥生土器片である。222と223は広口壺の口縁部。いずれもヘラミガキ調整されている。222は口径20.9cmを測り、内面に3条の沈線が施文されている。223は口径21.0cmで、紐孔が穿たれ、口縁端部に刻目を施してその中央に1条の沈線を引いている。233～237も広口壺の頸部から胴部片で、いずれもヘラミガキ調整され、233は削出段（あるいは突帯）＋沈線2?条、234は削出突帯＋沈線2?条、235と236は貼付突帯2条、237は沈線1?条がそれぞれ施文されている。なお236の胎土には角閃石や雲母が含まれている。224は蓋片で、径11.7cmを測り全体が丁寧にヘラミガキ調整されている。

225は27落ち込み出土の弥生土器壺の底部で、底径9.7cmを測り、胴部外面にはタテハケ調整の後に横方向のヘラミガキ調整、底面と内面にはヘラミガキ調整が施されている。胎土には雲母や角閃石がわずかに含まれている。

226・227・238～243は44落ち込み出土の弥生土器片で、244は同じく縄文土器片である。238～240は広口壺の頸部から胴部片で、238は沈線4?条、239は削出突帯＋沈線2?条、240は貼付突帯（剥落）と沈線2?条がそれぞれ施文されている。241と242は甕片で、241には頸部に沈線1条、242には頸部に沈線2?条がみられる。243は鉢の口縁部片で、口縁部は短く外反し、頸部に沈線が1条施文されている。226と227は底部片で、226は底径6.0cmを測りナデ調整、227は底径12.2cmを測りヘラミガキ調整が施されている。244は縄文晩期刻目突帯文土器深鉢の胴部片で、突帯上の刻目はD字を呈している。胎土には角閃石や雲母が含まれている。

228～232・245～251は45落ち込み出土の弥生土器片、252と253は同じく縄文土器片。228・245・246は広口壺である。228は口径15.5cmを測り、内外面ともにヘラミガキ調整、口縁端部はヨコナデ調整、口縁端部に沈線1条、頸部に沈線2条が施文されている。245は無文の口縁部片。246は削出突帯＋沈線1条が施文された頸部片。247～251は甕片である。247と248は口縁端部に刻目、249は口縁端部に刻目

第3節 遺物

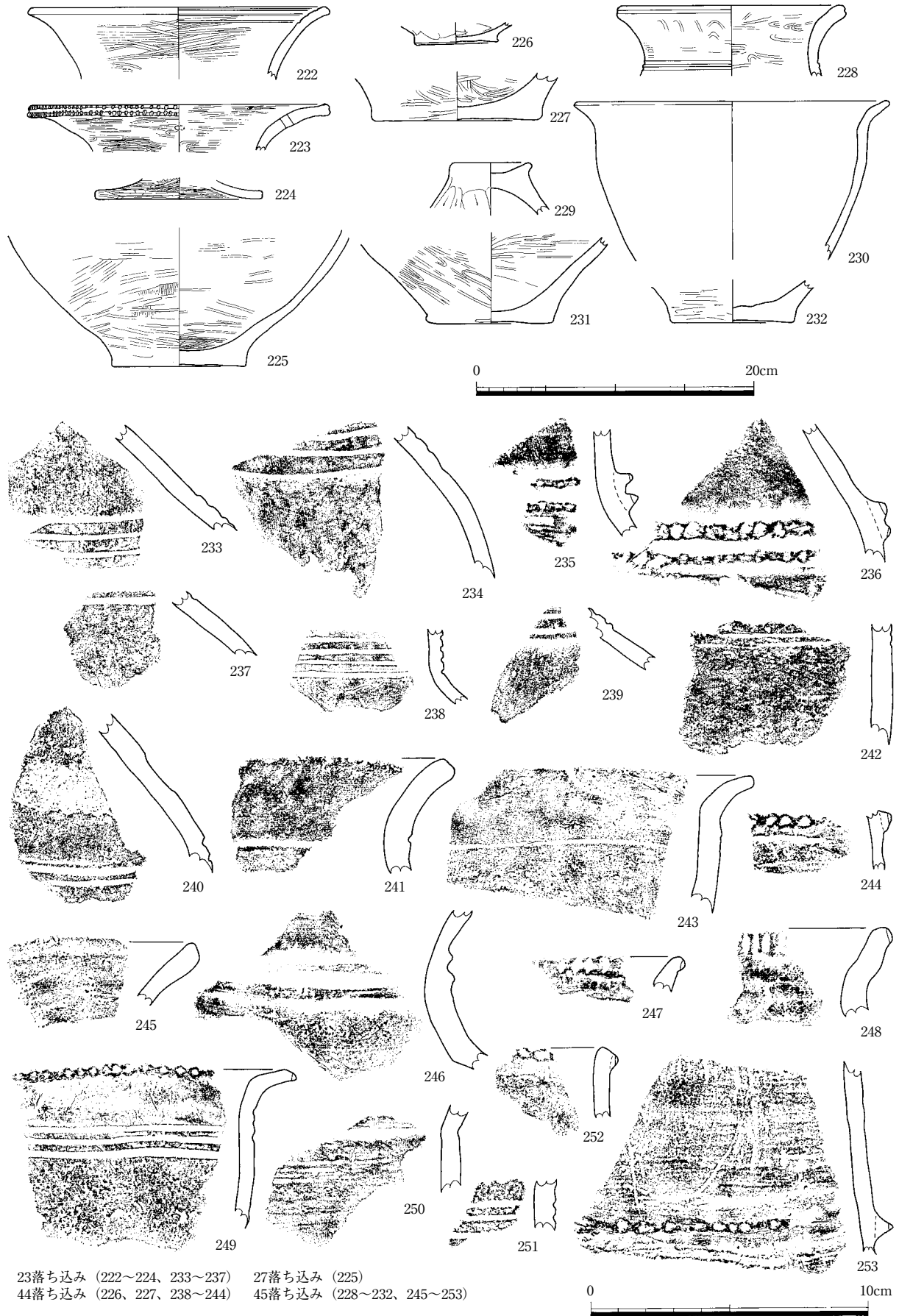


図38 05-1-1 調査区 第6面落ち込み出土の土器

と頸部に沈線3条、250は頸部に沈線1条、251は頸部に沈線3条がそれぞれ施文されている。230は鉢の口縁部から胴部片。口径22.0cmを測り、口縁部は短く外反し、全体がナデ調整された無文の土器である。229は蓋の天井部で外面はヘラケズリ調整されている。231と232は底部片。231は底径9.0cmでヘラミガキ調整、232は底径8.8cmでヘラケズリ調整からヘラミガキ調整されている。231の胎土には雲母や角閃石がわずかに含まれている。252と253は縄文晩期の刻目突帯文土器深鉢片。252は口縁部で、O字の刻目突帯が口縁端部に接して貼付されている。253は頸部と胴部の境に小O字の刻目突帯が貼付されているが、頸部には弧状の浅い沈線がみられ、何らかの幾何学文様が描かれている。なお253の胎土には角閃石や雲母が混入されている。

#### 第6面遺構(溝)出土の土器(図39・40、図版10~17・20)

第6面で検出された溝からは、28・29・57~59・62の各溝から縄文土器片3点、完形の弥生土器と土器片152点が出土した。完形の弥生土器は28溝と57溝で出土している。

254~258・272~274は28溝出土の弥生土器、275は同じく縄文土器。254は無文の広口壺。口径17.0cm・胴径21.0cm・底径7.0cm・高さ24.7cmを測る完形品。口縁部は強く外反し、胴部は算盤玉形に近く、底面はわずかに凹面になる。外面はハケ調整後に横・斜め方向のヘラミガキ調整、口縁部はヨコナデ調整、底面はナデ調整が施されている。また内面は口縁部から頸部は横方向のヘラミガキ調整、その他はナデ調整が施されている。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には石英や長石の極粗砂・細礫が含まれる。255も無文の広口壺。口径14.4cm・胴径21.6cm・底径9.0cm・高さ27.0cmを測る完形品。口縁部は外反し、最大径が胴部上半に位置するため頸部はやや短い印象を受ける。底面はわずかに凹面になる。内外面の調整は全体に横と斜め方向のヘラミガキであるが、口縁端部はヨコナデ調整、外面底部付近は縦方向のヘラミガキ調整が施されている。にぶい橙色を呈し、胎土には長石や石英の極粗砂・細礫が多い。272も広口壺の肩部片で、ヘラミガキ調整され、沈線7条が施文されている。273と274は甕片で、273は口縁端部に刻目、274は頸部に沈線2条がみられる。256は直口口縁で無文の鉢。口径18.5cmを測る。内・外面ともヘラミガキ調整、口縁端部はヨコナデ調整されている。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には長石や石英の極粗砂が多い。257と258は底部片で、257は底径5.8cmでナデ調整、258は底径9.2cmでヘラミガキ調整。275は縄文晩期刻目突帯文土器の深鉢口縁部片で、D字の刻目突帯が口縁端部に接して貼付され、胎土には角閃石や雲母が多い。

259~262は57溝出土の弥生土器。259は広口壺である。口径20.2cm・胴径27.0cm・底径9.3cm・高さ32.7cmを測る完形品。口縁部は外反し、胴部は球形に近く、底面は平坦である。外面の調整はタテハケの後に口縁部から胴部上半は横方向のヘラミガキ、胴部下半は縦方向のヘラミガキが施され、口縁端部はヨコナデ調整、底面はナデ調整である。一方内面は口縁部から頸部に横方向のヘラミガキ調整、その他にナデ調整が施されている。また文様としては頸部に沈線5条を1単位とする沈線文帯が2帯、肩部に沈線6条を1単位とする沈線文帯が施文されている。色調は灰黄色を呈し、胎土には角閃石や雲母が多い。260は広口壺の頸部から胴部片。ヘラミガキ調整され、頸部に沈線4条が遺る沈線文帯、肩部に5条1単位の沈線文帯がみられ、色調は褐灰色を呈する。261も広口壺。本来は完形に近かったと思われるが、かなり脆弱なため取り上げる過程で多くの部分が微細片化し、1個体として復元することが困難になった。頸部が長く、底面は平坦で径9.2cmを測る。外面は全体にヘラミガキ調整、内面は口縁部から頸部にかけてヘラミガキ調整、その他はナデ調整されている。文様には頸部に6条の貼付突帯、肩部に4条の沈線、胴部上半に突帯貼付位置を下描きした2条の沈線がみられる。色調は灰黄褐色を呈し、胎土に

第3節 遺物

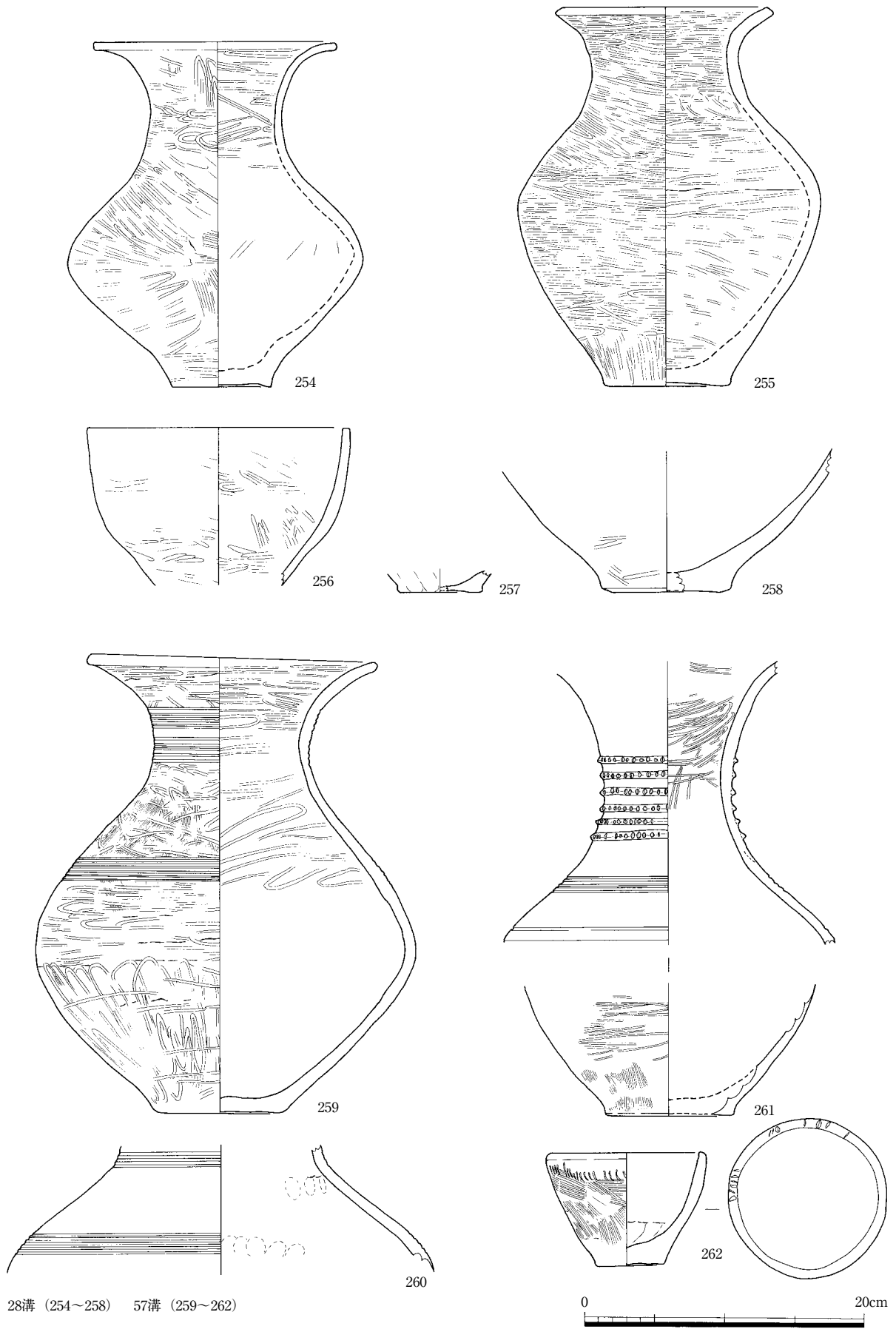
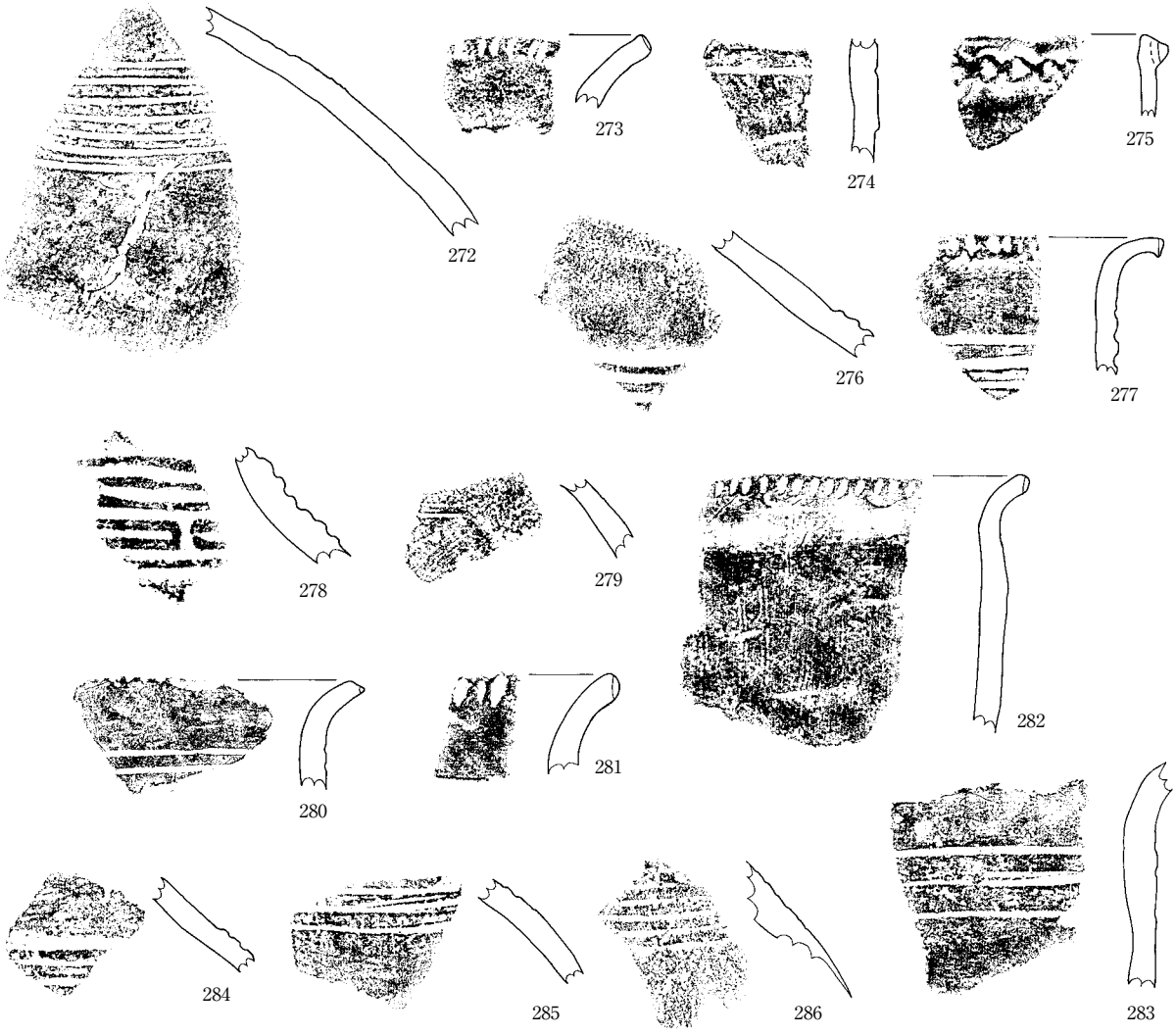
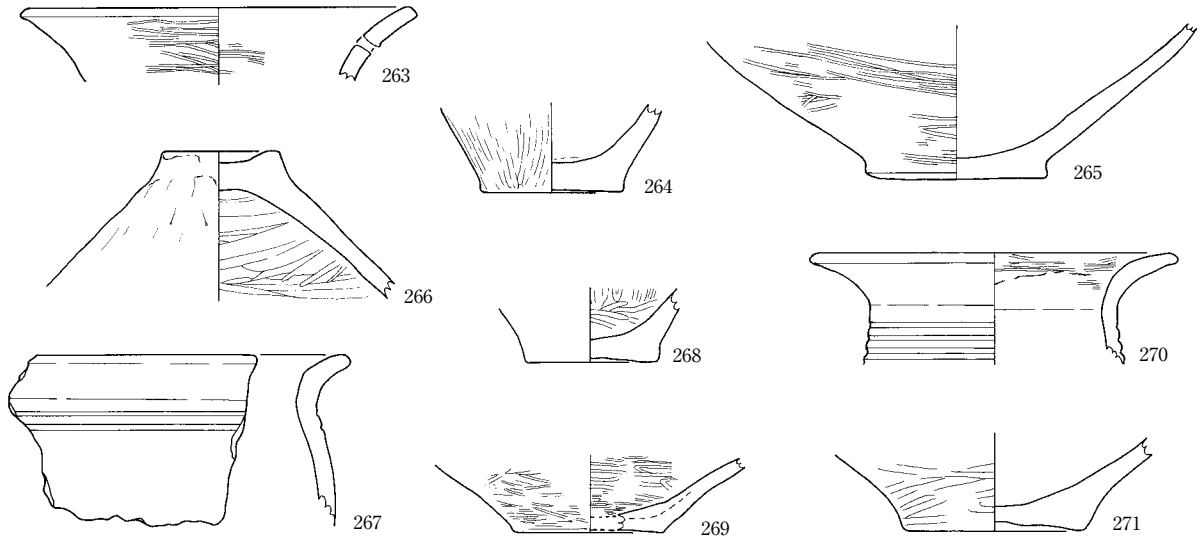


図39 05-1-1 調査区 第6面溝出土の土器 (1)



28溝 (272~275) 29溝 (263, 264, 276, 277)  
 58溝 (265) 59溝 (266~269, 278~283) 62溝 (270, 271, 284~286)

図40 05-1-1 調査区 第6面溝出土の土器 (2)

### 第3節 遺物

は角閃石や雲母が多い。262は小形の鉢。直口口縁で口径10.6cm・底径4.8cm・高さ8.1cmを測る完形品。外面はハケの後にナデ調整、内面はナデ調整。文様は口縁部に沿って刻目が巡るが、刻目は口縁端部の一部にも施されている。色調は黄橙色を呈し、胎土には長石や石英の極粗砂が多い。

263・264・276・277は29溝出土の弥生土器片。263は広口壺口縁部。口径20.0cmを測り、ヘラミガキ調整され、紐孔が穿たれている。276は広口壺肩部。削出段（あるいは突帯）+沈線3?条がみられる。277は甕口縁部。口縁端部に刻目と頸部に沈線3?条が施されている。264は底部。径7.6cmを測り、底面は平坦、外面調整はヘラミガキ。

265は58溝出土の弥生土器壺の底部片。底径9.7cmを測り、外面はヘラミガキ調整。

266～269・278～283は59溝出土の弥生土器片。278と279は広口壺の肩部。278には太く深い沈線で流水文、279には細く浅い沈線で平行斜線文が施されている。280～283は甕。280は口縁端部に小さな刻目と頸部に2?条の沈線、281と282は口縁端部に刻目、283は頸部に3条の沈線が施文されている。なお282の胴部はハケ調整され、胎土には角閃石や雲母がわずかに含まれている。267は鉢。口縁部は短く外反し、頸部に2条の沈線がみられる。266は蓋。外面はヘラケズリの後にナデ調整、内面はナデ調整。268と269は底部。268は底径7.1cmを測り、底面はやや凹面でナデ調整、内・外面ヘラミガキ調整。269は底径8.0cmを測り、底面は平坦でヘラケズリ調整、内・外面ヘラミガキ調整、胎土には角閃石や雲母がやや多い。

270・271・284～286は62溝出土の弥生土器片。270は広口壺。口縁部は強く外反する。器面の摩滅が著しいが内面にヘラミガキ調整痕が遺り、頸部に低い削出突帯+沈線3?条がみられ、色調は灰黄褐色を呈し、胎土には角閃石や雲母が多い。284～286は広口壺の肩部。284には削出段（あるいは突帯）+沈線2条、285には沈線3条、286には削出突帯+沈線5条がみられる。271は底部。底径9.8cm、底面は凹面、内・外面ともヘラミガキ調整。

#### 攪乱層出土の土器（図41～43、図版12～17）

攪乱層とした溜池底の堆積土および木樋・井戸側の埋め戻し土からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器椀、土師器小皿、瓦質土器、陶器の破片が出土している。弥生土器以外は小片・無文片であり、ここでは弥生土器を掲載する。

287～290は広口壺である。287は口縁部から肩部片。口径15.1cmを測り、口縁部は短く外反、摩滅が著しいがハケの後にヘラミガキ調整され、口頸間に削出段と頸胴間に削出段（あるいは突帯）+沈線1?条がみられる。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には石英や長石が多い。288は口縁部を欠失するものの完形に近い広口壺。胴径28.6cm・底径10.4cm・残存高28.9cmを測り、胴部はやや扁平で底面は平坦、摩滅が顕著だが外面は横方向のヘラミガキ、底面はケズリ、内面頸部は横方向のヘラミガキ、その他はナデの各調整が施され、頸部に3条1単位、肩部に4条1単位とする沈線文帯が施文されている。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には石英や長石の極粗砂が多い。289は胴部片。胴径36.6cmを測り、摩滅により調整は不明、2条の貼付突帯があり、色調はにぶい褐色を呈し、胎土には角閃石や雲母を含む。290は胴部から底部片。胴径23.4cm・底径8.8cmを測り、形状はほぼ球形で底面は平坦、摩滅が著しいがヘラミガキ調整痕が遺る。

307～326も広口壺である。307は口縁部片。内面に3条の沈線が施文されている。308～326は頸部から肩部片。308は削出突帯+沈線2条、310・312～314は削出突帯+沈線3条、315は削出突帯+沈線4条、311は沈線/削出段+沈線4条がそれぞれ施文されている。また316は沈線2条と沈線の重弧文、

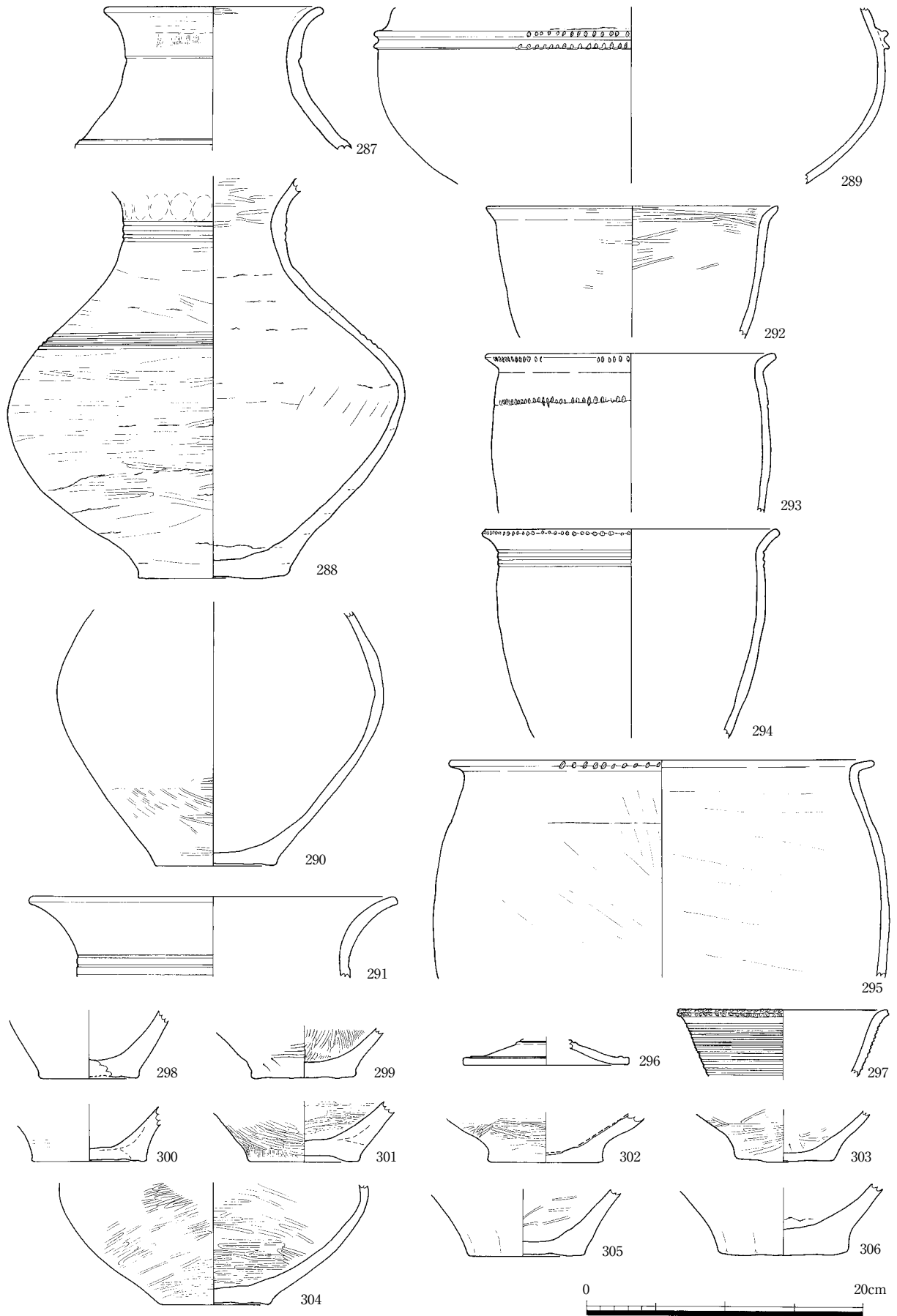


図41 05-1-1 調査区 攪乱層出土の土器 (1)



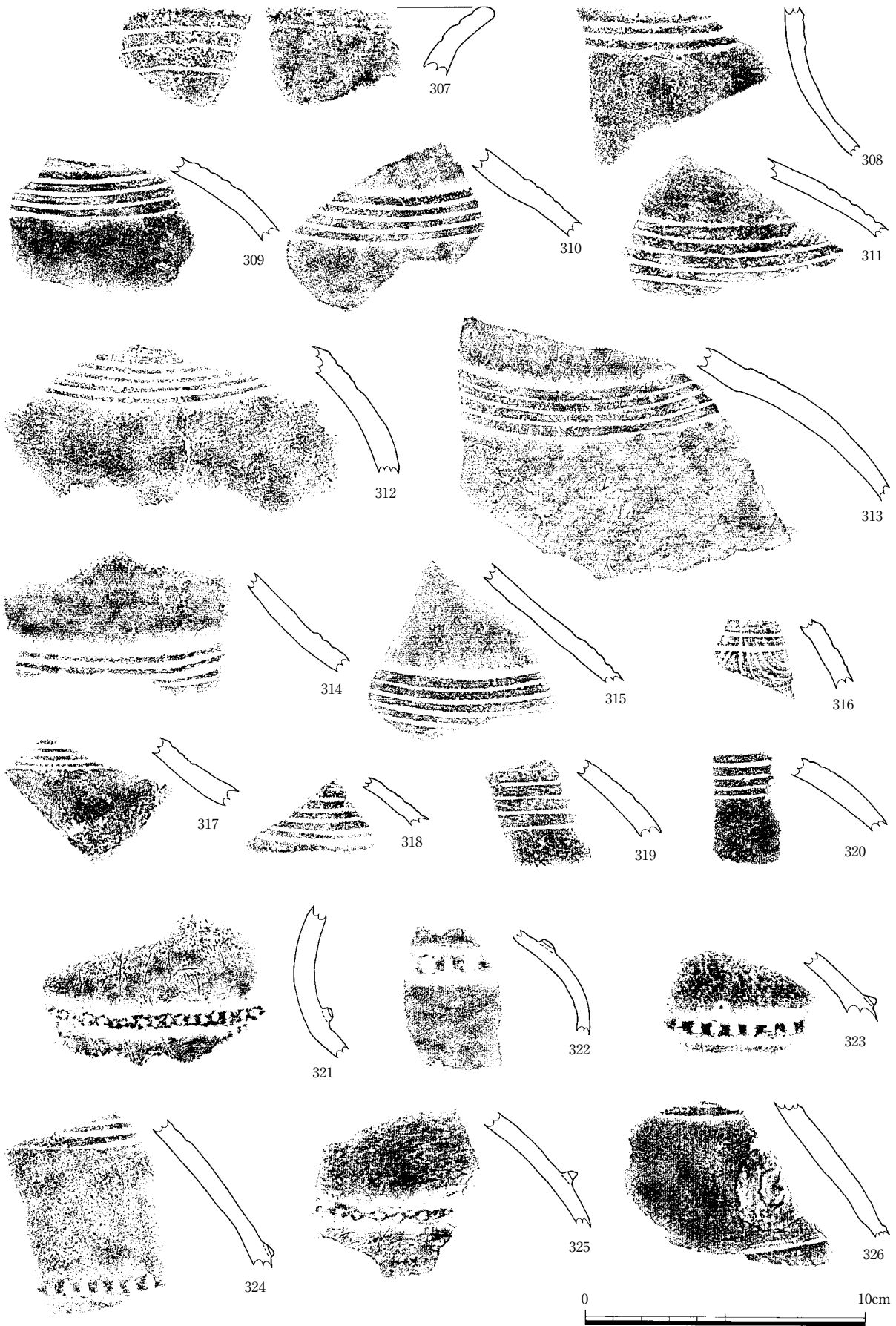


図42 05-1-1 調査区 攪乱層出土の土器 (2)

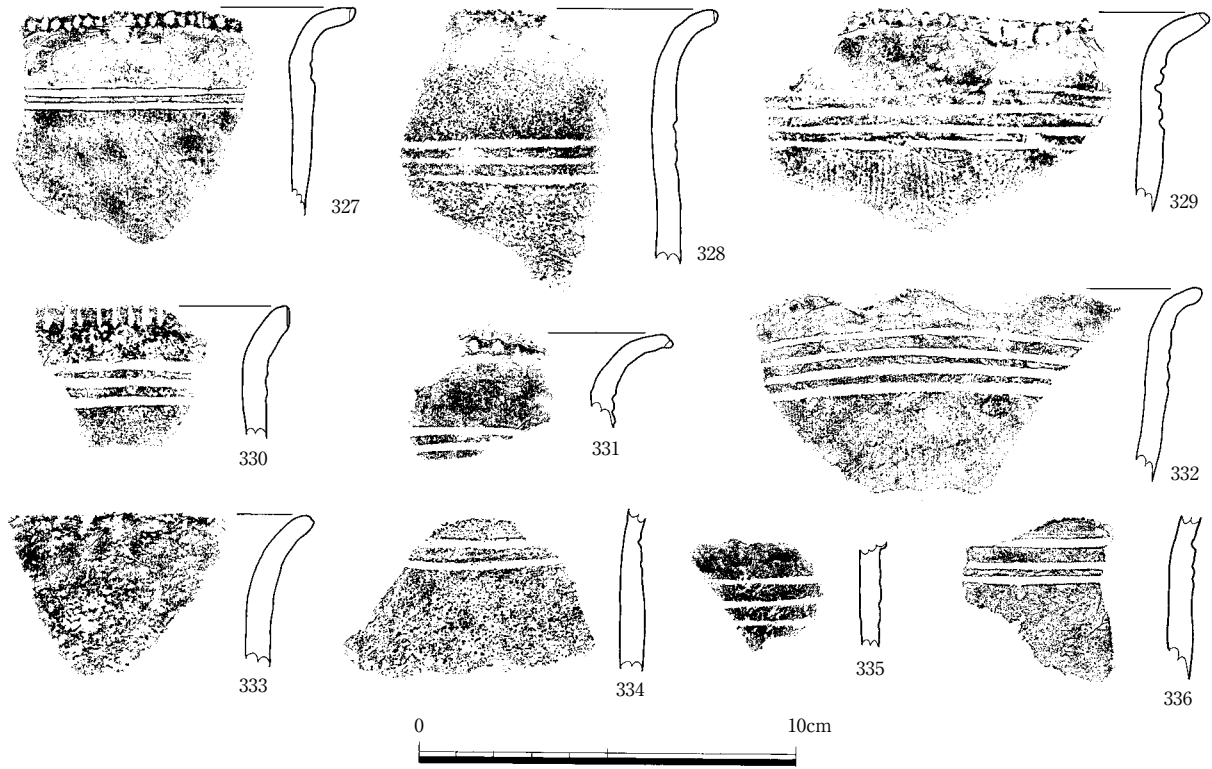


図43 05-1-1 調査区 攪乱層出土の土器（3）

317と320は沈線4?条、318は沈線6?条、319は沈線5?条がそれぞれ施文されている。さらに321～323・325には貼付突帯、324には貼付突帯と沈線、326には削出突帯+沈線1?条と削出段（上）の間に巴状の貼付突帯（剥落）がそれぞれ施文されている。なお308・311・314・315・317・322～324・326の胎土には角閃石や雲母が含まれている。

291は大形壺（太頸広口壺）。口径25.8cmを測り、口縁部は短く外反し、器面は摩滅、頸部に沈線／削出突帯（あるいは段）+沈線2?条が施文され、色調は褐灰色を呈している。

292～295は甕。292は口径20.8cmで、口縁部は短く外側に屈曲し、器面はヘラミガキ調整、無文、色調は灰黄褐色。293は口径21.0cmで、如意形口縁、器面は摩滅しており、口縁端部に刻目と頸部に削出段（下）+刻目が施文され、色調は褐灰色を呈している。294は口径20.8cmで、如意形口縁、器面はナデ調整、口縁端部に刻目と頸部に沈線3条が施文され、色調は褐灰色。295は口径30.2cmと大形で、口縁部は短く強く外反、胴部上半はやや張出し、器面は強いナデ調整、口縁端部に刻目が施文され、色調は灰白色を呈している。なお292～294の胎土には雲母や角閃石が含まれている。

327～331・334～336も甕である。327～331はいずれも如意形の口縁部片。器面が摩滅したものが多いが329にはハケの痕跡が遺る。口縁端部には刻目があり、頸部沈線の条数により、327には沈線2条、328・330・331には沈線3条、329には沈線4条がみられる。334～336は頸部片。334には沈線2条、335と336には沈線3条がみられる。なお336の胎土には角閃石と雲母がわずかに含まれている。

297・332・333は鉢である。297は小形の鉢の口縁部片。口径14.8cmを測り、口縁部はわずかに外反、ナデ調整で、口縁端部に矢羽根状の刻目と沈線1条、胴部に沈線12?条が施文され、色調は黄灰色を呈している。332と333も口縁部片。332は外面にハケ調整の痕跡が遺り、沈線4条が施文され、胎土には角閃石と雲母がわずかに含まれている。333は無文である。

第3節 遺物

296は蓋片。径11.9cmで、ヘラミガキ調整され、縁に削出段+沈線1条、天井部に削出突帯+沈線1条が施文され、色調はにぶい褐色を呈している。

298~306は底部片。それぞれの底径は、298は7.2cm、299は7.6cm、300は8.2cm、301は8.1cm、302は8.4cm、303は7.3cm、304は7.8cm、305は8.5cm、306は9.3cm。底面は平坦なものが多いが301のみやや凹面になり、器面調整はほとんどヘラミガキ調整である。なお301の胎土には角閃石や雲母がわずかに含まれている。

石器 (図44・45、図版18・19)

05-1-1調査区では37点の石器が出土した。土器は層・遺構毎に掲載したが、石器は出土点数が少ないため一括して掲載した。層・遺構毎の出土点数は表1、層・遺構毎の出土器種は表2に示したが、出土した石器のほとんどはサヌカイト製品であり、サヌカイトの総重量はおよそ1.1kgを量る。攪乱層や2~3層出土のものもあるが、土器と同じように弥生時代前期に所属する石器と考えたい。

番号	器種(1)	器種(2)	層・面	遺構名	長cm	幅cm	厚cm	重量g	石質	備考
337	磨製石斧		攪乱層		(5.86)	(5.54)	(3.64)	135.1	玄武岩	欠損
338	石包丁		第4面	5土坑	(5.36)	5.45	0.62	22.2	安山岩	欠損
339	石包丁		第5面	10土坑	11.12	4.61	0.76	54.7	安山岩	
340	尖頭器	未成品	4層		(6.50)	(3.35)	1.12	29.4	サヌカイト	欠損
341	石鏃	未成品	第6面	26土坑	(5.95)	3.30	1.72	14.3	サヌカイト	欠損
342	石鏃	未成品	第6面	26土坑	(5.35)	4.20	1.10	19.8	サヌカイト	欠損
343	石鏃	未成品	第6面	59溝	6.55	4.42	0.70	20.8	サヌカイト	
344	石錐	未成品	第6面	45落ち込み	4.28	4.88	0.96	16.9	サヌカイト	
345	石錐	未成品	第6面	26土坑	4.64	3.92	0.84	11.8	サヌカイト	
346	石鏃形石器	未成品	第6面	23落ち込み	10.17	5.78	1.23	66.4	サヌカイト	
347	楔形石器		第5面	8溝	2.47	4.17	0.91	8.9	サヌカイト	
348	削器		攪乱層		(4.54)	(3.15)	(0.39)	5.5	サヌカイト	欠損
349	削器		第6面	59溝	(6.39)	5.15	0.95	38.5	サヌカイト	欠損
350	剥片	使用痕	4層		4.73	5.19	1.11	23.9	サヌカイト	
351	剥片	使用痕・2次加工	5層		5.08	(4.35)	0.70	11.7	サヌカイト	欠損
352	剥片	使用痕	5層		7.22	5.38	1.82	65.0	サヌカイト	
353	剥片	2次加工	第6面	45落ち込み	3.37	(6.25)	1.12	19.5	サヌカイト	欠損
354	剥片		攪乱層		7.05	8.00	1.70	116.3	サヌカイト	
355	石核		第6面	26土坑	4.54	4.78	1.10	19.4	サヌカイト	
356	石核	(石鏃未成品?)	5層		5.38	8.62	1.41	60.1	サヌカイト	
357	石核	(尖頭器未成品?)	攪乱層		(4.70)	8.25	2.31	98.8	サヌカイト	欠損
358	石核		攪乱層		4.08	12.37	6.12	314.9	サヌカイト	
359	石核		攪乱層		3.50	6.07	1.15	28.1	サヌカイト	
	剥片	折断	3層		2.17	5.27	0.89	8.1	サヌカイト	
	剥片	折断	5層		2.28	2.46	0.36	1.3	サヌカイト	
	剥片	折断	第5面	8溝	3.93	3.81	0.62	11.3	サヌカイト	
	剥片	折断	第6面	26土坑	6.12	3.78	2.17	38.3	サヌカイト	
	剥片	折断	第6面	28溝	3.60	3.66	0.77	10.3	サヌカイト	
	剥片	折断	攪乱層		3.80	5.65	0.50	7.5	サヌカイト	
	剥片	折断	攪乱層		2.27	2.12	0.65	2.8	サヌカイト	
	剥片	折断・使用痕	第6面	26土坑	3.29	4.88	1.12	11.8	サヌカイト	
	剥片		2層		4.05	3.72	0.98	17.1	サヌカイト	
	剥片		3層		4.15	6.16	1.16	19.6	サヌカイト	
	剥片		3層		5.26	3.59	0.88	14.2	サヌカイト	
	剥片		第6面	47ピット	3.40	2.80	0.17	1.6	サヌカイト	
	剥片		第6面	55ピット	3.95	4.08	0.33	4.3	サヌカイト	
	剥片		攪乱層		2.22	3.95	0.45	3.2	サヌカイト	

表2 05-1-1調査区出土石器一覧表

337は溜池底の堆積土から出土した磨製石斧。著しく破損した小片だが、器面は丁寧に研磨され、大型蛤刃石斧の基部周辺と考えられる。

338と339は石包丁。338は中央部付近の破片であるが紐穴はみられない。刃部は片刃で（実測図上で裏面側の研ぎ幅が広い）、両面とも粗く研磨されている。339はほぼ完形。2個の紐穴が偏在して穿たれ、刃部は338と同じように片刃でやや外湾する。両面とも丁寧に研磨されている。

340は尖頭器の未成品。左側辺に表・裏面とも比較的粗い調整剥離が施され、基部には平坦な礫面が遺る。右側辺にみられる2つの大きな折れ面によって破損し、製作途中で放棄されたものと思われる。

341～343は石鏃の未成品。341は先端部が欠損する。表・裏面とも大きな剥離面が遺り、左側辺で調整剥離が進行している。342も先端部が欠損する。表・裏面とも1つの剥離面で覆われ、裏面は素材となった剥片の主剥離面である。基部に山形の自然面と打点が遺り、母岩礫面の角張った部位を選択・直接打撃して剥片を獲得していたことが分かる。なお側辺の調整剥離は細かく鋸歯状を呈している。343は周辺からの調整剥離が進行しているが、右側辺の基部側には素材となった剥片の形状を整えた折断面が遺り、先端・基部や側辺の細部調整は行われていない。裏面は素材剥片の主剥離面であり、表面の大きな2つの剥離面も含めほぼ同一方向からの打撃によっている。

344と345は石錐の未成品。いずれも逆三角形を呈している。344は表面に礫面が遺り、周辺からの粗い調整剥離によって先端部が作出されているが、刃部の細部調整は未だ行われていない。345も表面に礫面が遺る。整形のため周辺から調整剥離が進行しているが、刃部の細部調整は未だ行われていない。また裏面には素材となった剥片の主剥離面がみられ、打瘤の高まりを削るように左側辺から調整剥離が施されている。

346は器種不明で、とりあえず石鎌形石器と名称を付した。右側辺に2つの折断面があり、わずかではあるがここからも調整剥離が行われていることから、現在の形状が目的とする器種形状に近いものと考えられる。下辺側に鉤状の突起が付くことに特徴がある。断面形状は調整剥離の進行した部位で凸レンズ状を呈している。素材は多方向に打点をもつ石核から剥離された横長剥片であろう。

347は小形横長の楔形石器。両極打法による石器で、側辺にも微細な剥離がみられる。縦断面形は凸レンズ状を呈している。

348と349は削器。いずれも大きく破損している。348は素材となった剥片の末端にあたる縁辺に薄い刃部を作出した石器である。349も348に類似した素材の利用方法によっている。表面の一部は節理面であり、右側辺には打面が遺る。

350～353は使用痕あるいは2次加工のみられる剥片である。350は方形の平面形を呈するやや分厚い剥片である。打面は未調整の平坦な礫面で、打角は90°、打瘤は小さく低く、主剥離面はほぼ平坦である。右側辺の末端側に使用痕が認められる。352も長方形の平面形を呈する分厚い剥片である。打面、右側辺、末端辺に礫面が遺る。打面は平坦面で、打角は93°、打瘤は小さく低く、主剥離面はほぼ平坦で、表面には直交する剥離面がみられる。礫面の遺り方からみてサヌカイト角礫の小口面を作業面とした石核から剥出した剥片と思われるが、その剥離はおそらく小口面全面に及んでおり、作業面の更新あるいは打面の作出を目的とした剥片の可能性もある。なお左側辺に使用痕が遺る。351は使用痕と2次加工がみられる横長剥片。右側辺が欠損する。打面と左側辺に礫面が遺り、打面は平坦、打角104°、打瘤は低く、主剥離面は平坦である。剥片末端の縁辺に使用痕、打面に接する縁辺に2次加工痕がみられる。353も2次加工痕がみられる横長剥片。左側辺部を欠損する。打面及び打面側の縁辺に礫面が遺

第3節 遺物

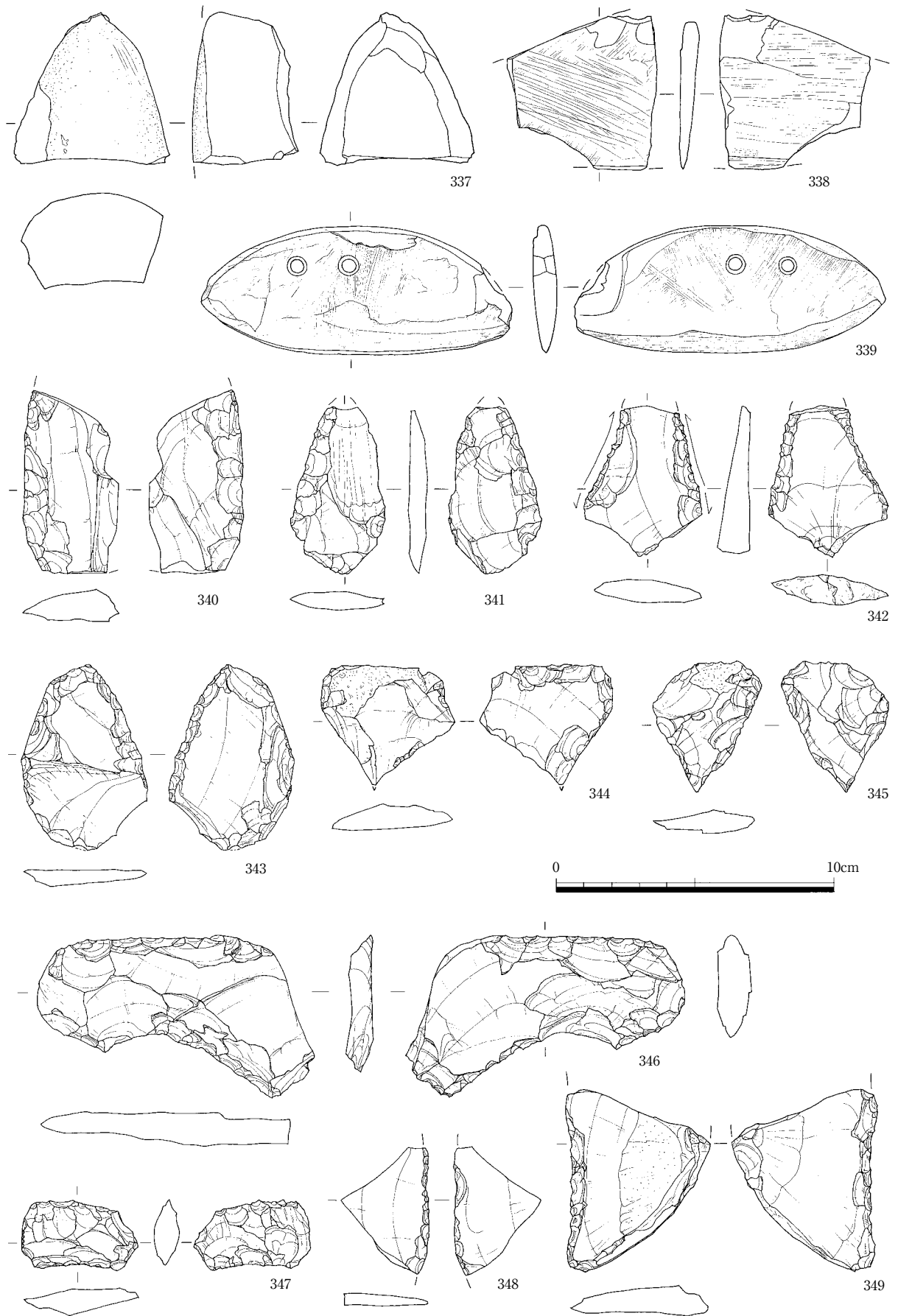


図44 05-1-1 調査区 石器 (1)

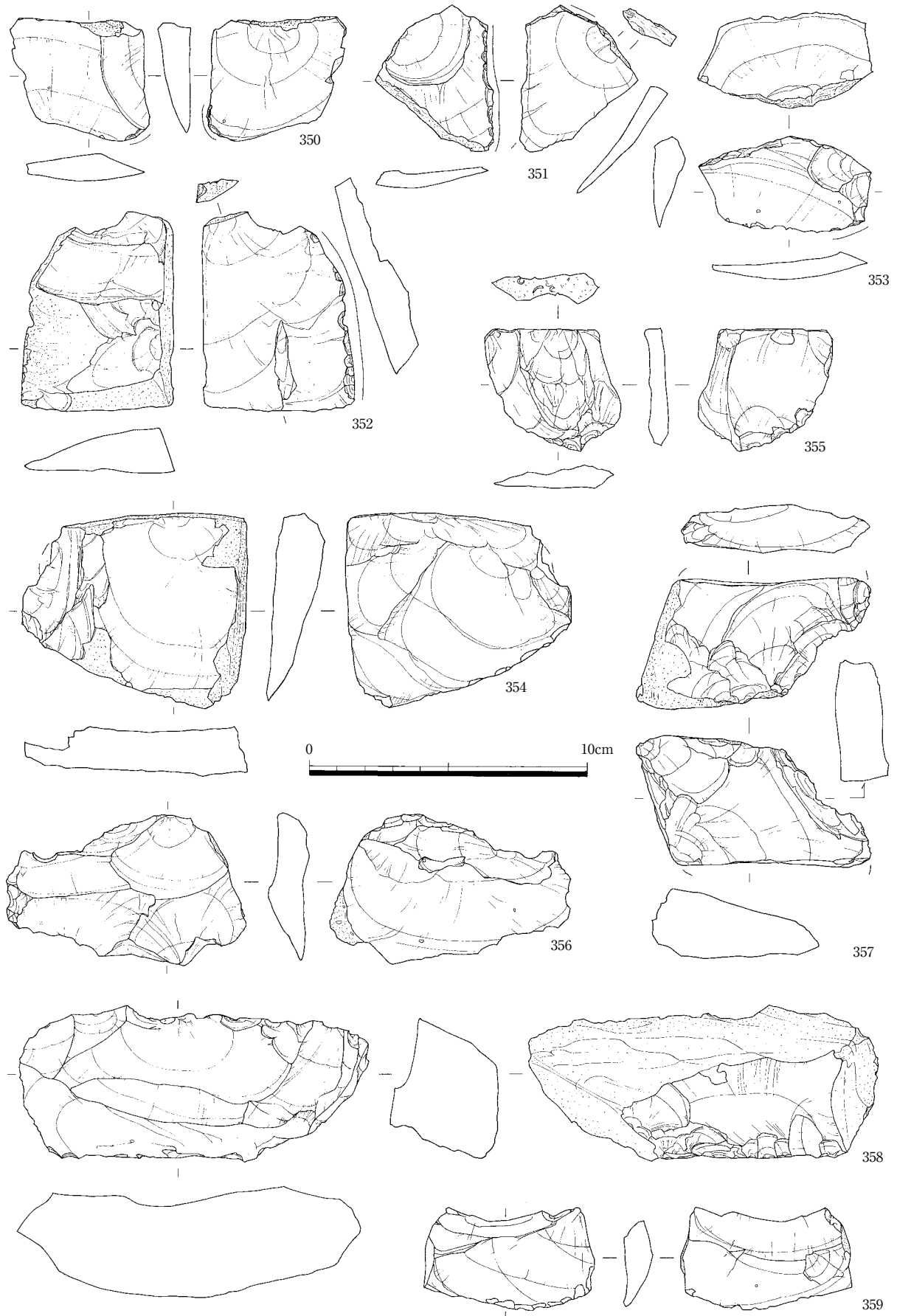


図45 05-1-1 調査区 石器 (2)

### 第3節 遺物

り、打面は未調整であるが、打点には礫面の角張った部位を利用し、打角は115°を測る。

354は剥片。平面形は方形で分厚く、表面及び打面に礫面が遺り、未調整の礫面を打面として利用し、表面には直交する複数の剥離面が遺されている。こうした特長は352に極めて近く、その剥離目的も類似したものであったろう。

355～359は石核。355は未調整の礫面を打面とする小形の石核。両極打法とみられ、打面に対向する下辺からの小剥離痕も遺されている。356は横長剥片を素材にした石核。その上辺と下辺から中心部に向けて主に横長剥片を剥離しているが、これを調整剥離と捉えて小形尖頭器の未成品と考えることもできる。357は表面と側辺に礫面を遺す石核で、大きく欠損しているが、素材は分厚い横長剥片と考えられる。石核としての主たる作業面は主剥離面側であり、裏面にみられる剥離面の多くは素材剥片剥出以前の剥離面である。358はサヌカイトの直方体状の角礫（あるいは剥片）を利用した石核である。その長側面を作業面として、未調整の礫面打面を横に移動しながら打撃し、主に実測図にみるような横長剥片を剥出している。因みに中央部にみられる最終剥離面の打角は104°である。359は横長剥片を素材とした小形の石核。両側辺に礫面が遺り、その主剥離面を作業面として横長剥片を剥出している。

#### 土製品（図46、図版17・20）

05-1-1 調査区からは土製品7点が出土した。それぞれ出土した層位や遺構を異にするが、石器と同じように出土点数が少ないため一括して掲載した。

360は3層出土のミニチュア土器。形状的には甕の模倣品と思われ、平底である。整形は手づくね、調整はナデ調整。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は比較的精良である。古墳時代後期。

361は第5面の14溝から出土した土錘。中央部で欠損しているが、全体の形は紡錘形を呈するものと思われる。調整はナデ調整、色調は灰白色や褐灰色を呈し、胎土には石英や長石の粗砂を含んでいる。弥生時代前期。

362～364は土製円盤。無文の弥生土器片の周囲を打ち欠いて整形したものである。器面は摩滅しており、362は褐灰色、363は灰黄色、364は灰白色を呈する。いずれも胎土には石英や長石の粗・極粗粒が含まれている。弥生時代前期。

365は第6面の63土坑から出土した匙形土製品。球形・袋状を呈する体部上面の一端に、斜め上方に延びる断面円形の柄が付く。柄は途中で欠損しており、長さは不明。口縁部にはヘラガキ沈線による圏線が4条巡る。調整はヘラミガキ調整で、色調はにぶい橙色を呈し、胎土には石英や長石の粗・極粗粒が含まれている。弥生時代前期。

366は第6面の23落ち込みから出土した輪状土製品。両端とも欠損しているが、本来は半円形を呈し

番号	種類	層・面	遺構名	cm	cm	cm	計測部位	備考
360	ミニチュア土器	3層		3.4	3.3	2.3	高さ・口径・底径	甕
361	土錘	第5面	14溝	(4.9)	3.0	2.6	長さ・幅・厚さ	紡錘形 欠損
362	土製円盤	攪乱層		3.2	3.9	0.6	長さ・幅・厚さ	
363	土製円盤	5層		4.1	4.2	0.9	長さ・幅・厚さ	
364	土製円盤	5層		5.8	6.7	1.1	長さ・幅・厚さ	
365	匙形土製品	第6面	63土坑	(10.2)	7.2	6.7	長さ・幅・高さ	沈線による4重圏線 柄部欠損
366	輪状土製品	第6面	23落ち込み	(4.7)	1.5	1.3	長さ・幅・厚さ	両端欠損

表3 05-1-1 調査区出土土製品一覧表

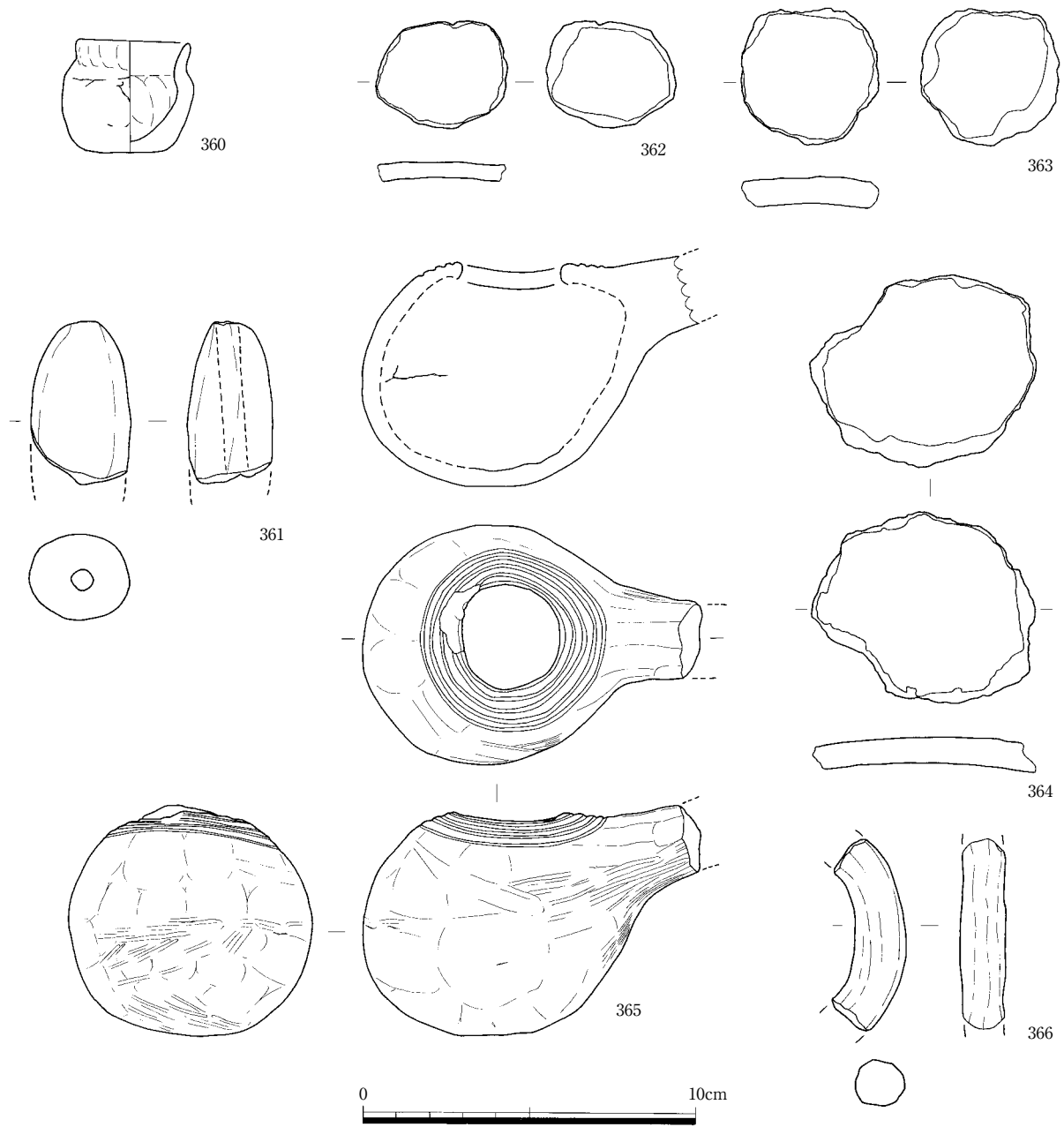


図46 05-1-1 調査区 土製品

たものと思われる。調整はナデ調整で、色調は黄褐色を呈し、胎土には石英や長石の他に角閃石が多量に含まれており、色調・胎土ともに本調査区出土の縄文時代晩期の土器と共通の傾向がみられる。縄文時代晩期。



## 第IV章 05-1-2 調査区の調査成果

### 第1節 基本層序と遺構面

調査は、厚さ約 1.3～ 2.5m に及ぶ現代の整地層を重機で除去した後、調査区全面を覆う灰白色の砂層以下を人力で掘削した。地層の観察は調査区北・西壁（A・Cライン）に沿って行い、下層遺構確認のため中央部に設定した7.6m四方のトレンチ北・西壁（B・Dライン）の所見を、これに加えた（図47）。本調査区における基本層序は以下のとおりである。

**0層** 主に粗・極粗砂で構成され、細～中礫等も多量に含む灰白色の砂層である。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器椀、土師器小皿、陶磁器に加え、屋瓦や人骨までもが出土し、田井中遺跡の北方に位置する志紀遺跡で鎌倉期洪水砂層〔別所2002〕とされた地層に相当する。

**1層** 0層を除去して調査区全面で検出された細・中砂を含む暗オリーブ灰色シルト層である。本層上面を第1面とした。土師器の小片がごくわずかに出土したが、上下の地層との関係から、古代から中世の作土層と考えられる。

**2層** 調査区全面でほぼ水平に堆積する灰色あるいはオリーブ黒色粘土質シルト層で、極粗砂や細礫を含んでいる。3層に細分され、層理面毎に精査を行ったが遺構等は検出されなかったため、一括して2層として括り、本層上面を第2面とした。土師器や須恵器の小片が比較的多く、わずかに黒色土器や瓦器椀、平瓦等が出土している。古代の作土層と思われる。

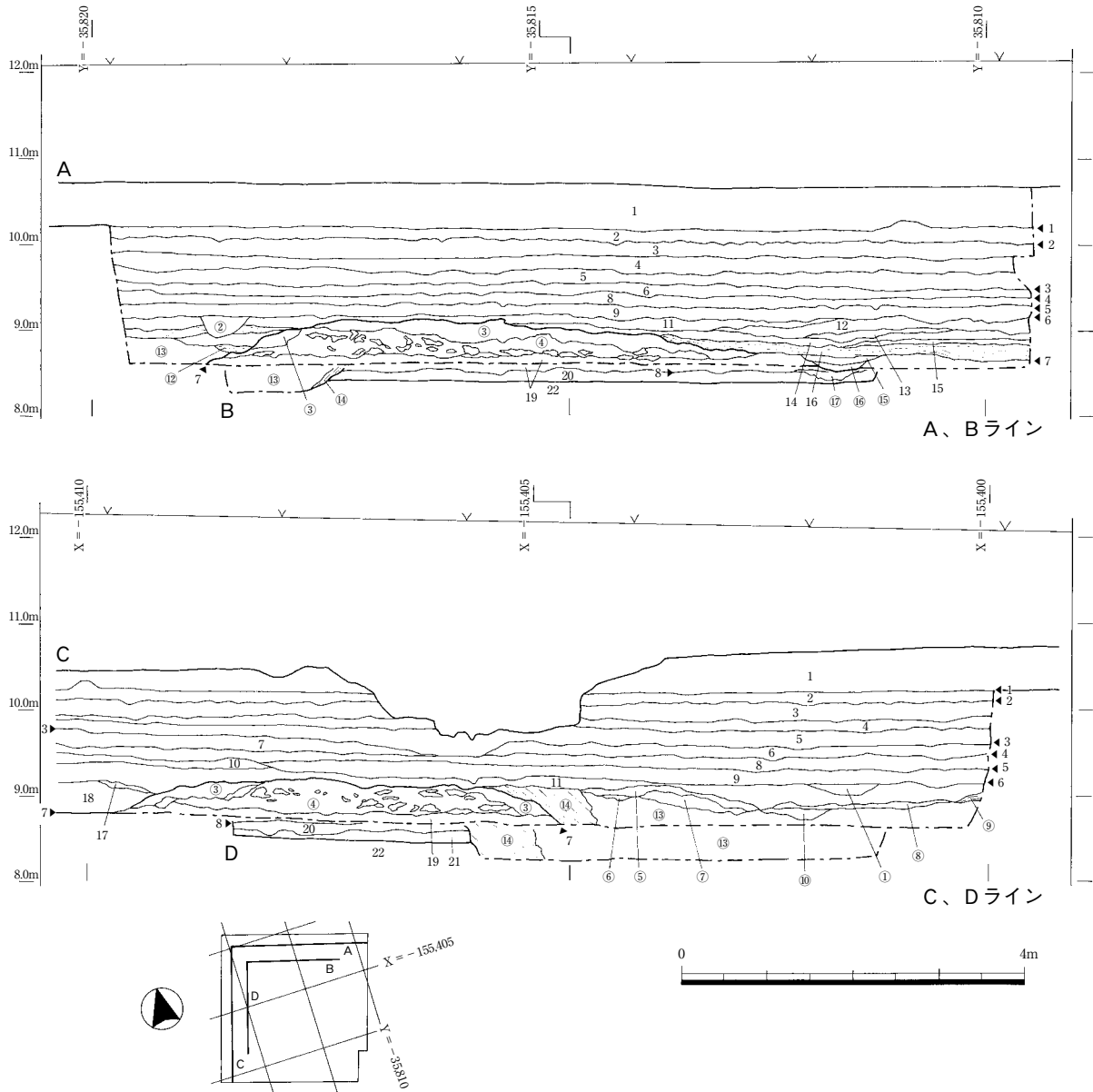
**3層** 暗オリーブ灰色粘土質シルト層で、本層上面を第3面とした。また、調査区南西隅にはやや黒味を帯びた極粗砂や細礫を含む地層がみられたが、この地層からは、遺物出土量の少ない本調査区としては珍しく、比較的まとまった量の土師器や須恵器が出土した。古墳時代後期から古代に形成された地層と考えられる。

**4層** 調査区全体で確認された暗オリーブ灰色粘土質シルト層で、中砂を含んでいる。本層上面を第4面とした。土師器の小片が多く、弥生土器片や須恵器片がわずかに出土した。古墳時代後期に形成された地層と思われる。

**5層** 暗オリーブ灰色シルト層で、調査区の広い範囲にみられる中～極粗砂を含む地層と、調査区南西隅の一部にみられる細礫を多量に含む地層からなる。本層上面を第5面とした。本層からは弥生時代中期の土器片が5点出土している。弥生土器のみが出土しているものの、上下の地層の関係から古墳時代前期から中期に形成された地層であろう。

**6層** 本層は大きく上部層と下部層からなり、上部層には調査区全面にみられた暗緑灰色砂質シルト層が相当する。一方下部層は、7層上面の遺構である大溝の堤との関係で遺存する場所が限定され、調査区東北部の緑黒色・暗緑灰色・暗オリーブ灰色砂質シルト層やオリーブ黒色細・中砂層と、調査区南西部の暗緑灰色細・中砂層や暗オリーブ灰色砂質シルト層が相当する。本層上面を第6面とした。6層の形成時期は、遺物が出土していないのではっきりしないが、やはり上下の地層との関係から弥生時代中期以降と考えられる。

**7層** 著しく土壌化した黒褐色粘土質シルト層で、細砂や細・小礫を含んでいる。本層上面を第7面



- |   |   |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 灰白 (7.5Y8/1) 粗～極粗砂 細～中礫含む〔0層〕</li> <li>2. 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) シルト 細～中砂含む〔1層〕</li> <li>3. 灰 (10Y3/1) 粘土質シルト 極粗砂を僅かに含む〔2層〕</li> <li>4. オリーブ黒 (7.5Y3/2) 粘土質シルト 極粗砂～細礫含む〔2層〕</li> <li>5. オリーブ黒 (7.5Y3/1) 粘土質シルト 極粗砂～細礫、有機物含む〔2層〕</li> <li>6. 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) 粘土質シルト 有機物含む〔3層〕</li> <li>7. 暗オリーブ灰 (5GY3/1) 粘土質シルト 極粗砂～細礫、有機物含む〔3層〕</li> <li>8. 暗オリーブ灰 (5GY4/1) 粘土質シルト 中砂含む〔4層〕</li> <li>9. 暗オリーブ灰 (2.5GY3/1) シルト 中砂～極粗砂含む〔5層〕</li> <li>10. 暗オリーブ灰 (2.5GY3/1) シルト 細礫多く含む〔5層〕</li> <li>11. 暗緑灰 (7.5GY4/1) 砂質シルト 極粗砂、細～小礫僅かに含む〔6層〕</li> <li>12. 緑黒 (7.5GY2/1) 砂質シルト 粗砂ブロックが入り、細礫僅かに含む〔6層〕</li> <li>13. 暗緑灰 (7.5GY3/1) 砂質シルト 粗砂含む〔6層〕</li> <li>14. 暗オリーブ灰 (5GY4/1) 砂質シルト〔6層〕</li> <li>15. 暗緑灰 (7.5GY3/1) 砂質シルト 中砂含む〔6層〕</li> <li>16. オリーブ黒 (10Y3/1) 細砂～粗砂 平面的には渦状になるラミナあり〔6層〕</li> <li>17. 暗緑灰 (7.5GY4/1) 細砂～中砂〔6層〕</li> <li>18. 暗オリーブ灰 (5GY4/1) 砂質シルト 細砂～極粗砂含む〔6層〕</li> <li>19. 黒褐 (10YR2/2) 粘土質シルト 細砂多く、細～小礫含む〔7層〕</li> <li>20. オリーブ黒 (7.5Y3/1) 粘土質シルト 極粗砂多く、細砂含む〔8層〕</li> <li>21. オリーブ黒 (7.5Y3/2) 砂質シルト 細砂多く、細～小礫含む〔9層〕</li> <li>22. 緑灰 (7.5GY5/1) 砂質シルト 細砂多く、中砂含む〔9層〕</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>① オリーブ黒 (7.5Y3/1) 砂質シルト 粗～極粗砂含む〔15溝〕</li> <li>② オリーブ黒 (7.5Y3/1) シルト質極細砂 極粗砂、細礫含む〔17ピット〕</li> <li>③ 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) 砂質シルト<br/>19層のブロックが入り、極粗砂～細礫含む〔18大溝 (堤)〕</li> <li>④ 黒褐 (2.5Y3/2) 砂質シルト<br/>暗緑灰 (7.5GY4/1) シルト質細砂のブロックが入り、極粗砂～細礫含む〔18大溝 (堤)〕</li> <li>⑤ 緑灰 (7.5GY5/1) 砂質シルト<br/>粗砂、中礫含む、ラミナあり〔18大溝 (溝)〕</li> <li>⑥ オリーブ黒 (5Y3/1) 中砂～極粗砂 細～小礫含む〔18大溝 (溝)〕</li> <li>⑦ 緑灰 (7.5GY5/1) 砂質シルト 細礫含む〔18大溝 (溝)〕</li> <li>⑧ 灰 (5Y4/1) シルト〔18大溝 (溝)〕</li> <li>⑨ 暗オリーブ灰 (5GY4/1) 砂質シルト ラミナあり〔18大溝 (溝)〕</li> <li>⑩ 灰 (7.5Y6/1) 粗砂～極粗砂〔18大溝 (溝)〕</li> <li>⑪ 暗緑灰 (7.5GY3/1) 砂質シルト 中砂ブロック混じる〔18大溝 (溝)〕</li> <li>⑫ 暗オリーブ灰 (5GY4/1) 細砂<br/>中砂ブロック入り、ラミナあり〔18大溝 (溝)〕</li> <li>⑬ 灰白 (7.5Y7/1) 粗砂～極粗砂 部分的にラミナあり〔18大溝 (溝)〕</li> <li>⑭ 緑灰 (7.5GY5/1) 砂質シルト<br/>19層の小ブロック混じる、ラミナあり〔18大溝 (溝)〕</li> <li>⑮ オリーブ黒 (10Y3/1) シルト質極細砂〔19溝〕</li> <li>⑯ オリーブ黒 (10Y3/1) 砂質シルト〔19溝〕</li> <li>⑰ 灰白 (2.5Y8/2) 砂質シルト〔21溝〕</li> </ol> |
|---|---|

図47 05-1-2 調査区 土層断面図

## 第2節 遺構

とした。7層は本来調査区全域に広がっていた地層であるが、南東から北西方向に延びる大溝の掘削によって中央部では失われており、大溝の両側にわずかに遺存するのみである。また、より下層の地層についても、大溝掘削の影響で同様の遺存状況を呈していた。7層の時期については、遺物は出土していないものの志紀遺跡も含めた周辺の調査状況を勘案すると、弥生時代前期末から中期初頭に形成された水田の作土層と考えられる。

**8層** 7層までで調査予定深度にほぼ達したため、7層の層厚等を確認する目的で、調査区中央部に7.6×7.6m四方のトレンチを設定して調査を実施した。8層は土壌化したオリブ黒色砂質シルト層で、極細・細砂が含まれるが、調査区南西部では下部層として細・小礫を含む地層が分層される。本層上面を第8面とした。8層から遺物は出土していないので時期を限定することは難しいが、第7面と第8面に遺された遺構の関係から、7層の時期から大きく遡らない弥生時代前期の水田作土層と思われる。

**9層** 緑灰色砂質シルト層。調査深度の限界に達したため上面の検出に留まり、調査範囲も狭いことから、層厚や遺物の有無等は不明で、遺構面は設定していない。ただ本調査区から西に100m程離れた96-1調査区では、標高8.9m以下に本層と類似した青灰色微砂～シルトの地層があり、弥生土器と縄文土器、溝が検出されているので、本層でも遺物や遺構が検出される可能性はあろう。

## 第2節 遺構

### 第1面（図48、図版21-1）

鎌倉時代の洪水砂とされる0層を除去して検出される遺構面である。標高は10.2m程で、ほぼ水平面を形成している。調査区中央部を中心に重機の爪痕が遺る攪乱坑があり、調査区東部と南部で各々畦畔1条が検出された。

南北に延びる1畦畔はほぼ真北方向を示し、幅0.30～0.50m・高さ0.01～0.06mを測る。東西方向の2畦畔はこれに直交するとみられ、幅0.20～0.40m・高さ0.02～0.08mを測る。調査区面積との関係でこれらの畦畔によって区画された水田の大きさは不明だが、畦畔の方向性からみると条里区割に則った中世水田が広がっていたものと考えられる。

### 第2面

1層を除去して検出される遺構面である。標高は10.00～10.10mで、調査区北東部がやや低い。調査区全面でヒトや牛・鳥等の足跡が検出され、畦畔等の水田区画を示す遺構は確認できなかったものの、古代の水田が営まれていたものと考えられる。

### 第3面（図48）

層厚0.35～0.50m程の2層を除去して検出される遺構面である。標高は9.50～9.80mを測り、調査区南西部で高く、北東部で低くなっている。明瞭な遺構は検出されなかったものの、他層と比較して遺物含量の特に多い地層が調査区南西の一面のみで確認された（破線で示した範囲）。

### 第4面（図48、図版21-2）

3層を除去して検出される遺構面である。標高は9.40～9.60mを測り、第3面程顕著ではないものの、調査区南西部から北東方向に向けて低くなっている。調査区南半部で小ピット11基が検出された。

3ピットは長径0.58m・深さ0.16m（図49）。4ピットは長径0.24m・深さ0.07m。5ピットは長径0.21

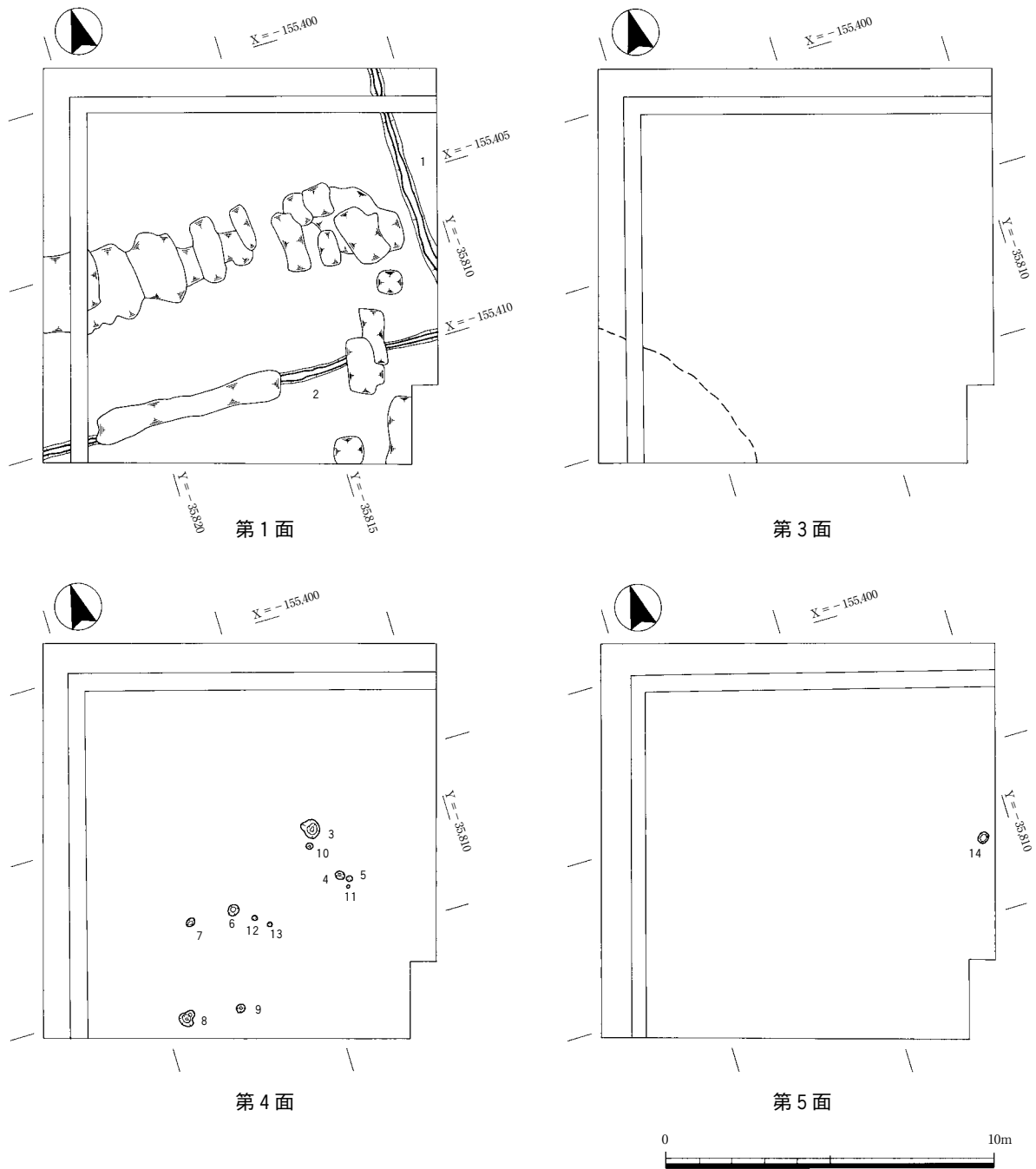


図48 第1・3～5面 全体図

m・深さ0.05m。6ピットは長径0.37m・深さ0.39m（図49）。7ピットは長径0.20m・深さ0.05m。平面形が瓢形を呈する8ピットは長径0.53m・深さ0.32m（図49）。9ピットは長径0.26m・深さ0.24m（図49）。10ピットは長径0.16m・深さ0.05m。11ピットは長径0.12m・深さ0.03m。12ピットは長径0.15m・深さ0.04m。13ピットは長径0.14m・深さ0.03m。

以上のピット群には、長径が0.10～0.20mの小さな一群と、同じく0.20mを超えるやや大きな一群とがあるが、建物や柵の存在を窺わせるような規則的な配置はみられなかった。なお8・9ピットから土師器が、6ピットから須恵器が出土している。いずれも小片のため図化することはできず、詳細な時期も不明である。

第2節 遺構

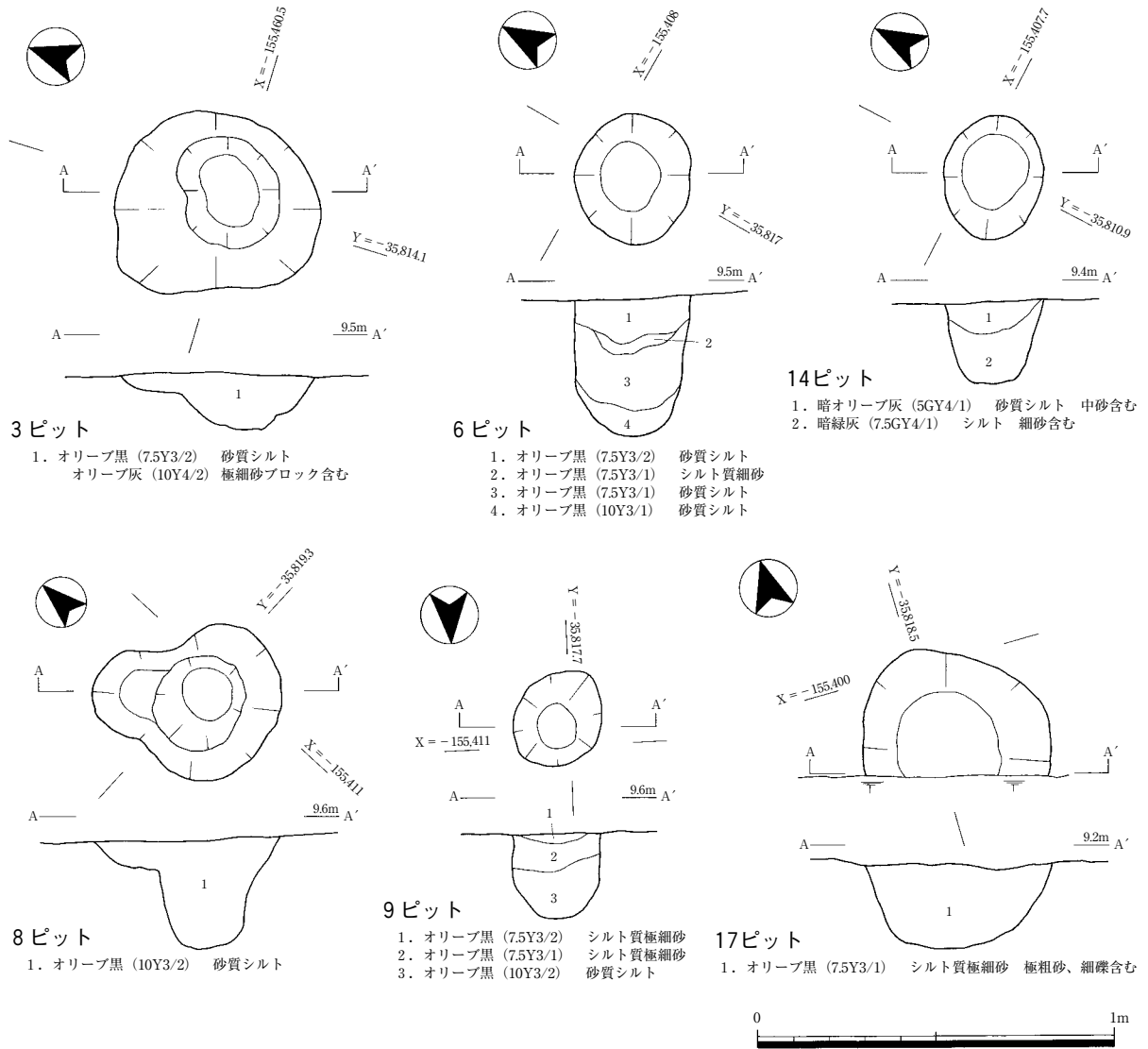


図49 第4・5・6面のピット 平面・断面図

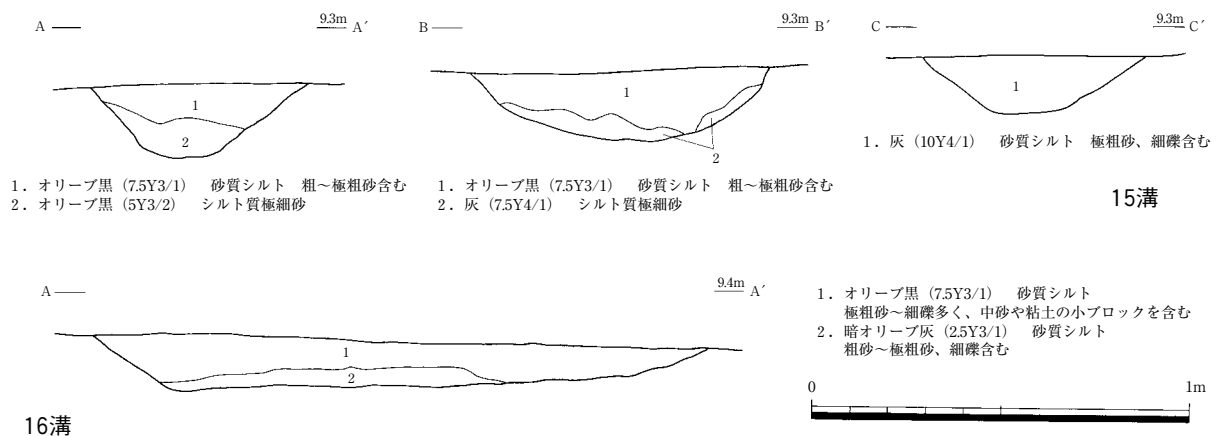


図50 15・16溝 断面図

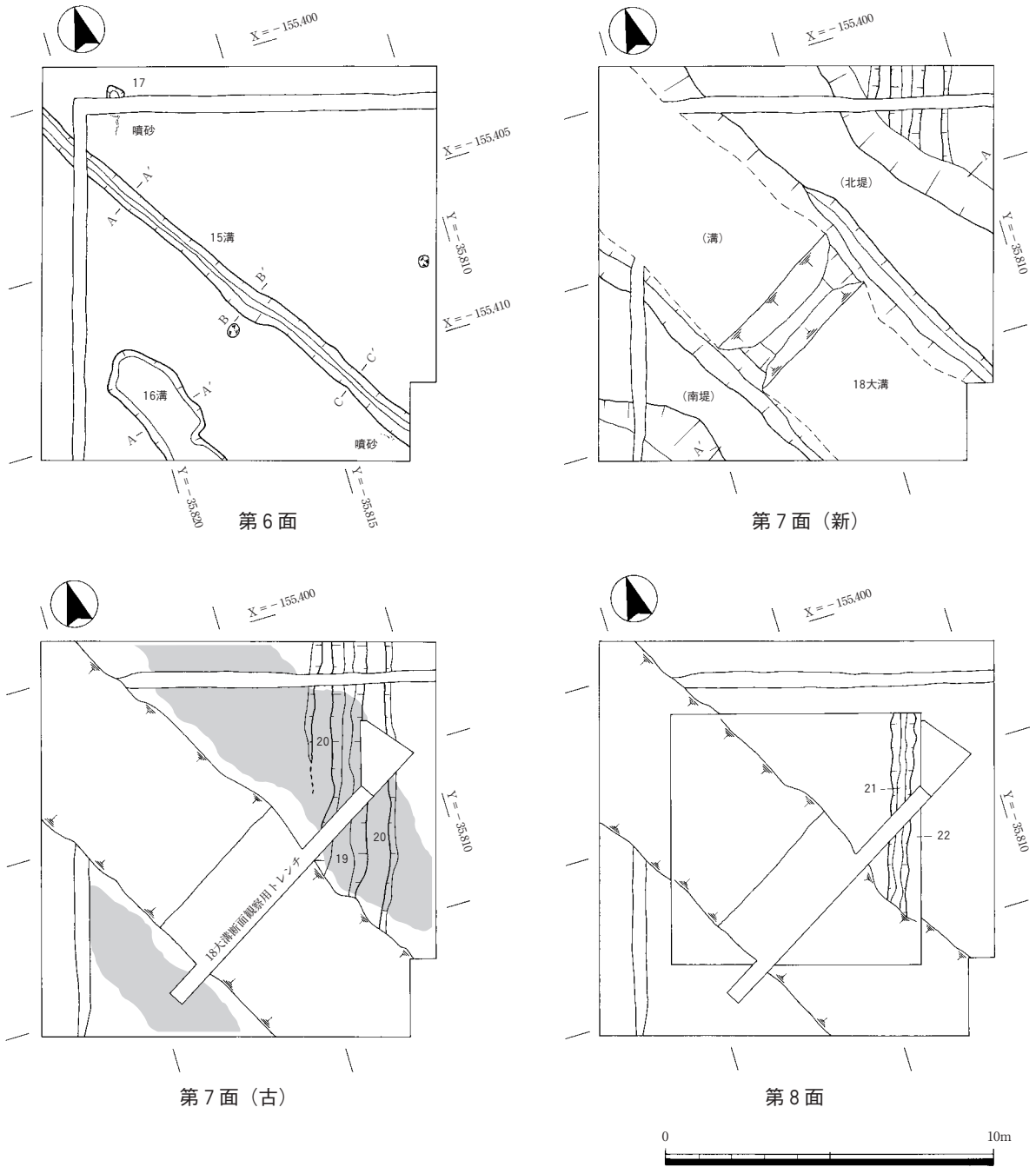


図51 第6～8面 全体図

第5面 (図48)

4層を除去して検出される遺構面で、標高は9.30～9.50mを測る。調査区南部から北部に向けて緩やかに低くなっている。調査区東部で小ピット1基が検出された。

14ピットは長径0.35m・深さ0.23mを測る (図49)。

第6面 (図51、図版21-3)

5層を除去して検出される遺構面である。標高は9.10～9.40mを測り、調査区南部～北部に向けて傾斜している。2条の溝と1基のピットが検出された。

15溝は南東から北西方向に延びる直線的な溝で、幅0.57～0.80m・深さ0.15～0.20mを測り、北西方向

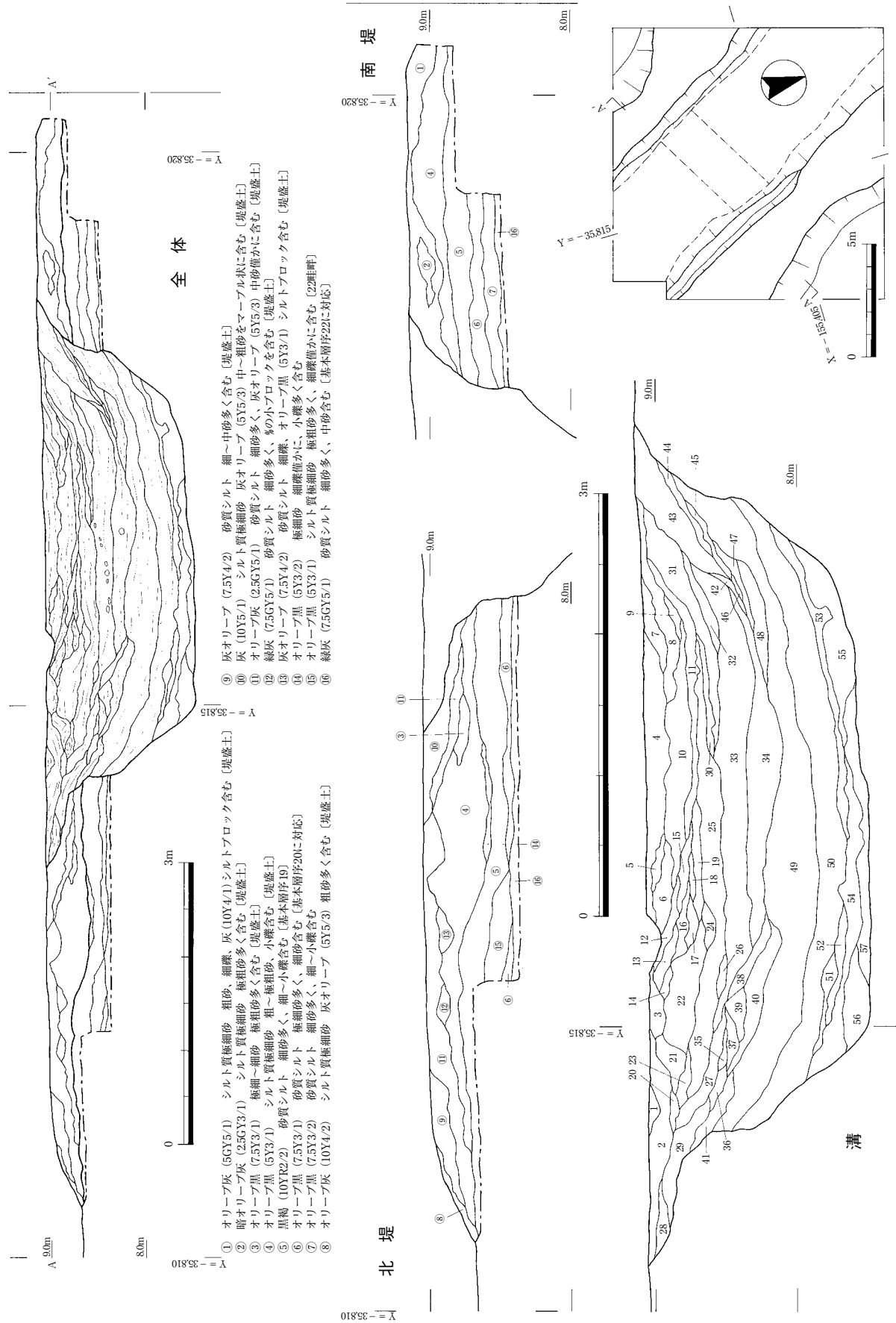


図52 18大溝 断面図

18大溝（溝部） 断面注記

- |  |  |
|--|--|
| 1. 緑灰 (7.5GY5/1) シルト質極細砂 ラミナあり               | 32. 灰白 (5Y7/2) 粗～極粗砂 細～小礫含み、ラミナあり            |
| 2. 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) 細～中砂 シルトブロックが入り、細礫含む    | 33. 灰白 (5Y7/2) 粗～極粗砂 ラミナあり                   |
| 3. 暗オリーブ灰 (5GY4/1) 細～中砂 極粗砂含む                | 34. 灰 (5Y6/1) 粗～極粗砂 細礫多く含む                   |
| 4. 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) シルト質極細砂 中砂含み、ラミナあり      | 35. 灰オリーブ (5Y5/2) 粗～極粗砂                      |
| 5. 灰 (7.5Y4/1) 細～極粗砂 細礫がブロック状に入る             | 36. 暗緑灰 (7.5GY4/1) シルト質極細砂 ラミナあり             |
| 6. 暗オリーブ灰 (5GY4/1) シルト質極細砂 極粗砂含み、ラミナあり       | 37. 灰白 (5Y7/1) 中～粗砂                          |
| 7. 暗緑灰 (7.5GY4/1) 細～中砂 極粗砂、小礫含む              | 38. 灰 (10Y6/1) 中～粗砂                          |
| 8. 暗緑灰 (7.5GY4/2) 細～中砂 細礫含む                  | 39. 灰黄 (2.5Y7/2) 極粗砂 細礫含み、ラミナあり              |
| 9. 灰オリーブ (5Y4/2) 極粗砂～細礫                      | 40. 灰 (7.5Y6/1) 粗砂 極粗砂含み、ラミナあり               |
| 10. 灰オリーブ (5Y5/2) 粗～極粗砂 細礫僅かに含む              | 41. 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) シルト質極細砂 ラミナあり          |
| 11. オリーブ黒 (7.5Y3/2) シルト質極細砂 細礫僅かに含み、ラミナあり    | 42. 灰 (10Y5/1) 細～中砂 極粗砂含み、ラミナあり              |
| 12. 灰 (10Y4/1) シルト質極細砂 粗～極粗砂含む               | 43. 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) シルト質極細砂 極粗砂僅かに含む、ラミナあり |
| 13. 灰 (5Y5/1) 粗砂～細礫 14層がマーブル状に入る             | 44. 暗オリーブ灰 (2.5GY3/1) シルト質極細砂 炭化物粒含む         |
| 14. 暗オリーブ灰 (5GY4/1) シルト質極細砂 ラミナあり            | 45. 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) シルト質極細砂 中砂含み、ラミナあり     |
| 15. 暗灰黄 (2.5Y5/2) 粗～極粗砂 細～小礫僅かに含む            | 46. 灰白 (5Y7/1) 粗砂                            |
| 16. 灰オリーブ (7.5Y4/2) シルト質極細砂 中～粗砂、細礫僅かに含む     | 47. 灰 (10Y4/1) シルト質極細砂 ラミナあり                 |
| 17. 灰 (10Y5/1) シルト質極細砂 細礫僅かに含む               | 48. 灰 (7.5Y6/1) 粗砂 極粗砂含み、ラミナあり               |
| 18. オリーブ黒 (10Y3/2) シルト質極細砂                   | 49. オリーブ灰 (2.5GY5/1) シルト質極細砂 中砂含み、ラミナあり      |
| 19. オリーブ黒 (7.5Y3/2) シルト質極細砂 粗～極粗砂、小礫含む       | 50. 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) シルト質極細砂                |
| 20. 灰オリーブ (5Y5/3) 粗～極粗砂                      | 51. 黒褐 (10YR2/2) 砂質シルト 細礫多く含む                |
| 21. オリーブ灰 (5GY5/1) シルト質極細砂 ラミナあり             | 52. 灰オリーブ (7.5Y4/2) シルト質極細砂                  |
| 22. 暗灰黄 (2.5Y4/2) 極粗砂 細～小礫含む                 | 53. 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) 砂質シルト 有機物含む            |
| 23. 暗緑灰 (10GY4/1) シルト質極細砂 ラミナあり              | 54. 灰 (10Y4/1) 中～粗砂 灰 (5Y4/1) 粘土ブロック入る       |
| 24. 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) シルト質極細砂 シルトブロック入る      | 55. オリーブ灰 (2.5GY5/1) シルト質極細砂                 |
| 25. 灰オリーブ (5Y6/2) 粗～極粗砂 細～小礫含む               | 黄灰 (2.5Y4/1) 粘土ブロック、オリーブ灰 (5GY5/1) シルトブロック入る |
| 26. 灰オリーブ (5Y6/2) 極粗砂 細礫含む                   | 56. オリーブ灰 (2.5GY5/1) シルト質極細砂                 |
| 27. 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) シルト質極細砂 中砂含み、ラミナあり     | 極粗砂、有機物含み、黄灰 (2.5Y4/1) 粘土ブロック入る              |
| 28. オリーブ灰 (5GY5/1) シルト質極細砂 中砂含み、ラミナあり        | 57. 黒褐 (10YR3/1) シルト 粗～極粗砂、有機物僅かに含む          |
| 29. 暗オリーブ灰 (2.5GY4/1) シルト質極細砂 極粗砂～細礫含み、ラミナあり |  |
| 30. オリーブ黒 (5Y3/2) シルト質極細砂 極粗砂～細礫含み、ラミナあり     |  |
| 31. 灰オリーブ (5Y5/2) 粗～極粗砂 細礫含み、ラミナあり           |  |

により低くなっている（図50）。この溝からは、無文のため詳細な時期を決めたいが、弥生土器と思われる土器小片が2点出土している。16溝はおよそ幅 1.60m・深さ0.15mの規模で、浅い土坑のようでもあるが、15溝と平行して調査区外にも延びており、ここでは溝と判断した（図50）。やはり無文土器の小片が2点出土している。17ピットは、側溝に切られているため規模・形状とも不明であるが、残存部では長径0.53m・深さ0.25mを測る（図49）。

なお調査区の南東隅と北西隅では、第7面大溝埋土の砂層から噴き上がった噴砂の痕跡が確認された。前者は長さ約0.50m、後者は長さ約0.70mであった。

第7面（図51、図版22—1、23—2）

本遺構面は、6層を除去して検出される黒褐色粘土質シルト層の上面に設定したもので、標高 8.70～8.90mを測り、南側に高い地形であったと思われる。大溝1条、畦畔1条、溝1条が検出されたが、これらの遺構は重複して構築されており、時期的に新古の関係が認められる。

まず新しい段階の遺構として、ほぼ方形を呈する調査区の対角線上を南東から北西方向に延びる18大溝がある（図52）。調査区の大半を占めるこの大溝は、中央の溝部分と、後述するように溝部分の掘削土で構築された南・北堤部分からなり、人工の溝と判断した。この大溝の調査は、すでに第7面が調査予定深度に達していたため溝部分の一部に限って実施し、そのトレンチを南・北堤まで延長させて断面を観察した（A-A'）。この位置で大溝の断面形状や規模をみると、北堤は低い台形で幅4.50m・高さ0.36m、南堤も低い台形で幅2.35m以上・高さ0.36m、溝は逆台形で幅4.55m・深さ1.23mになる。なお、堤の頂部から溝底面までの深さは1.59mである。

はじめに18大溝の堤部分を検討すると、図51の第7面（古）の平面図にグレートーンで示したように、遺構面の基盤層である黒褐色粘土質シルト層の上面で、ほぼ堤の範囲に限定されて草本類と思われる植物遺体が薄膜状に検出された（図版23—1）。堤は、この植物遺体層の上にオリーブ黒色シルト質極細砂を核材として積み上げ、その外面をオリーブ灰・灰オリーブ・緑灰色のシルト質極細砂や砂質シルト



## 第2節 遺構

で被覆・整形して構築されていた（図52）。

築堤の過程でまず注意されるのは植物遺体層の存在であろう。元来この場所で生育していた植物が築堤作業の過程で基盤層と盛土層との間にバックされた結果、堤の範囲のみに偶然に遺存したものなのか、あるいは築堤工法として植物遺体を敷き均す工程が存在したものなのか。調査範囲が狭小で堤周辺の様子がはっきりしないため、工法・工程として積極的に評価することは難しいが、いずれにしても、築堤によって埋め込まれた溝の中や畦畔の上でも同様な状況がみられることから、人為的・意図的な可能性は高いように思われる。また堤として盛土された土砂の供給元も問題になるが、土色や土質の点からみて7層以下の粘土質・砂質シルトが母材になったことは間違いないであろう。

次に溝部分の堆積状況を検討すると、まず溝の底面にはシルト層や粘土をブロック状に含むシルト質極細砂層が堆積しているが、これらの地層は溝の掘削によって法面に露出した7層以下の地層が崩落して堆積したものと思われる。さらに溝の法面に沿うようにラミナを有するシルト質極細砂が堆積し、その上面は数種の砂で覆われる。その後、溝中央部ではそれまでの堆積層を押し流すように砂礫層が堆積し、少なくとも従来からの溝はほぼ埋没する。しかし砂礫層の上層にも様々な砂層が堆積しているため、南・北堤の間には幾筋もの細い溝が存在し、流路として機能していたらしい（図52、図版22-2）。こうした堆積状況は、18大溝が埋没するまでの過程で、掘削期→流水のない時期→緩やかな流水の時期→水勢が強く細砂を主体にした土砂を運び、堆積させた時期→水勢が非常に強く大量の砂礫を一気に運び、堆積させた時期→緩やかな流水の時期→埋没期、という変遷の過程を辿ったことを示している。

なお、18大溝の堤部分からは弥生土器片が1点出土している。また溝部分からは、中央の砂礫層で弥生時代中期を示す弥生土器の体部小片や底部片、サヌカイト剥片がわずかに出土している。

以上のような第7面新段階の遺構である大溝の掘削時期については、第7面の基盤層である7層が弥生時代前期末から中期初頭と考えられることから、古段階の遺構の存在を考慮して、弥生時代中期と推測されよう。そして数少ない遺物の出土状況から判断して、弥生時代中期以降に見舞われた洪水によって埋没していったものと思われる。

次に第7面の古い段階の遺構として、18大溝によって部分的に削平されているが、調査区東辺に沿って南北方向の溝1条と畦畔1条が検出された（図51、図版23-2）。20畦畔は南南西から北北東方向に延び、幅2.40～2.70m・高さ約0.10mを測る低い台形状の高まりである（図53）。19溝は20畦畔の中央に位置し、幅0.90～1.00m・深さ最大0.20mを測る（図53）。20畦畔については、幅が広いことや溝を伴うことから大畦畔として捉えられるかもしれない。このように弥生時代前期末から中期初頭の時期には、調査区周辺には水田が広がっていたものと考えられる。

ところで19溝と20畦畔は、もちろん18大溝の北堤に被覆されているが、堤の外側においては基本層序にみるようにオリーブ黒色の細～粗砂層で覆われている（図47）。この層は平面的にみると渦を巻いたようなラミナが顕著であり、堤を越えて大溝から溢れ出した水が滞留することで形成されたものであろう。したがって18大溝が構築された後も、例えば洪水などによって大量の土砂が運ばれ大溝が埋没するまでは、大溝の周辺には水田が営まれていたものと思われる。

### 第8面（図51、図版23-3）

7層を除去して検出される遺構面で、標高は8.50～8.70mを測り、第7面と同じく南側に高い地形である。畦畔1条、溝1条が検出された。

22畦畔は第7面20畦畔の東半部直下に検出されたもので、方向も南南西から北北東を示し類似してい

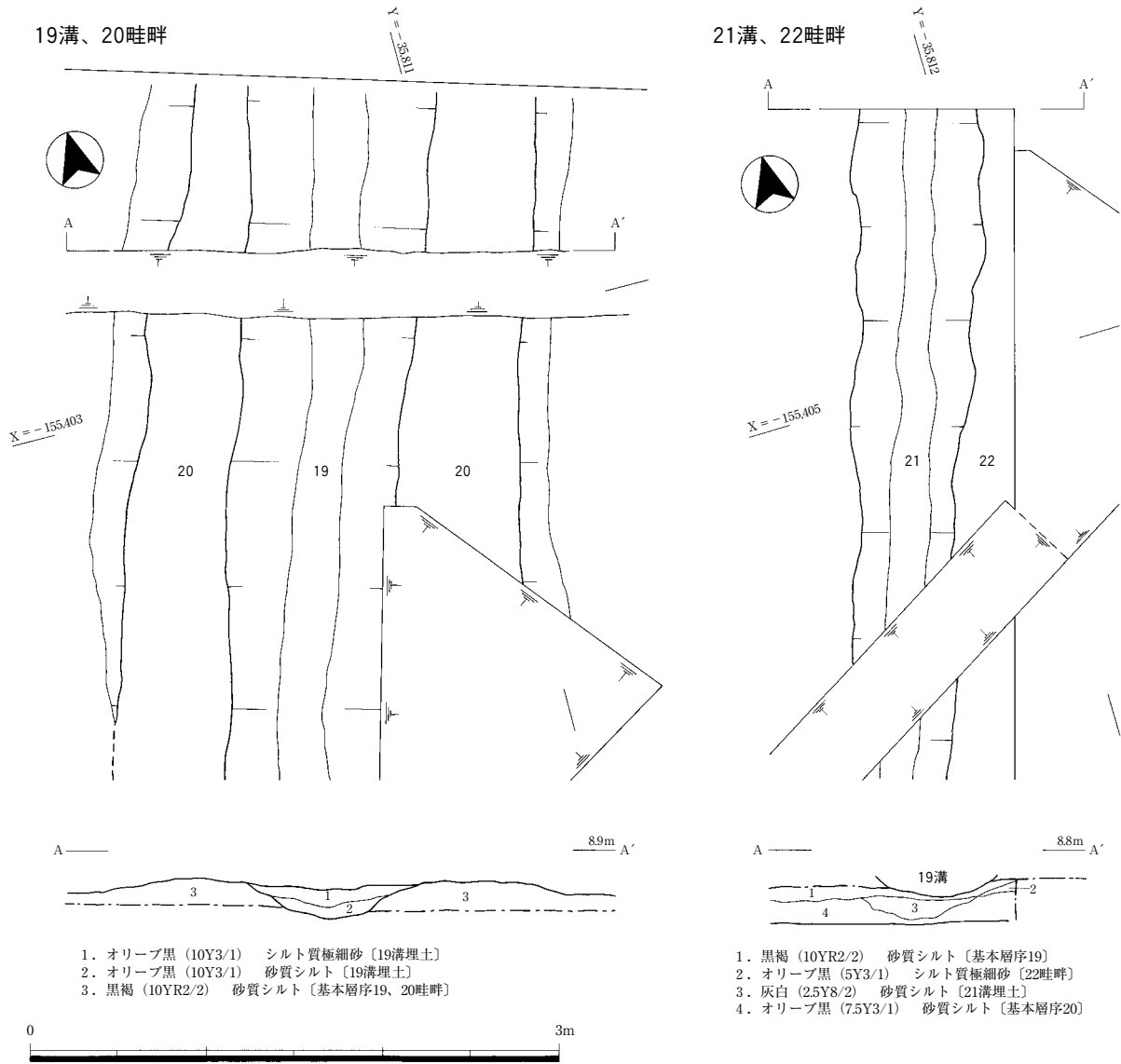


図53 19溝・20畦畔、21溝・22畦畔 平面・断面図

る。ただし、畦畔の東半部が縮小した調査区の外にあるため、形状や幅・高さ等の規模は不明である(図53)。21溝も第7面19溝の直下に検出されたもので、22畦畔の西辺に沿って延びている。幅0.54～0.75m・深さ最大0.13m(図53)。

このように第8面と第7面では、同じ位置に畦畔と溝が構築されている。調査面積が小さいために水田の規模・形状は明らかではないが、ほぼ類似した水田景観が展開していたものと考えられる。しかし第7面では畦畔の幅が拡幅されており、水田の形状や経営形態については変化も認められる。

### 第3節 遺物

05-1-2 調査区からはおよそ680点の遺物が出土した。そのうち約40%が、現代整地層と洪水砂層である0層からの出土であり、土器の種類としては約74%を土師器が占めている。各層および遺構出土

### 第3節 遺物

層・面	遺構	縄文	弥生	土師器	須恵器	黒色	瓦器椀	土師皿	石器	その他
攪乱層	整地		3	24	5			2	1	土師質土器1、(サヌカイト1)
	溝			2						
	不明			6	1					
0層			4	153	58		7	4		瓦3、陶器1、白磁1、人骨1
1層				3						
2層			2	101	1	2	2	2		瓦1、桃種1、馬歯
3層				127	9	1				桃種2
4層			2	91	2					桃種2
5層			5							
第4面	6ピット				1					
	8ピット			1						
	9ピット			1						
第6面	15溝		2							
	16溝		2							
第7面	18大溝・溝		35						4	桃種1、炭化木1、(サヌカイト4)
	18大溝・堤		1							
第8面	21溝								1	(サヌカイト1)
合計		0	56	509	77	3	9	8	6	

表4 05-1-2 調査区出土遺物数量表

遺物の数量は表2のとおりであるが、いずれも小片のため、図化できるものは極めて少ない。

洪水砂の0層からは弥生土器、土師器（壺、甕、羽釜、把手付埴、坏、高坏、他）、須恵器（壺、甕、器台、蓋坏、有蓋高坏、他）、瓦器（小皿、椀）、土師器小皿、陶器、白磁、瓦、人骨などが出土している（図54-367~372、図版24-1）。瓦器小皿の外面調整はヨコナデとユビオサエで、367は直径9.7cm、368は直径8.9cm。瓦器椀369・370は浅い器形で外面調整がユビオサエ、371はやや深い器形で内・外面とも粗くヘラミガキ調整されている。土師器小形丸底壺373は全面ナデ調整。同高坏372は多角柱の脚部をもつ。須恵器蓋坏は口径11.0cm程で、374は立ち上がりが短く、375は長い。

2層からは弥生土器、土師器（甕、羽釜、皿、高坏、他）、須恵器蓋坏、黒色土器、瓦器椀、土師器小皿、瓦、桃種などが出土している（図54-376~378）。瓦器椀376は摩滅が著しいが、内・外面ともヘラミガキ調整と思われる、高台は比較的高い。甕377も摩滅が顕著で、口径18.6cm。瓦378は凸面が無文で一枚造り。

3層からは土師器（甕、高坏、椀、他）、須恵器（甕、他）、黒色土器、桃種などが出土している（図54-379）。須恵器蓋坏379は口径12.3cmで立ち上がりが短い。

4層からは弥生土器（後期の甕）、土師器（壺、甕、高坏、把手、他）、須恵器（壺、他）、桃種などが出土している（図54-380・381）。380・381は土師器の把手で、形状は直線的で棒状に近く、後者には直径4mm程の円孔が通っている。

5層からは弥生土器が出土している（図54-382~384、図版24-2）。382~384は壺の小片で櫛描直線文が帯条施文されている。なお5層下面の第6面15・16溝からも、弥生土器と思われる無文の小片が出土している。

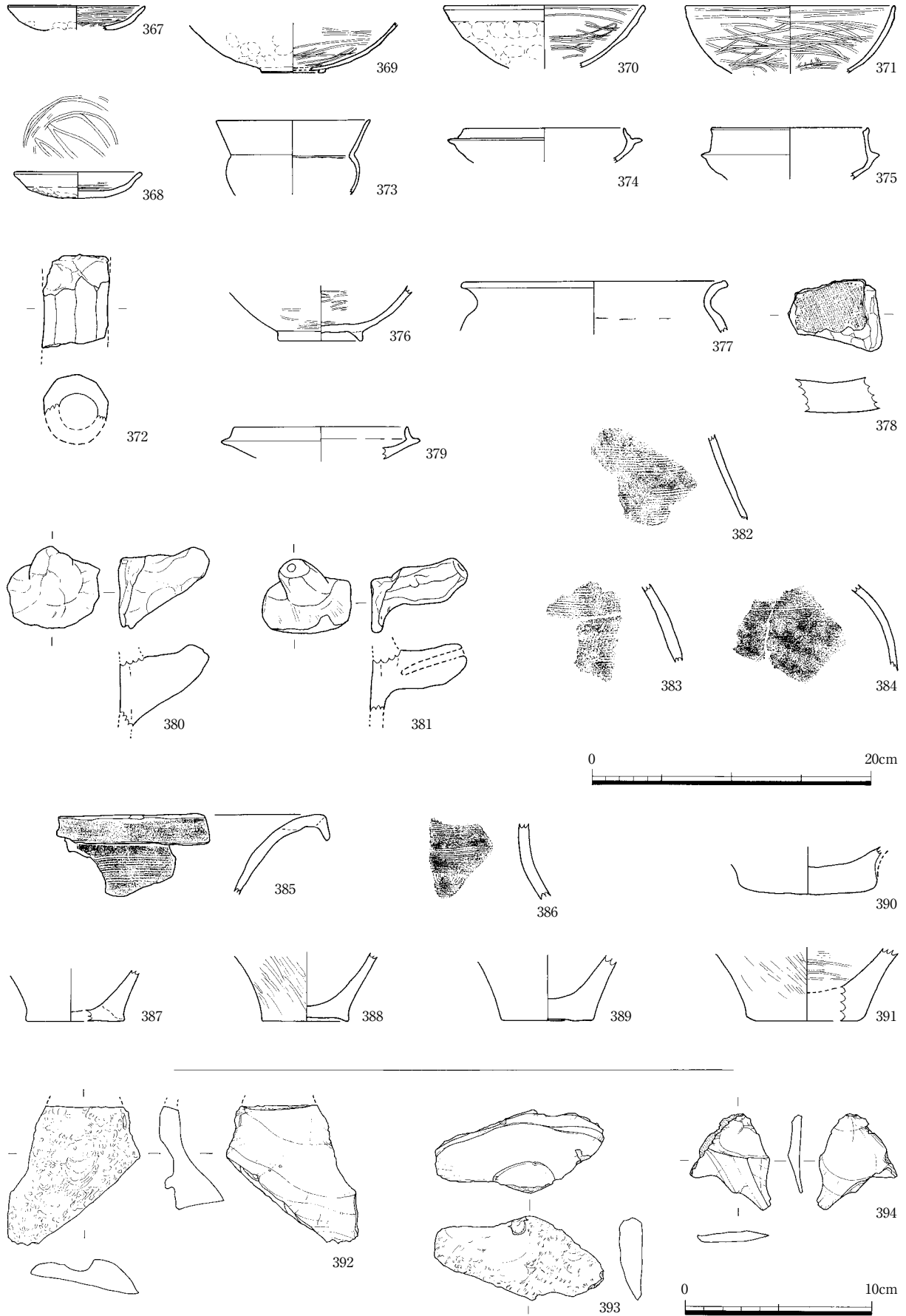


図54 05-1-2 調査区 土器、石器、瓦

### 第3節 遺物

18大溝の溝部分から弥生土器、石器、桃種、炭化木などが出土している（図54-385～394、図版24-2）。弥生土器には387～391のような底部片が多く、有文の385・386には櫛描直線文や扇形文が施されている。石器はいずれも灰黒色のサヌカイト剥片である。392は末端が肥厚する「し」の字状剥片で、頭部が折損している。重量は104.5g。393は礫塊のやや角張った部分を打点に設定した礫面打面の横長剥片。重量は40.3g。394は18大溝の堤部分から出土した小形剥片で、小さな単剥離面打面が遺存し、側辺にわずかに礫面がみられ、背面は他方向からの剥離面で構成されている。重量は9.8g。

なお、18大溝・堤部分出土の弥生土器は無文の小片、21溝出土の石器はサヌカイトの小さな剥片である。

## 第V章 まとめ

これまでに、田井中遺跡05-1-1調査区・同-2調査区の発掘調査を通じて検出された遺構および遺物について紹介してきたが、最後に、この2つの調査区周辺の既往の調査と比較しながら、今回の調査成果を簡単にまとめておきたい。

### 第1節 05-1-1調査区

05-1-1調査区では6つの遺構面を検出した。ただし、調査区中央部から東部の地区には近年まで溜池が存在していたため、遺構面全体あるいは遺構上部の削平など、溜池掘削による何らかの影響はいずれの遺構面にも及んでおり、第1～4面は調査区西部の地区のみに遺存していた。

まず本調査区の南に隣接する95-1調査区では4つの遺構面が確認されており、第1面／平安時代の耕作面、第2面／古墳時代、第3面／古墳時代中期（洪水に襲われる）、第4面／弥生時代前期、と考えられている〔駒井1997b〕。また東側の96-2調査区では5つの遺構面が検出されており、95-1調査区の成果を参考にしながら、第1面／古代～中世頃の水田面、第2面／古墳時代頃の面、第3面／古墳時代中期？（弥生時代前期～古墳時代中期）、第4面／弥生時代前期（方形周溝墓あり）、第5面／弥生時代前期、と考えられている〔本間1997a〕。そこで本調査区における各遺構面の時期であるが、第三章でも述べたように、地層と出土遺物の対応関係から第1面／中・近世、第2面／中世、第3面／古代、第4面／古墳時代と考えられる。また第5面については、そこで検出された遺構からは弥生時代前期の遺物のみが出土しているものの、8溝などで洪水砂によって埋没した状況がみられ、95-1調査区第3面の様相と類似することから、古墳時代中期の頃に比定しておきたい。第6面は弥生時代前期であり、95-1調査区の第4面・96-2調査区の第4面に相当するものである。なお22土器棺墓の下層にあたる6層で数点の縄文・弥生土器片が出土しているが、出土位置及び地層が限定的であり遺構も検出されなかったことから、96-2調査区の第5面に相当する弥生時代前期下層の第7面は設定しなかった。ただし、今後調査区周辺で類似した状況が増加するとすれば、検討を要することになるかもしれない。

さて第6面では土器棺墓、ピット、土坑、落ち込み、溝などの遺構が検出された。これらの遺構および5層出土の土器は、時代的には縄文時代晩期（末葉）と弥生時代前期に限定されている。このうち縄文土器に関しては、出土点数も少なく縄文時代の遺構も存在しないことから、主体となる弥生土器の中に客体的に混在したものであり、共伴する弥生時代前期の土器を具体的に特定することは困難である。因みに今回の調査で出土した縄文土器片は、調査面積1㎡当たり約0.12点になるが、田井中遺跡の北東に隣接する志紀遺跡96-1調査区では約0.19点であり〔岩崎1998〕、縄文晩期と弥生前期が混在する出土状況の中ではむしろ少ないといえるかもしれない。その弥生土器については、破片をも含めた広口壺全体の文様をみると、口頸間・頸胴間の削出段あるいは高い突帯がわずかにみられるものの、主体は2・3条程度の沈線が付加された低い（あるいは不明瞭な）削出突帯や段であり、次いで土坑や溝から出土した土器のように沈線文帯・貼付突帯・無文等が存在する。こうした広口壺の文様にみられる様相は、本調査区出土の弥生時代前期の土器としては、主に前期後葉から末葉（I-3・4様式）の土器が含まれていることを示している〔寺沢・森井1989〕。

ところで土器棺墓は、棺身に大形壺（太頸広口壺）、棺蓋に鉢を用いた土器棺を長楕円形墓坑の片隅に斜位に埋設したものである。棺身に利用された大形壺は、文様として頸部に3条の沈線、頸胴部間に3条の沈線（上端部の沈線については部分的に削出的な手法がみられる）が施文されたもので、時期的には前期後葉（Ⅰ-3様式）と考えられる。こうした蓋の付いた土器棺墓については、弥生時代前期における傾向として、蓋として棺身より一回り小さい鉢などを用いること、斜位に埋設すること、などが挙げられており〔岡本2002〕、この土器棺墓も弥生時代前期に特徴的な事例と考えられる。なお田井中遺跡に隣接する木の本遺跡でも2つの土器棺墓が検出されているが、これらは田井中遺跡例よりもわずかに古い前期中葉のもので、棺身に口頸部を打ち欠いた広口壺（蓋は鉢）と大形壺（蓋は不明）がそれぞれ利用され、正位に埋設されていた〔岩崎・他2004〕。

第6面の28溝では完形の広口壺2点が横倒しの状態で出土した。いずれも丁寧にヘラミガキ調整された無文の土器で、時期的には前期末葉（Ⅰ-4様式）に比定されるが、あるいはⅡ様式に下る可能性があるかもしれない。同じく57溝でも完形の広口壺2点が出土しており、3帯の沈線文帯を施文した壺は正立して、やや長頸で貼付突帯を施文した壺は倒立して出土した。いずれも前期末葉（Ⅰ-4様式）と考えられる。こうした溝と完形土器の在り方は、今回は検出されなかった方形周溝墓が示す様相に共通するものがあり、墳丘上の供献土器が周溝に転落した状況に類似している。これらの土器に穿孔や打ち欠きなどの特徴はなく、具体的・積極的に墓と関連させることはできないが、ここには土器棺墓も構築されており、加えて80m程度東側に離れているものの96-2調査区では方形周溝墓も検出されていることから、弥生時代前期後葉から末葉の時期に調査区周辺が墓域として利用されていた可能性は高いように思われる。

また63土坑（溝の可能性もあるが）から出土した匙形土製品も、田井中遺跡における調査区周辺もっていた場の性格・役割を探る上である程度参考にはなろう。匙形（杓子形などとも呼ばれる）土製品そのものは縄文時代から古墳時代までみられる遺物であるが、今回の出土例のような球形袋状の体部をもつものは、稲作農耕文化の受容とともに新たに弥生時代前期に出現したと考えられている。そして、出土例は極めて少なく、その形状が山賀遺跡出土のヒョウタン製杓に極めて似ていることから、ヒョウタンの形を模した遺物であり、中空の体部に特別な霊力が宿り生命や靈魂の生成・再生を促すという観念・信仰を具現化した祭祀具であると解釈されている〔大野1989〕。これまで弥生時代において匙形土製品が墓と考えられる遺構から出土した事例は皆無であり、少なくとも直接的に死者に供えられる遺物ではなさそうであるが、例えば先述した木の本遺跡の土器棺墓を検出した地区でも、田井中遺跡例と酷似した匙形土製品（口縁部を廻る沈線の条数が少ない）が出土しており、ヒトの死や埋葬の場で何らかの役割を担った器物であるという可能性も今後の調査の視野に入れておきたい。

このように05-1-1調査区は、田井中遺跡において、弥生時代前期後葉から末葉に存在した集落の周辺部にあたり、方形周溝墓等は検出されなかったものの、居住域とは距離をおいて「場」や「空間」を異にする墓域（96-2調査区も含む）の一部として機能していたものと考えられる。そしてその場合の居住域は、田井中遺跡95-2調査区〔駒井・他1997〕など05-1-1調査区から西側にあたる八尾駐屯地正門西地区に求められることになろう（図7）。

## 第2節 05-1-2調査区

田井中遺跡の東端に位置する05-1-2調査区は、そのすぐ北側で志紀遺跡の南端に接している。ここからは8つの遺構面を確認したが、検出した遺構や出土した遺物の数量が極めて少ないため、その時期を検討する際には周辺の調査成果も勘案しながら推測することになった。

調査区の上層は志紀遺跡で広く確認されている鎌倉期の洪水砂層が堆積しており、この砂層に覆われた遺構面を第1面とした。第1面／中世（水田）、第2面／古代から中世（水田）、第3面／古代、第4面／古墳時代（後期）から古代、第5面／古墳時代（中期から後期）、第6面／古墳時代（前期？）と推測される。第6面の時期については、5層および第6面の溝から弥生時代中期の土器が出土しているが、下層の第7面が弥生時代中期以降であること、田井中遺跡96-1調査区で第6面に相当すると推定される遺構面が古墳時代前期に比定されていること〔本間1997b〕、第6面は洪水によりもたらされた砂礫層の堆積後に形成されているが、志紀遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期にかけて数回の洪水に襲われたことが確認されていること〔市村2002〕、等の状況を考慮して古墳時代（前期？）と推測した。第7面および第8面についても、上層の遺構面と同様に時期を検討するための材料に乏しく、周辺の調査状況に基づいて第7面／弥生時代前期末葉から中期、第8面／弥生時代前期と推測した。

第7面では2時期の遺構が重複しており、新段階の大溝と古段階の畦畔・溝が検出された。畦畔と溝は水田に伴う遺構で、その時期は遺構面の時期が示す弥生時代前期末葉である。一方水田の中に掘削された大溝については、大溝を埋没させた砂礫層の中から弥生時代中期の土器片が出土しており、水田よ

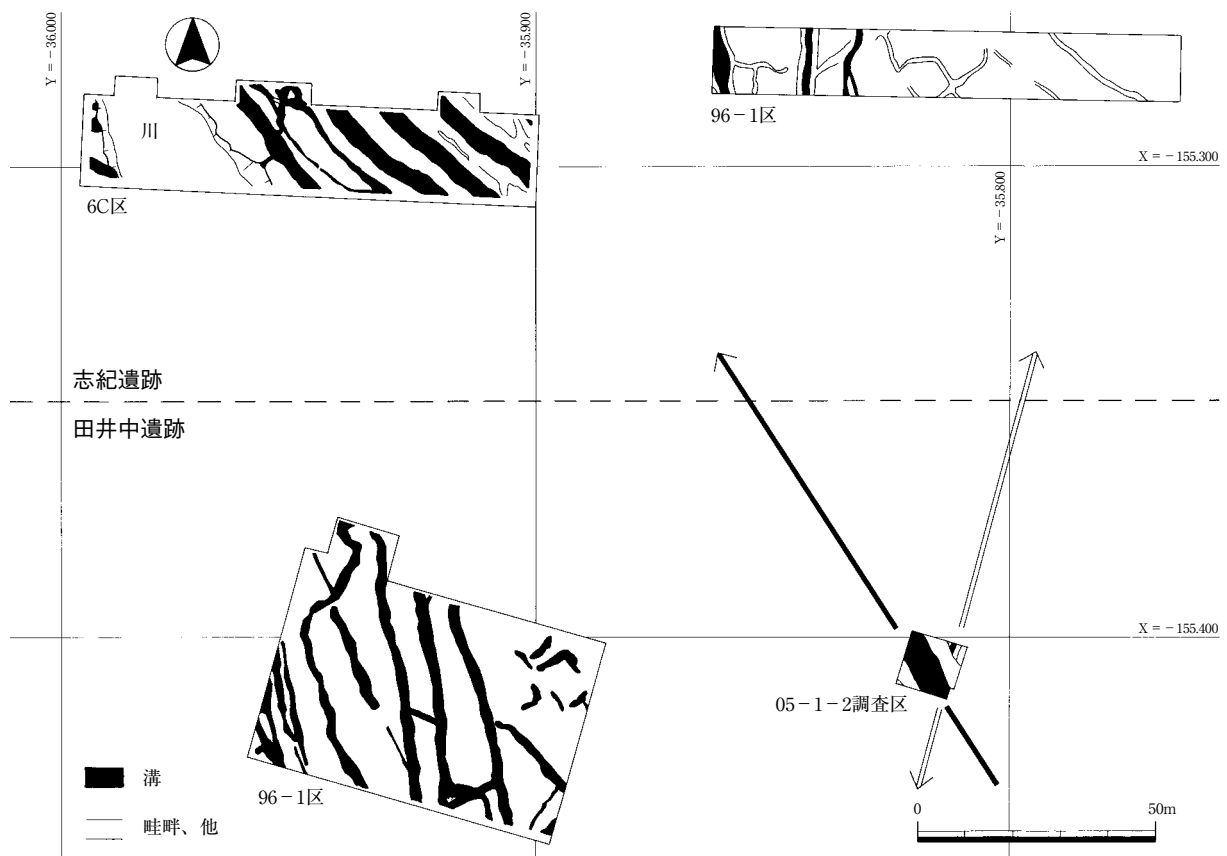


図55 志紀・田井中遺跡における弥生時代前期末葉から中期の溝群



り新しい弥生時代中期と推測した。また第8面においても、第7面の畦畔・溝とほぼ同じ位置に同様の遺構が検出されており、水田が広がる景観が展開していたものと考えられる。

ところで、この大溝は掘削した土砂を積み上げて溝の両側に堤を築いており、堤の高さはおよそ40cm、両堤を含めた大溝の幅は11.5m以上になる。調査区全体が大溝で占められているような検出状況であり、「大溝」という名称を付したが確かにその名に相応しい規模ではあろう。しかし堤を除いた溝部分のみの大きさとなると幅4.55m・深さ1.23mになり、著しく大きいという規模ではない。

ここで、05-1-2 調査区周辺で実施された既往の調査の中から、第7面と同じように土壌化の進んだ黒色・粘土質の地層に形成された遺構面を抽出すると、弥生時代前期末葉から中期という時期には数多くの溝が掘削され、また水田が営まれていたことがわかる（図55）〔本間1997b、本間・他2002、市村・他1998〕。今回検出された大溝とこれらの溝を比較すると、堤を伴うという形態の面で類似例はないが、溝のみの規模としては、田井中遺跡96-1区の溝よりは大きいものの、志紀遺跡6C区の溝とは同程度の規模になる。すなわち、大溝をそのまま延長すれば志紀遺跡6C区と96-1区の間に延びそうであるが、溝の規模や地形等を考慮に入れれば、6C区で検出された川の東側に掘削された溝のいずれかに接続する可能性も否定できないように思われる。

一方、大溝の掘削によって断ち切られているものの、南北方向に延びる溝と畦畔については、志紀遺跡96-1区において同種の遺構を見出すことができる（図55）。ここでは水田に伴う大畦畔とされ、やはり南北方向に延びている。両調査区は100m以上離れており、直接的に結び付けて検討するには無理があるが、遺構の形態や方向には類似する点があり、先述した大溝も含めて、田井中・志紀遺跡間における遺構の関連性を追及する視点や方法が必要になるだろう。

以上のように田井中遺跡05-1-2 調査区周辺は、弥生時代以来、度重なる旧大和川の洪水に見舞われながらも、連綿として生産域としての役割を果たしてきた。今後、各時代における水利システムも含めた水田経営の実態をより具体的に把握し、遺跡の歴史的な理解を深めていくためには、こうした生産域という広域的な性格を有するが故に、志紀遺跡も含めたより広い地域を対象にして検討が加えられることが大切であろう。

## 参考文献

- 市村慎太郎2002「志紀遺跡の変遷と周辺遺跡」『志紀遺跡（その2・3・5・6）－大阪府営八尾志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書－』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第73集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 市村慎太郎・岩崎二郎1998「調査の成果」『志紀遺跡（その4）－大阪府営志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第25集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 井藤暁子1983「近畿」『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス社
- 岩崎二郎1998「突帯土器とⅠ様式土器の共伴」『志紀遺跡（その4）－大阪府営志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第25集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 岩崎二郎・横田明・山田隆一2004『木の本遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2003-2 大阪府教育委員会
- 大野薫1989「匙形土製品小考」『大阪文化財論集－財団法人大阪文化財センター設立十五周年記念論集』（財）大阪文化財センター
- 岡本茂史2002「蓋の付いた土器棺墓」『大阪文化財論集Ⅱ』（財）大阪府文化財センター
- 亀島重則1999「弥生時代前期遺構群の性格と変遷－田井中ムラの成立と展開」『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅷ』大阪府教育委員会
- 駒井正明1997a「調査に至る経緯と経過」『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）－陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 駒井正明1997b「田井中遺跡95-1区の調査成果」『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）－陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 駒井正明1997c「田井中遺跡の変遷」『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）－陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 駒井正明・本間元樹・田坂佳子1997「田井中遺跡95-2区の調査成果」『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）－陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 阪田育功1997「河内平野低地部における河川流路の変遷」『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会
- 田坂佳子1997「位置と環境」『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）－陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 寺沢薫・森井貞雄1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社
- 別所秀高2002「八尾市志紀遺跡における縄文時代～中世の堆積環境の変遷過程とそれらに対応した耕作地の開発」（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第73集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 本間元樹1997a「田井中遺跡96-2区の調査成果」『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）－陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 本間元樹1997b「田井中遺跡96-1区の調査成果」『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）－陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 本間元樹・野口舞・パリノサーヴェイ(株)2002「6C区の調査成果」『志紀遺跡（その2・3・5・6）－大阪府営八尾志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書－』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第73集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 横田明2004「木の本遺跡の遺構群について」『木の本遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2003-2 大阪府教育委員会
- 米田敏幸1997「中河内弥生集落遺跡群の変遷」『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会

なお田井中遺跡の既往の調査については八尾市教育委員会、（財）八尾市文化財研究調査会、大阪府教育委員会などから報告書が刊行されており、今回の調査においても参考とさせていただいた。これらの報告書については第Ⅱ章で掲げた参考文献に詳しく記載されている。



# 写真図版





1 溜池と木樋  
(北東から)

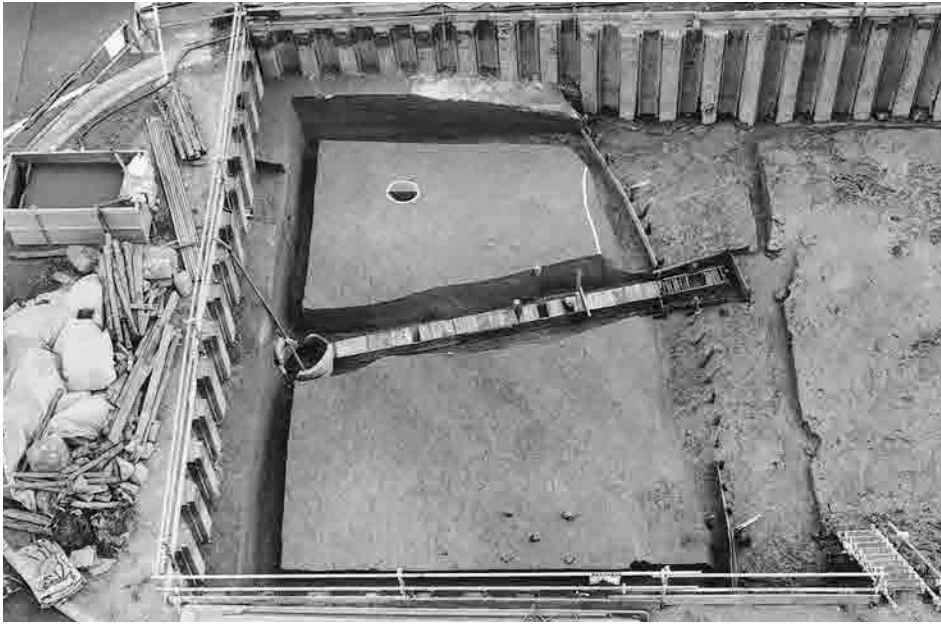


2 第1面 畦畔と足跡  
(北から)



3 第2面 溝と足跡  
(北から)

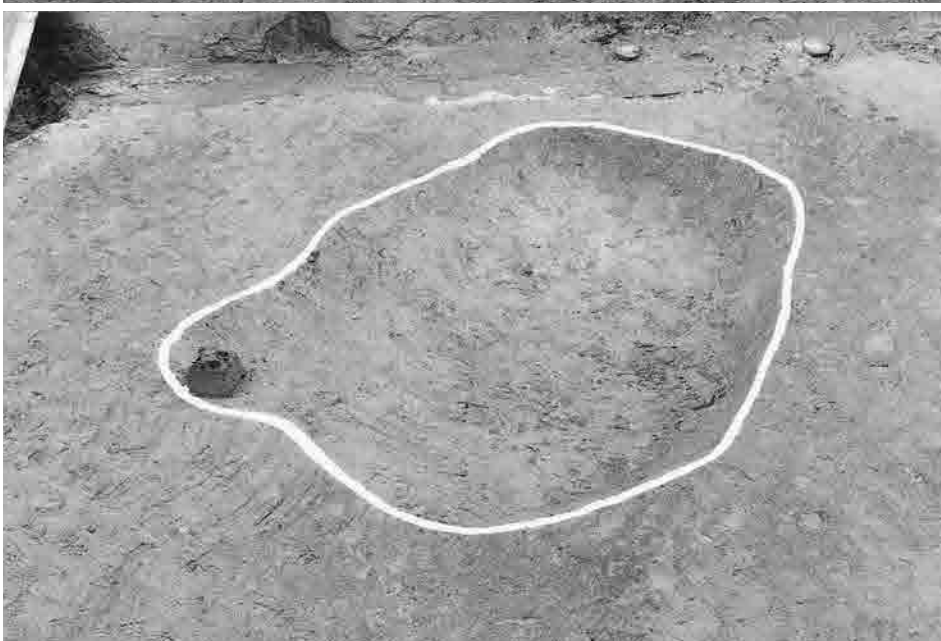
図版2 05-1-1 調査区



1 第3面 全景  
(南から)



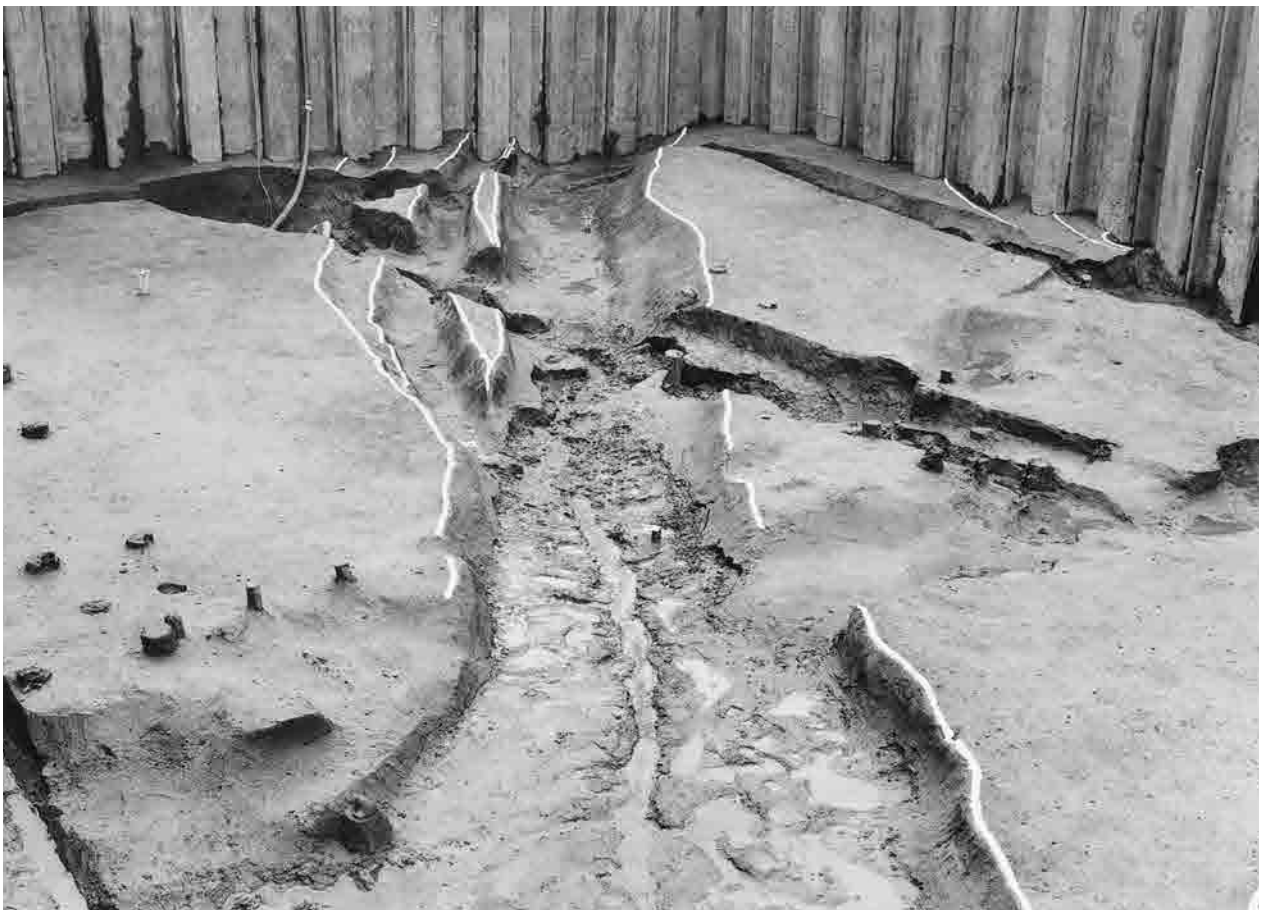
2 3層 土師器出土状況  
(北西から)



3 第4面 5土坑  
(南西から)



1 第5面 全景 (南から)



2 8・9溝 (南東から)



図版4 05-1-1 調査区



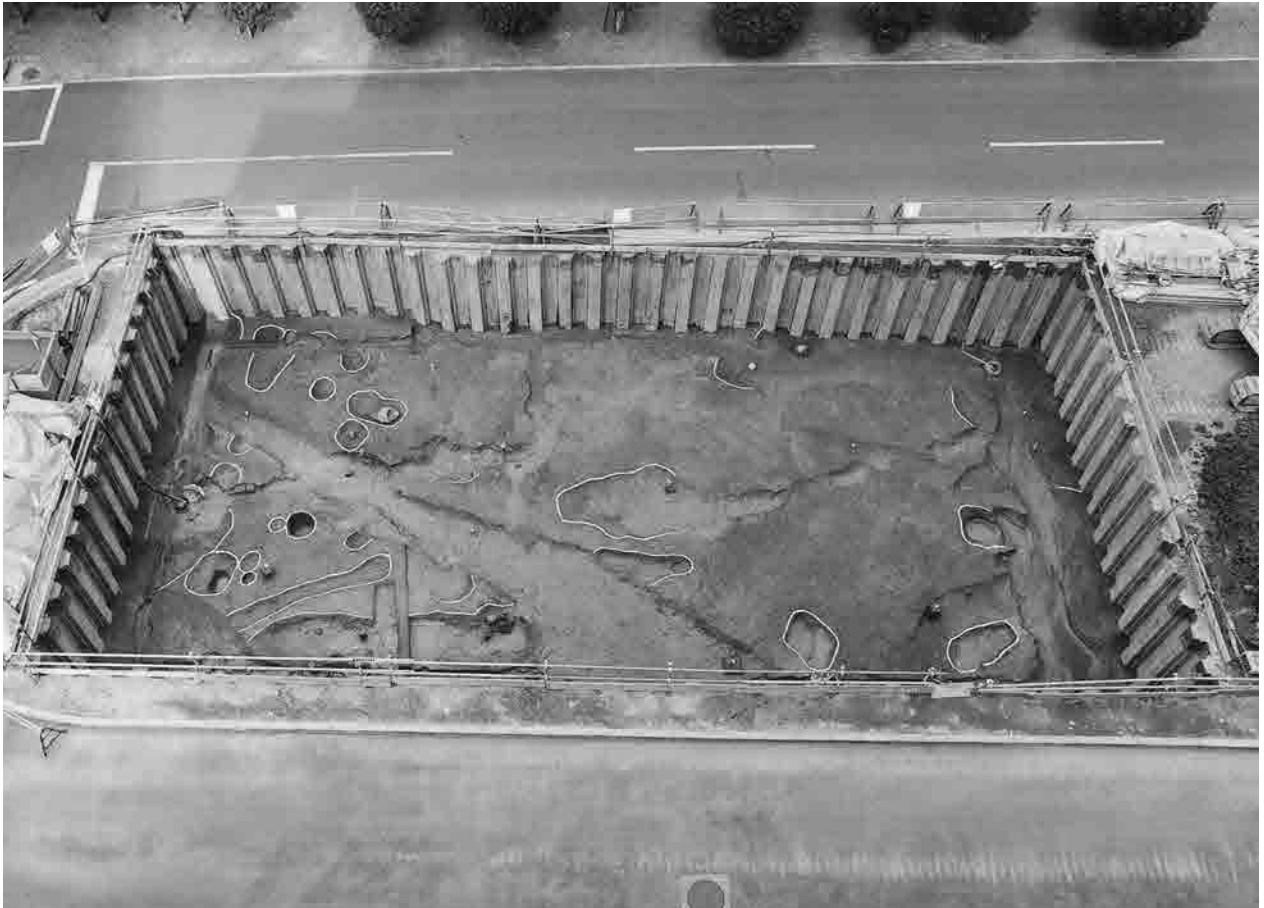
1 8・9溝 埋没状況  
(南東から)



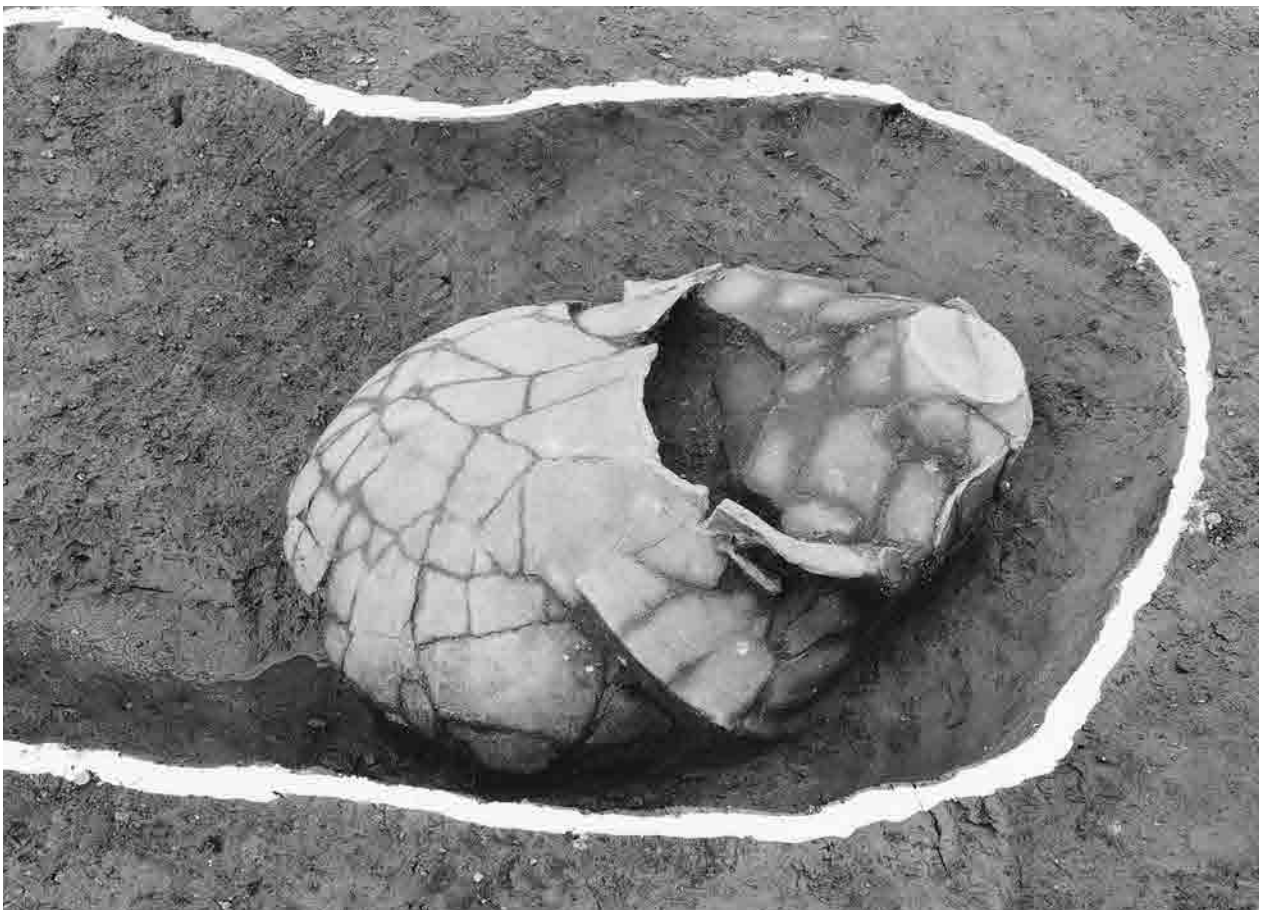
2 10土坑 石包丁  
(南から)



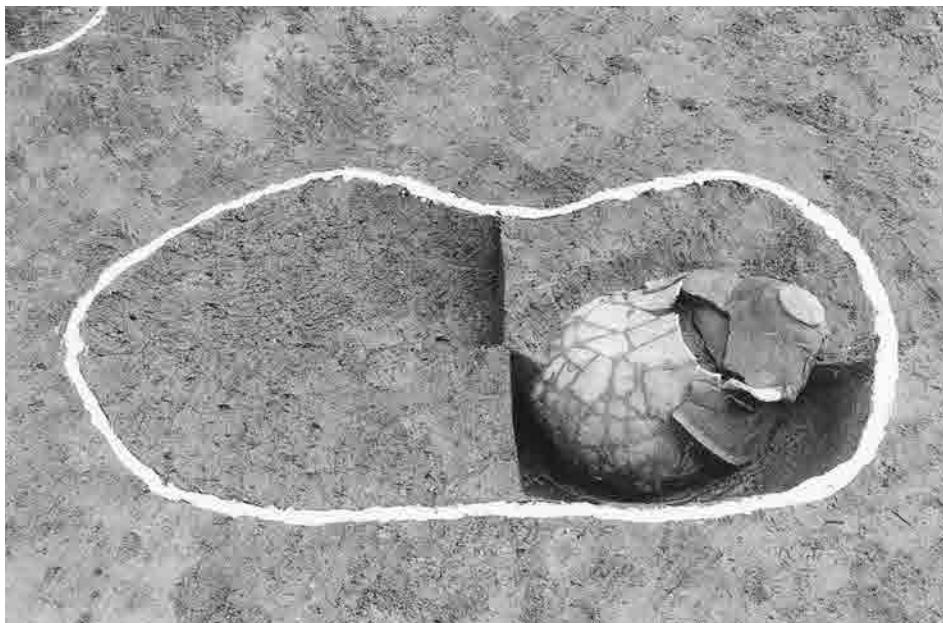
3 第5面  
4層の掘り込み状況  
(北東から)



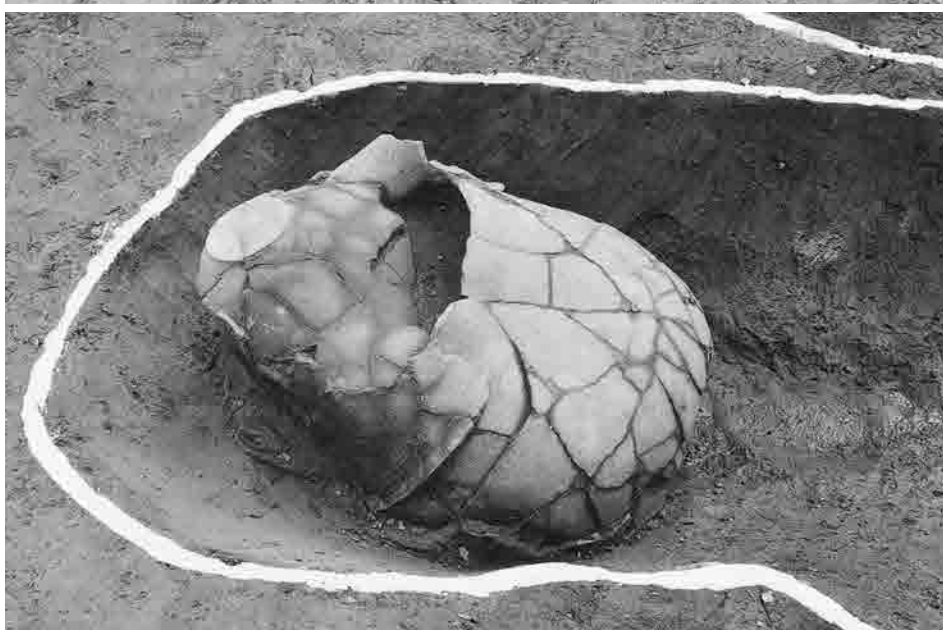
1 第6面 全景（南から）



2 22土器棺墓 土器棺（南西から）



1 22土器棺墓 全景  
(南西から)



2 22土器棺墓 土器棺  
(東から)



3 22土器棺墓  
棺蓋を外したところ  
(南から)



1 28溝 広口壺出土状況  
(北から)



2 57溝 広口壺出土状況  
(北西から)



3 57溝 小形鉢出土状況  
(西から)

図版8 05-1-1 調査区



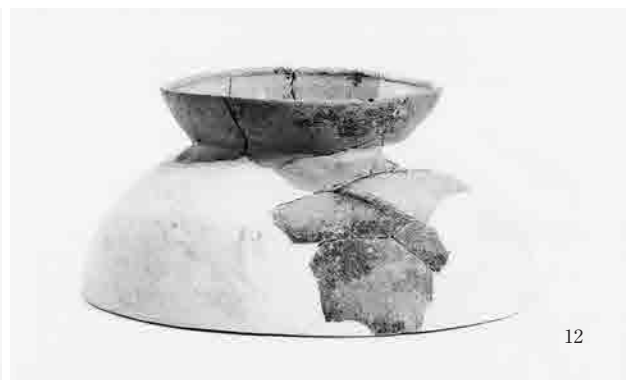
1 26土坑  
廣口壺出土状況  
(南西から)



2 60土坑  
弥生土器出土状況  
(北から)



3 63土坑 匙形土製品  
(南から)

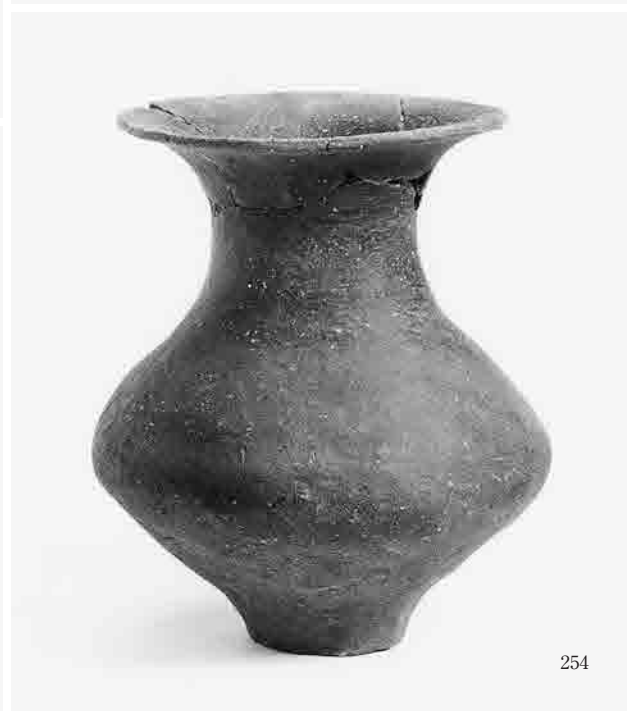


3層 (10、12、7、9、11)、5土坑 (159)

图版10 遺物



5 土坑 (157)、22土器棺墓 (165、166)、57溝 (259、261、262)



5層 (59、60)、26土坑 (186)、28溝 (254、255)、攪乱層 (288)



図版12 遺物



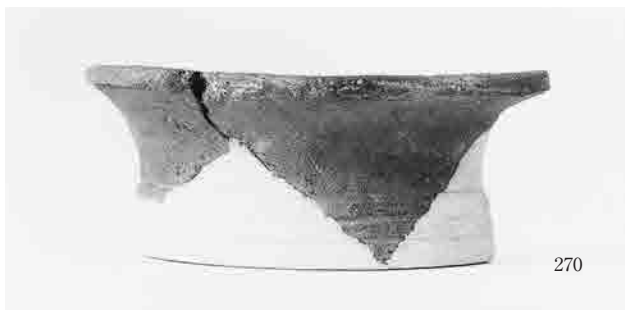
196



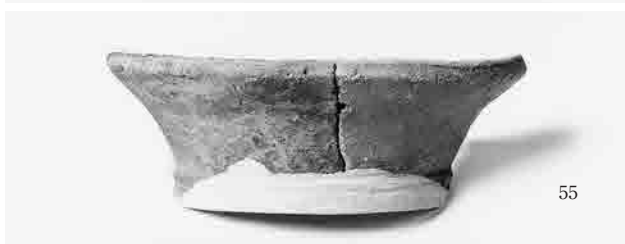
189



287



270



55



57



160

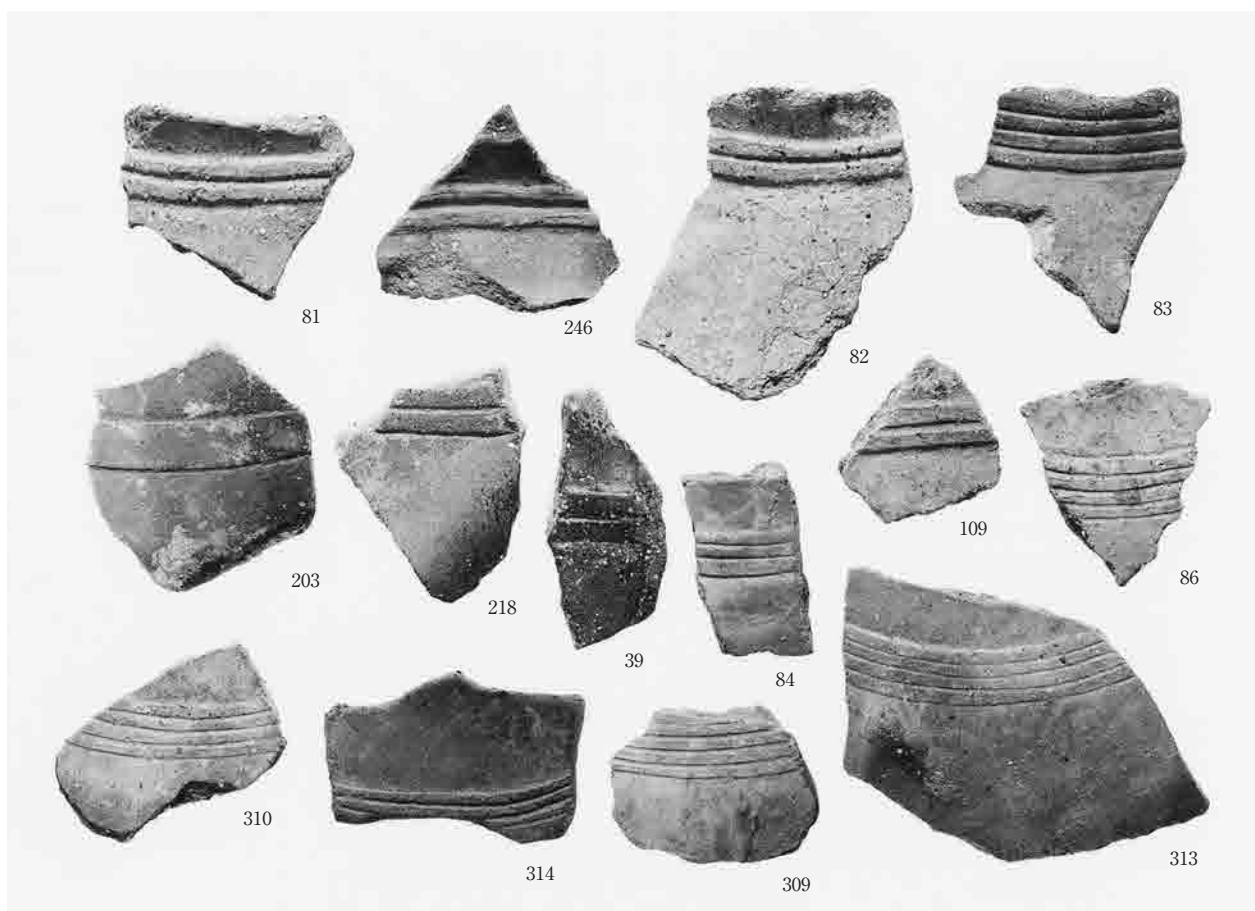


260

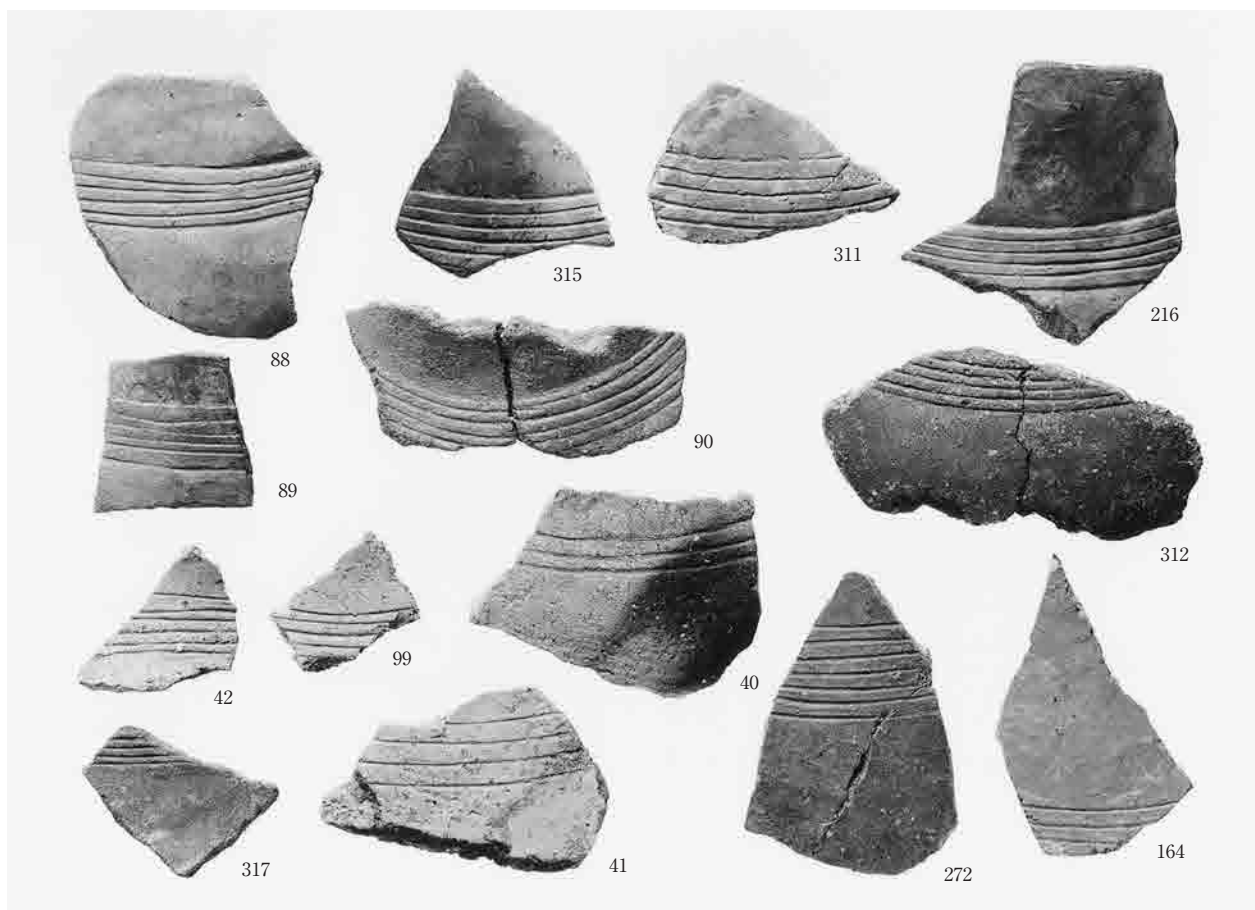


289

5層 (55、57)、52 (189)・60 (196) 土坑、14 (160)・57 (260)・62 (270) 溝、攪乱層 (287、289)

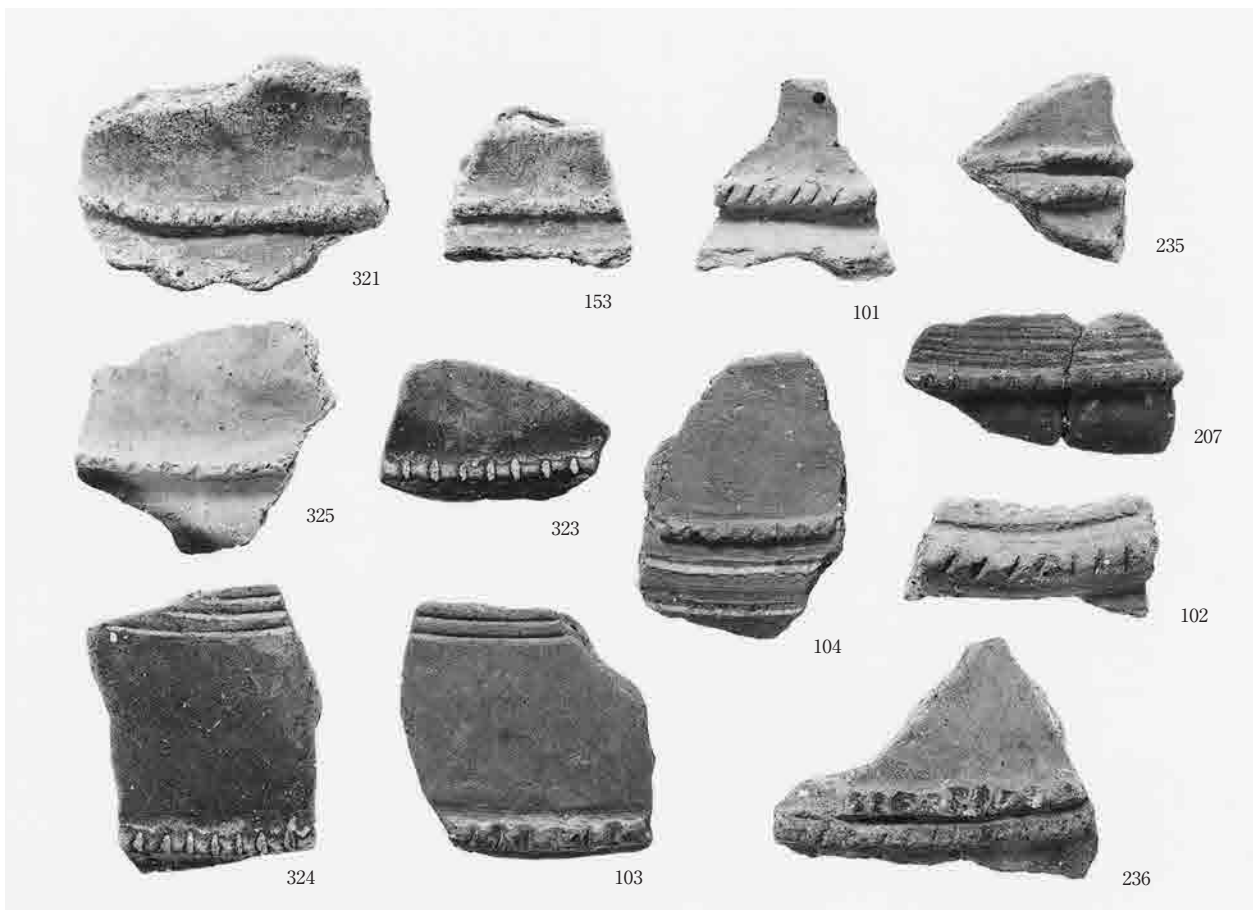


1 弥生土器-壺の文様 (削出突帯)

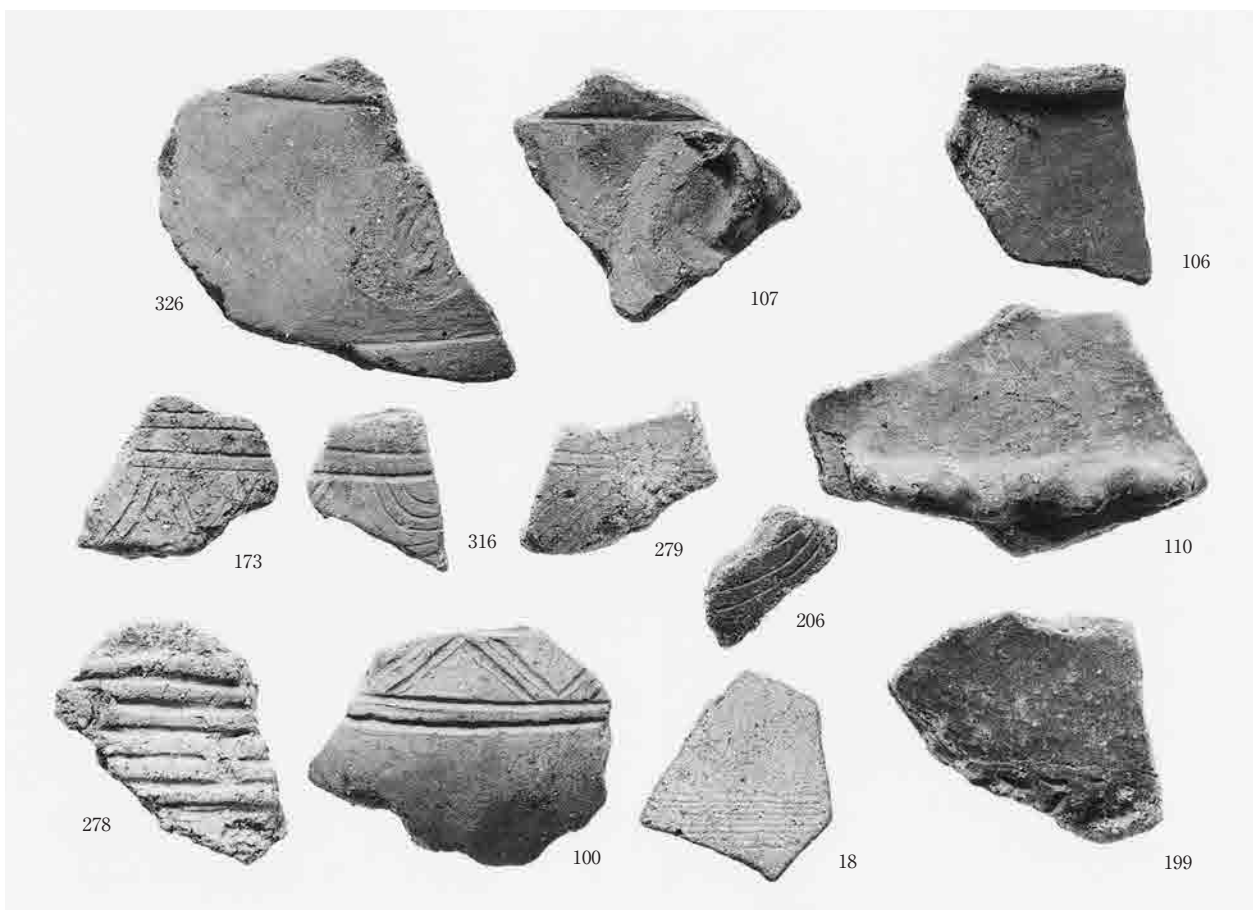


2 弥生土器-壺の文様 (削出突帯、沈線)

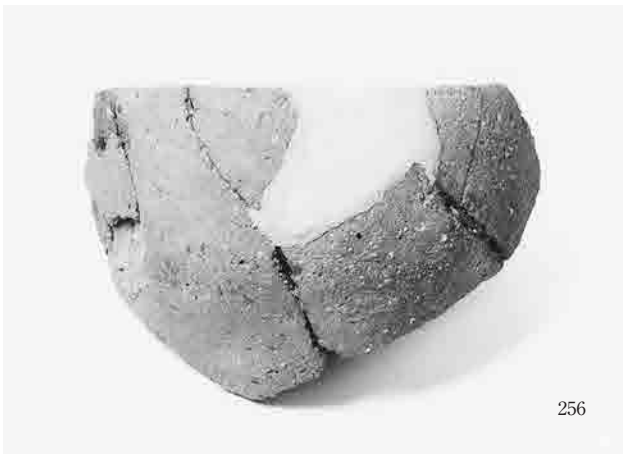
図版14 遺物



1 弥生土器-壺の文様 (貼付突帯、沈線)

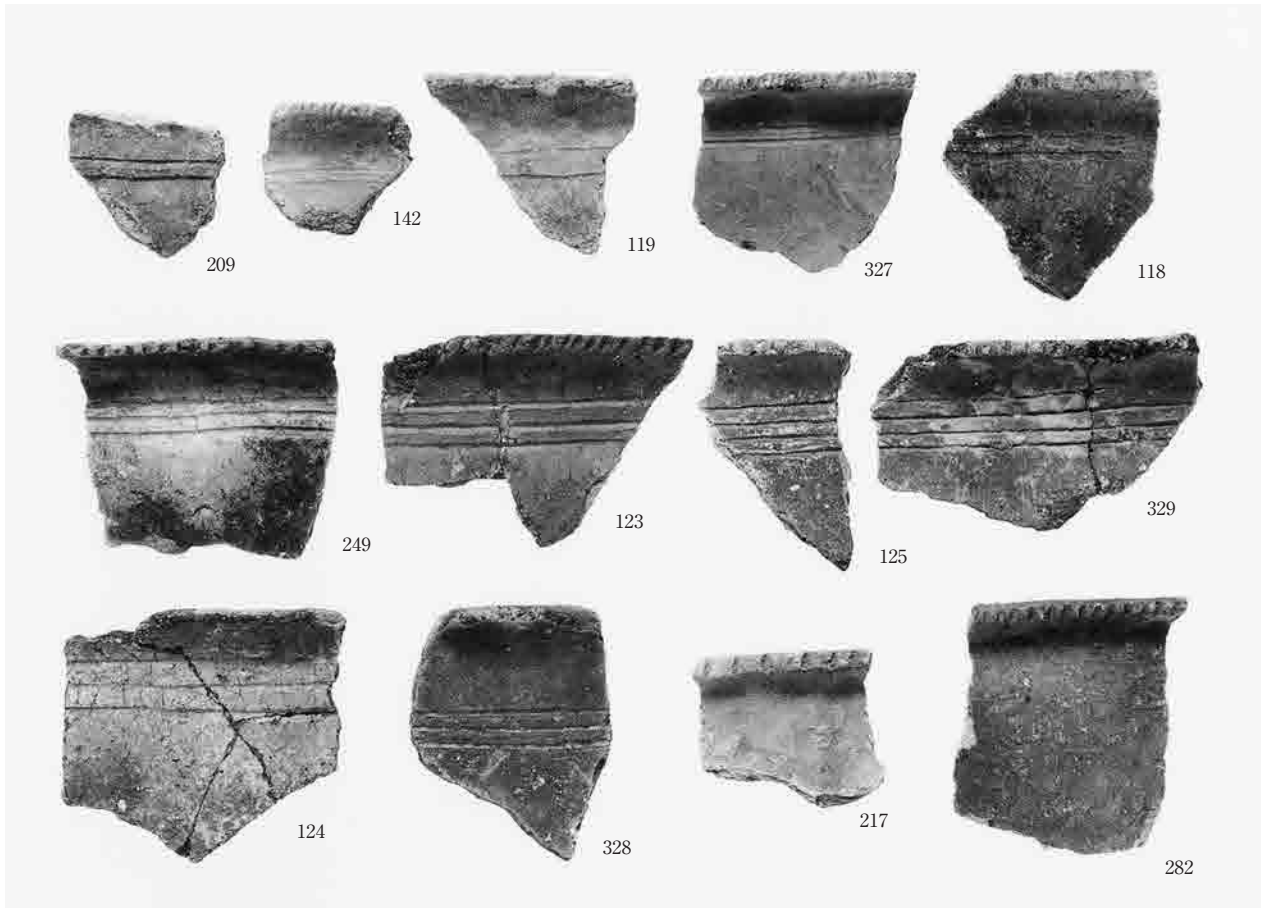


2 弥生土器-壺の文様 (削出突帯、貼付突帯、沈線、櫛描、刺突、突起)

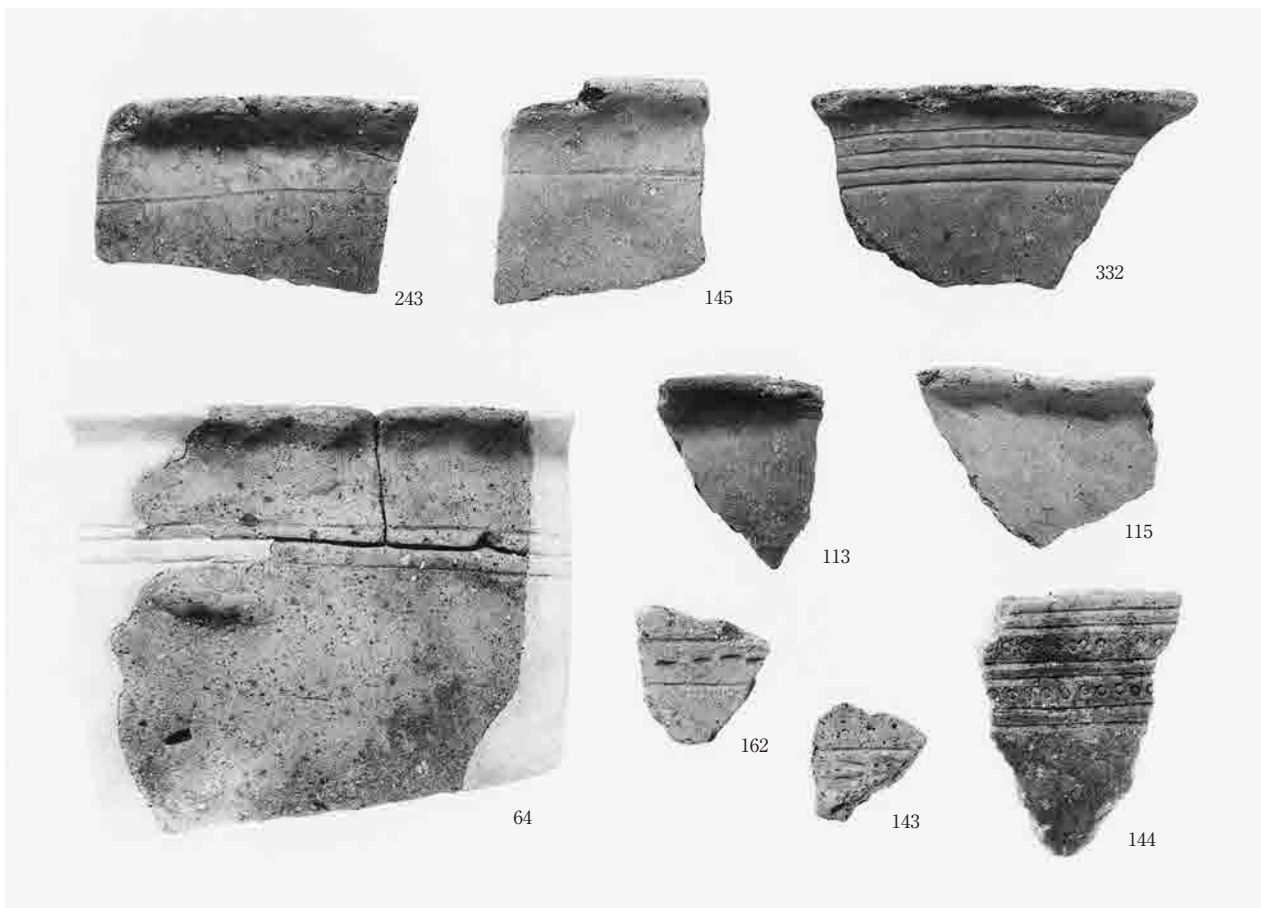


30土坑 (187)、45落ち込み (230)、28溝 (256)、攪乱層 (292~295、297)

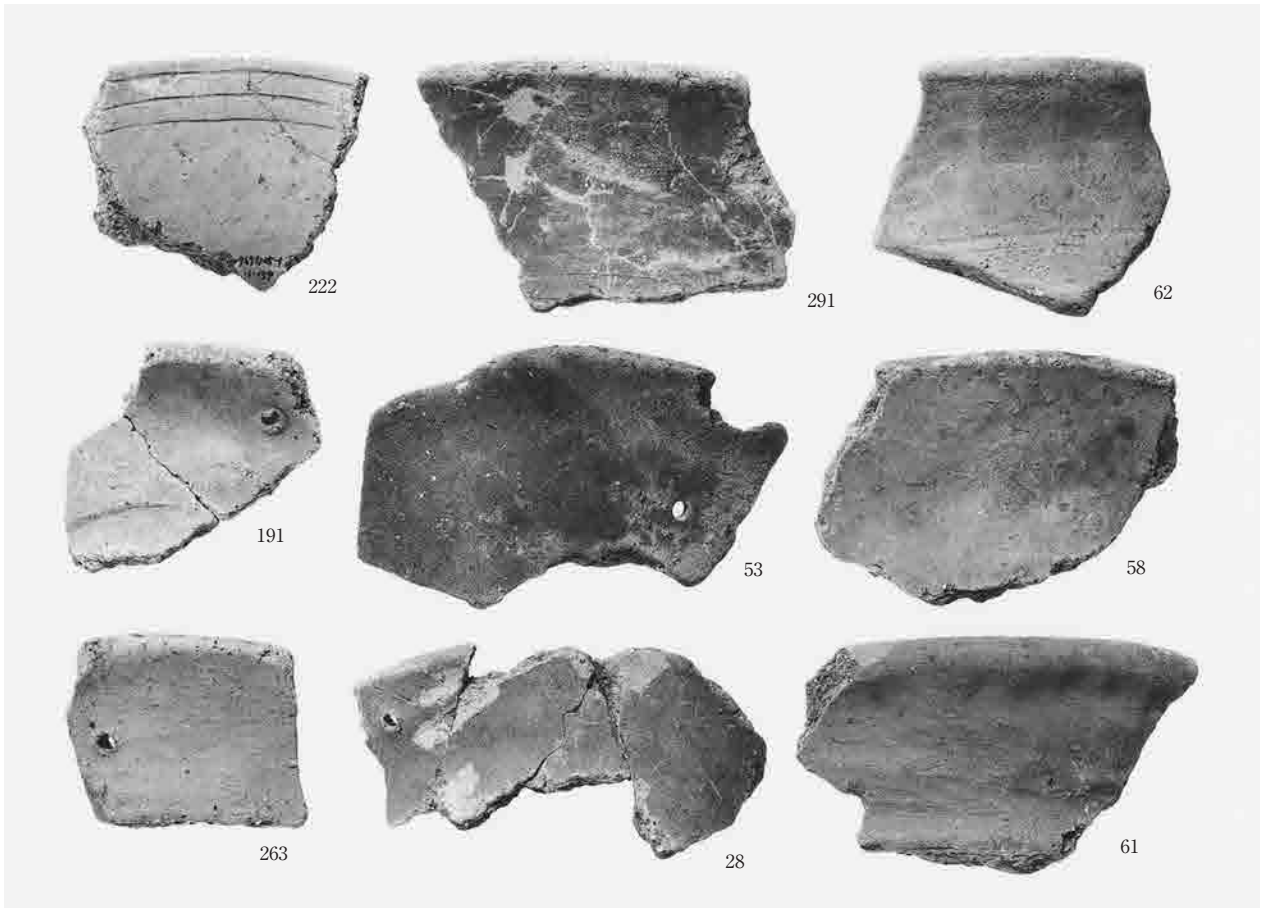
図版16 遺物



1 弥生土器-甕の文様 (刻目、段、沈線)



2 弥生土器-甕、鉢の文様 (刻目、沈線、刺突、把手)



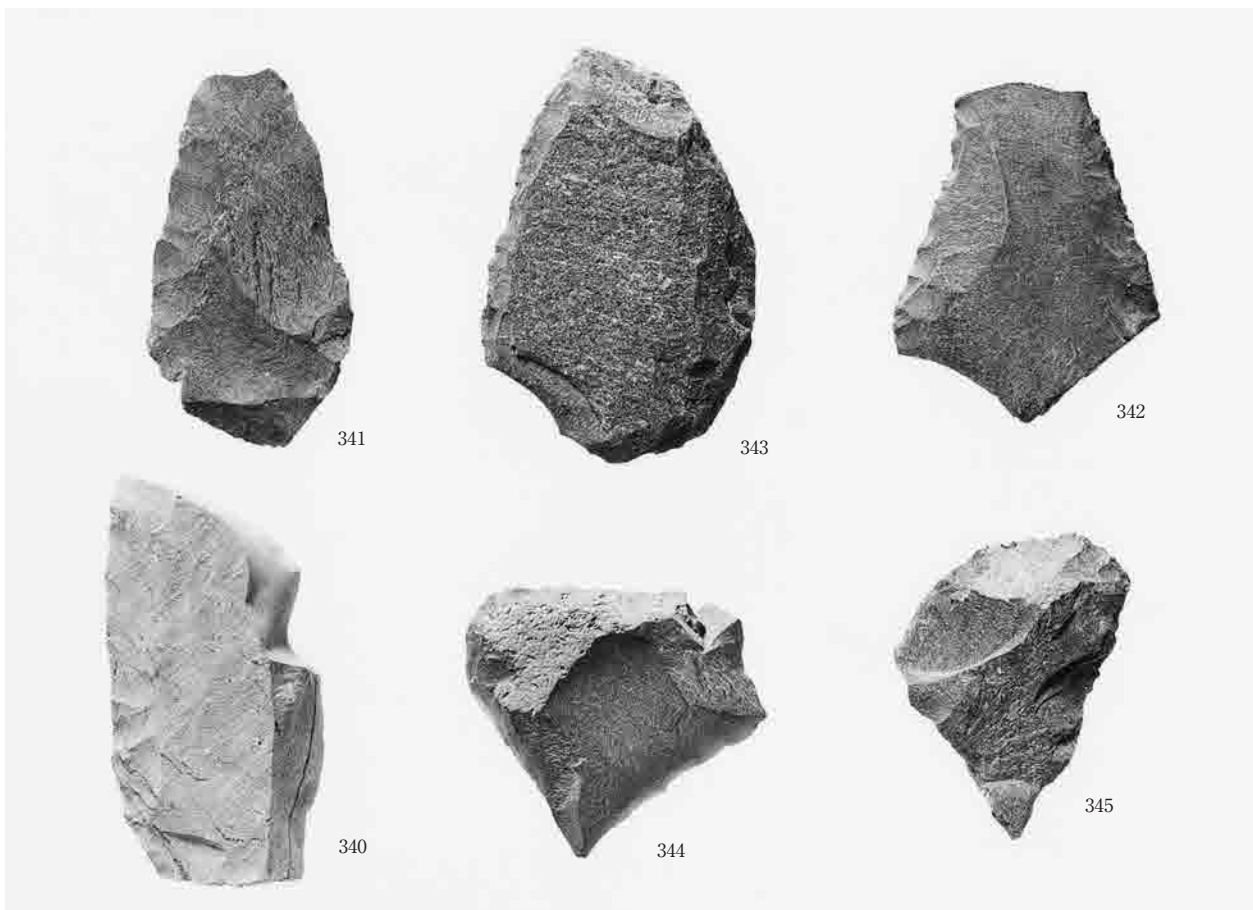
1 弥生土器（壺、鉢の口縁部）



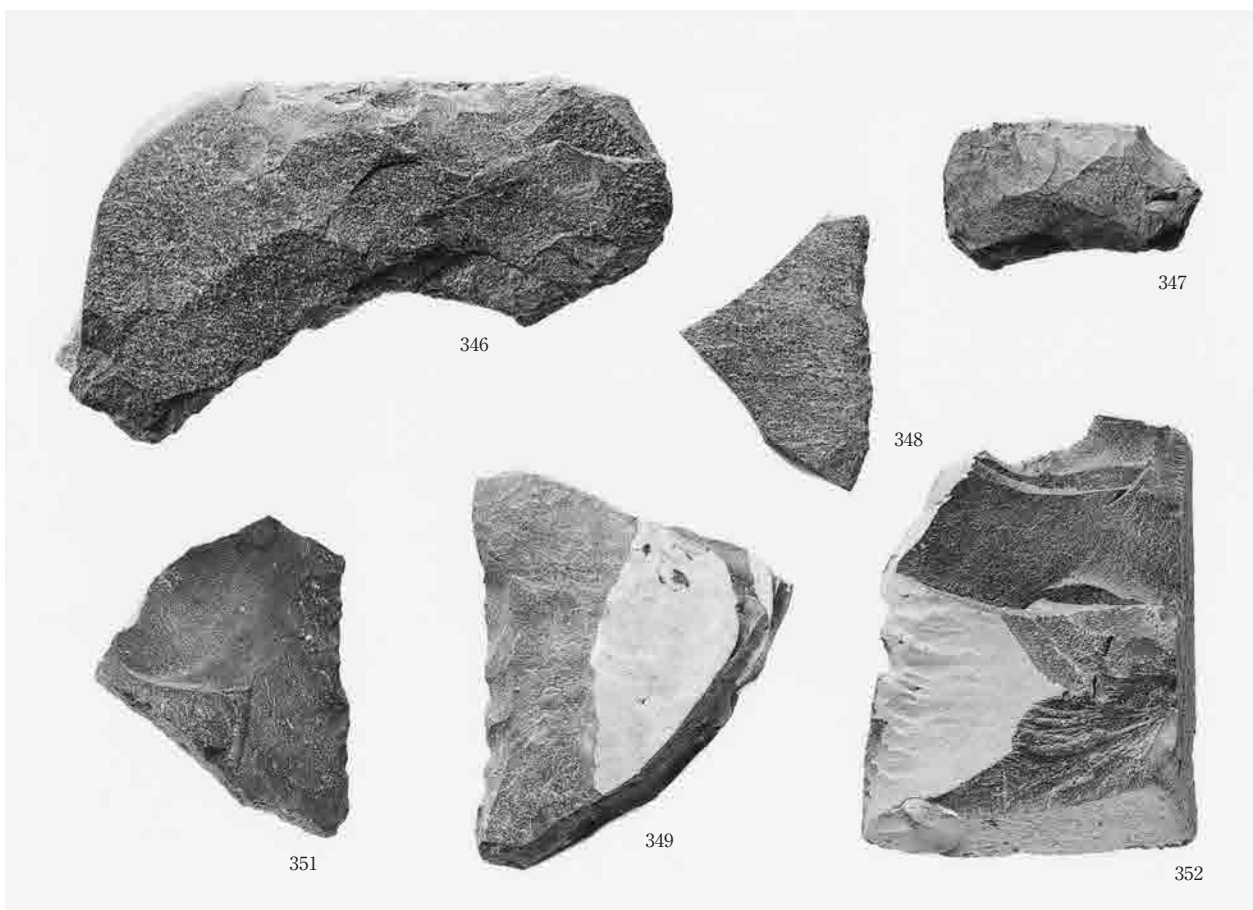
2 匙形土製品

3 弥生土器（底部）

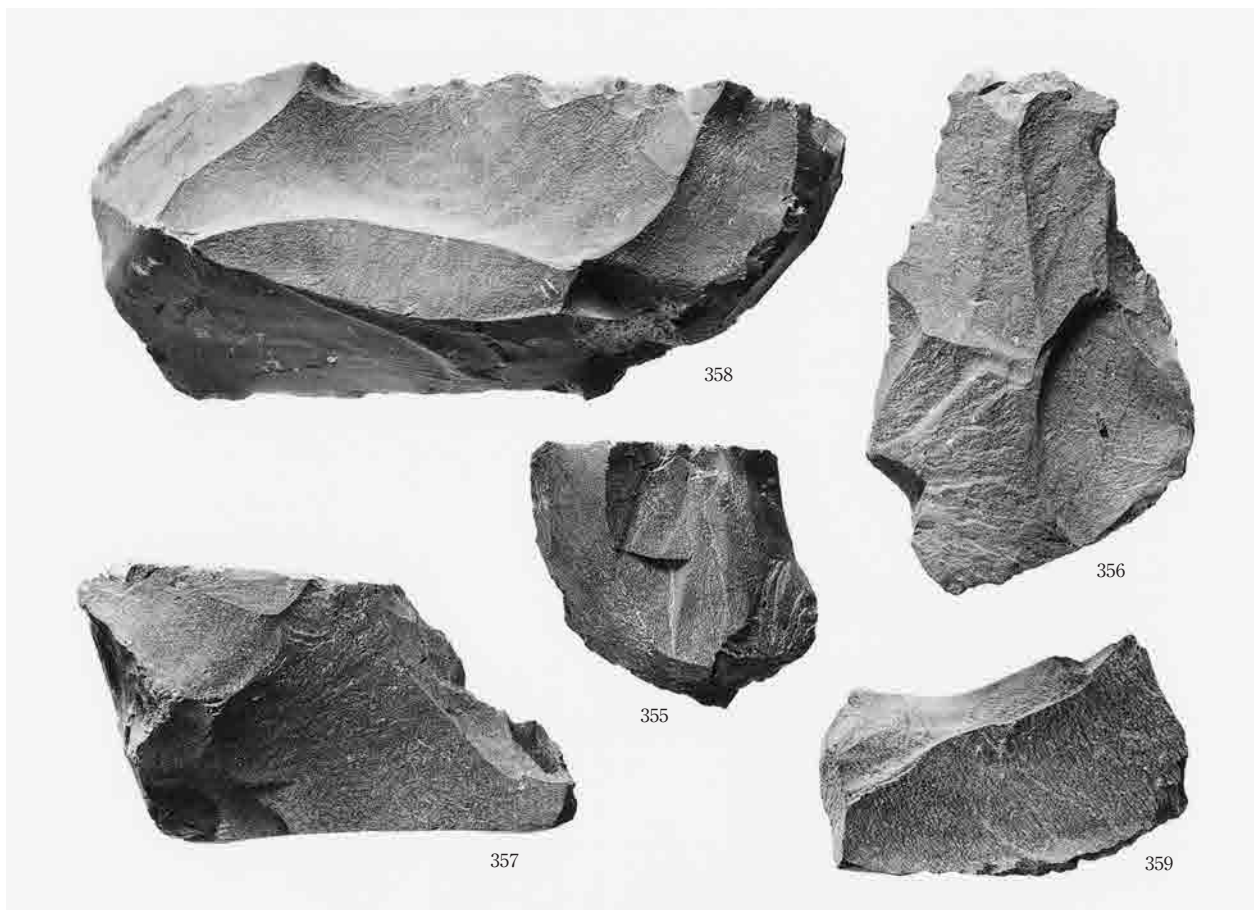
図版18 遺物



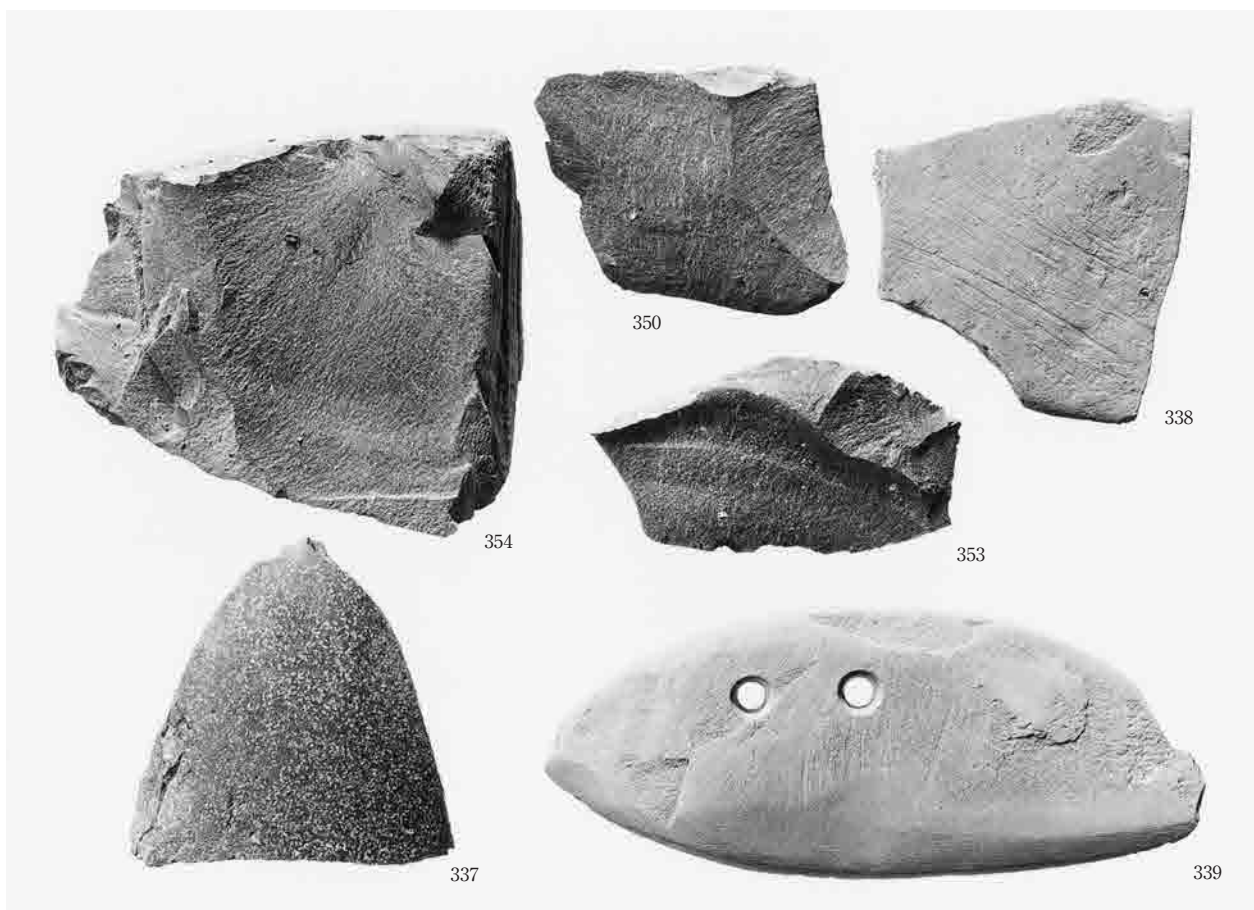
1 石器（石鏃、尖頭器、石錐未製品）



2 石器（石鎌形石器、削器、楔形石器、剥片）

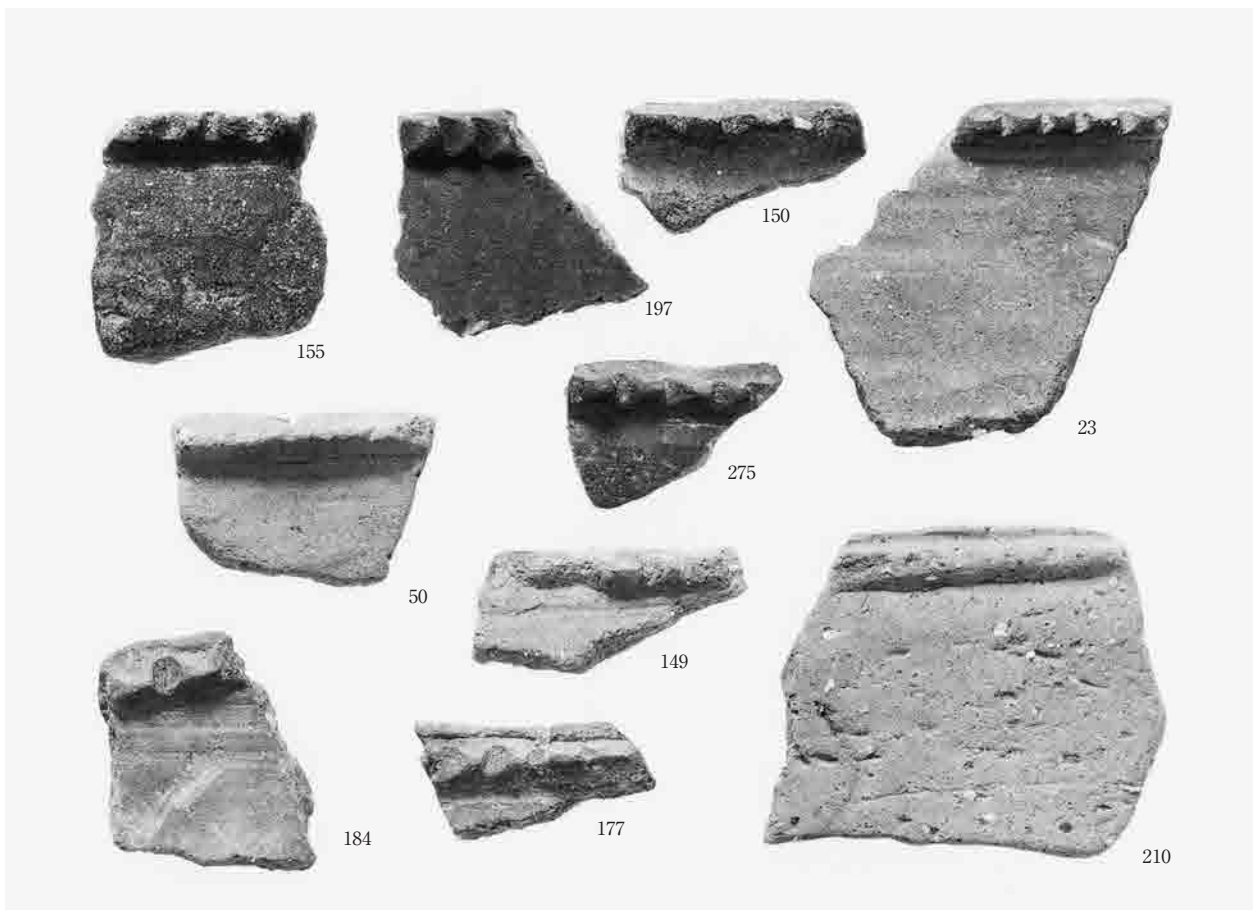


1 石器 (石核)

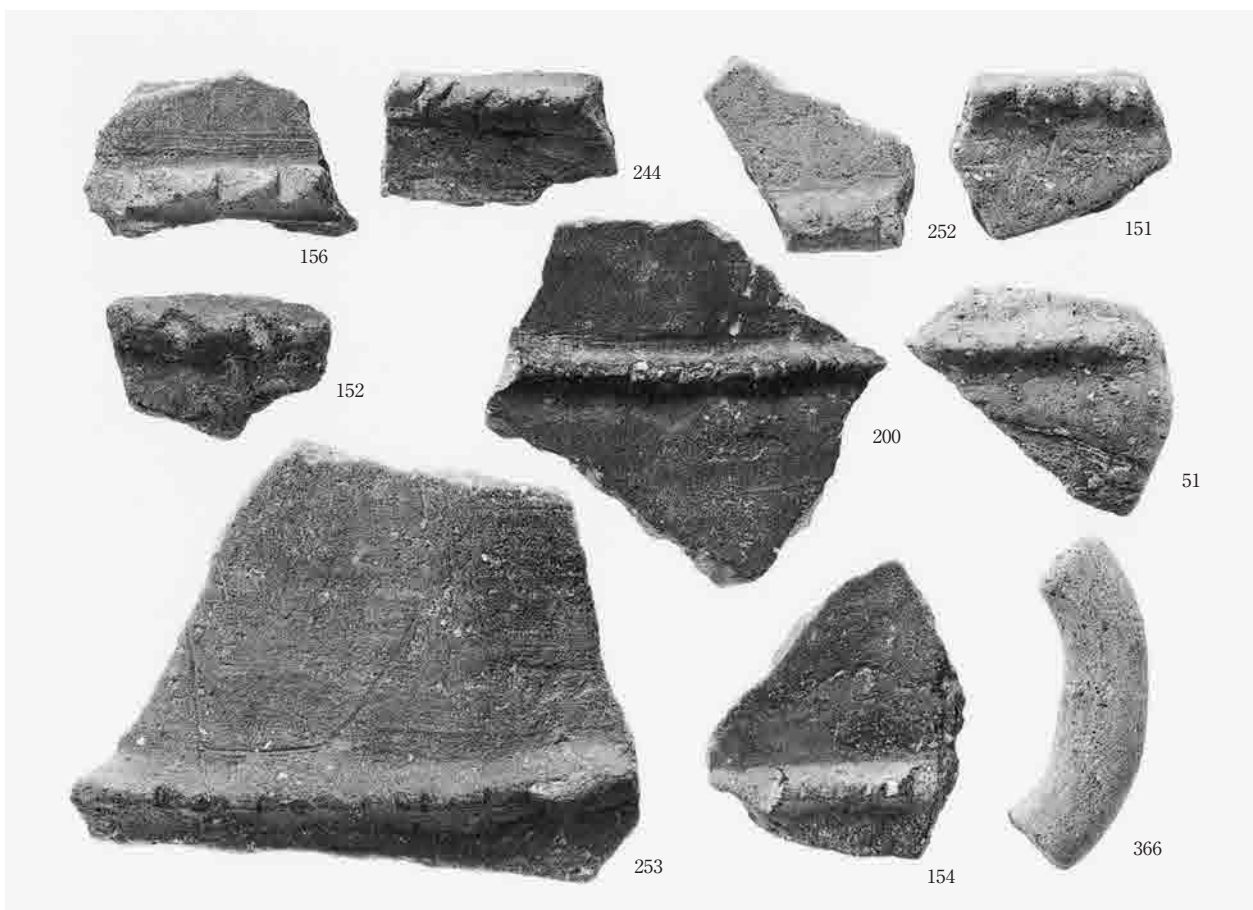


2 石器 (剥片、磨製石斧、石包丁)





1 縄文土器 (刻目突帯文土器口縁部)



2 縄文土器 (刻目突帯文土器体部)、輪状土製品 (366)

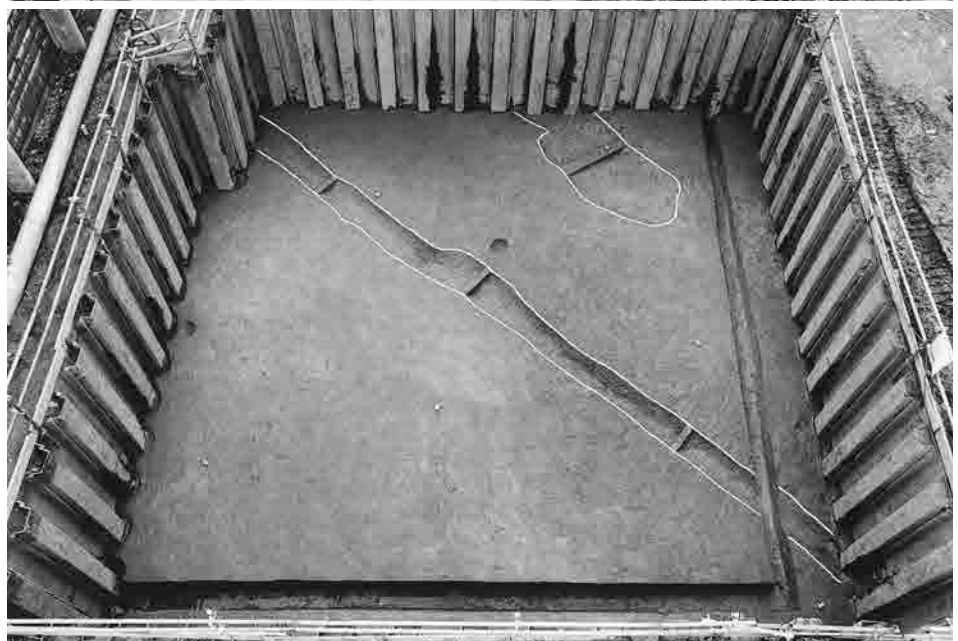
1 第1面 畦畔  
(北から)



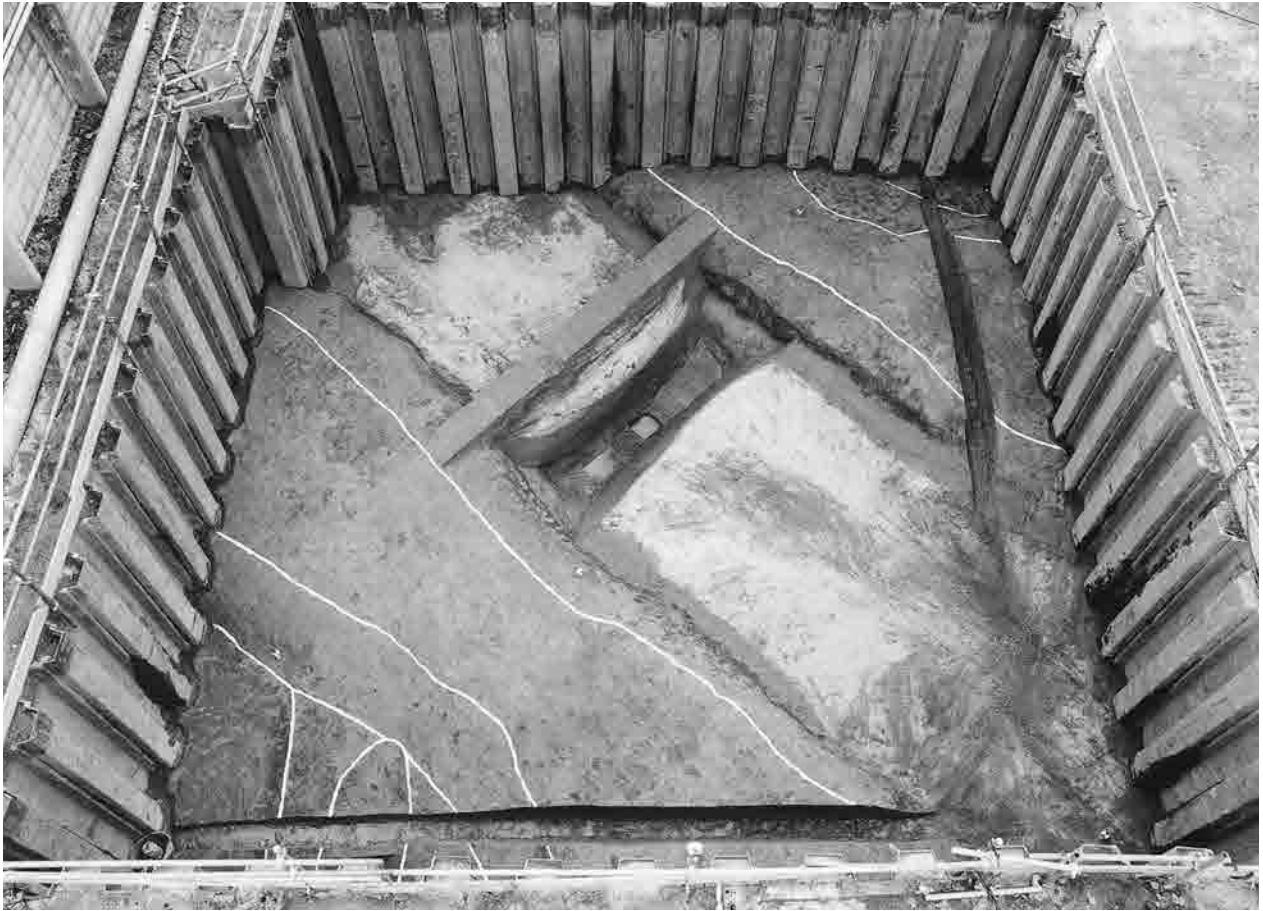
2 第4面 ピット群  
(北から)



3 第6面 15・16溝  
(北から)



図版22 05-1-2調査区



1 第7面 18大溝（北から）



2 18大溝 埋没状況（北西から）



1 第7面 植物遺体  
(西から)

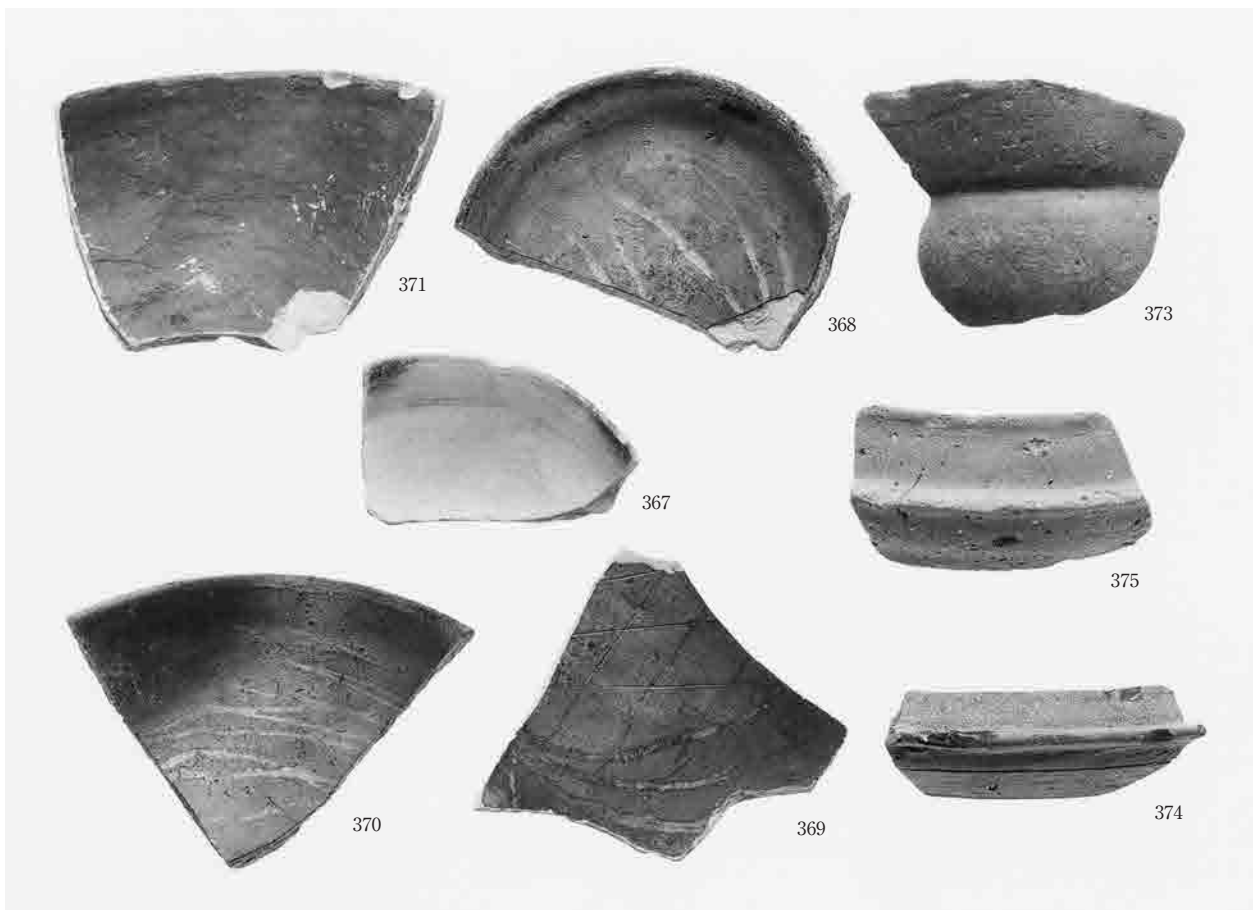


2 第7面 19溝と20畦畔  
(北から)

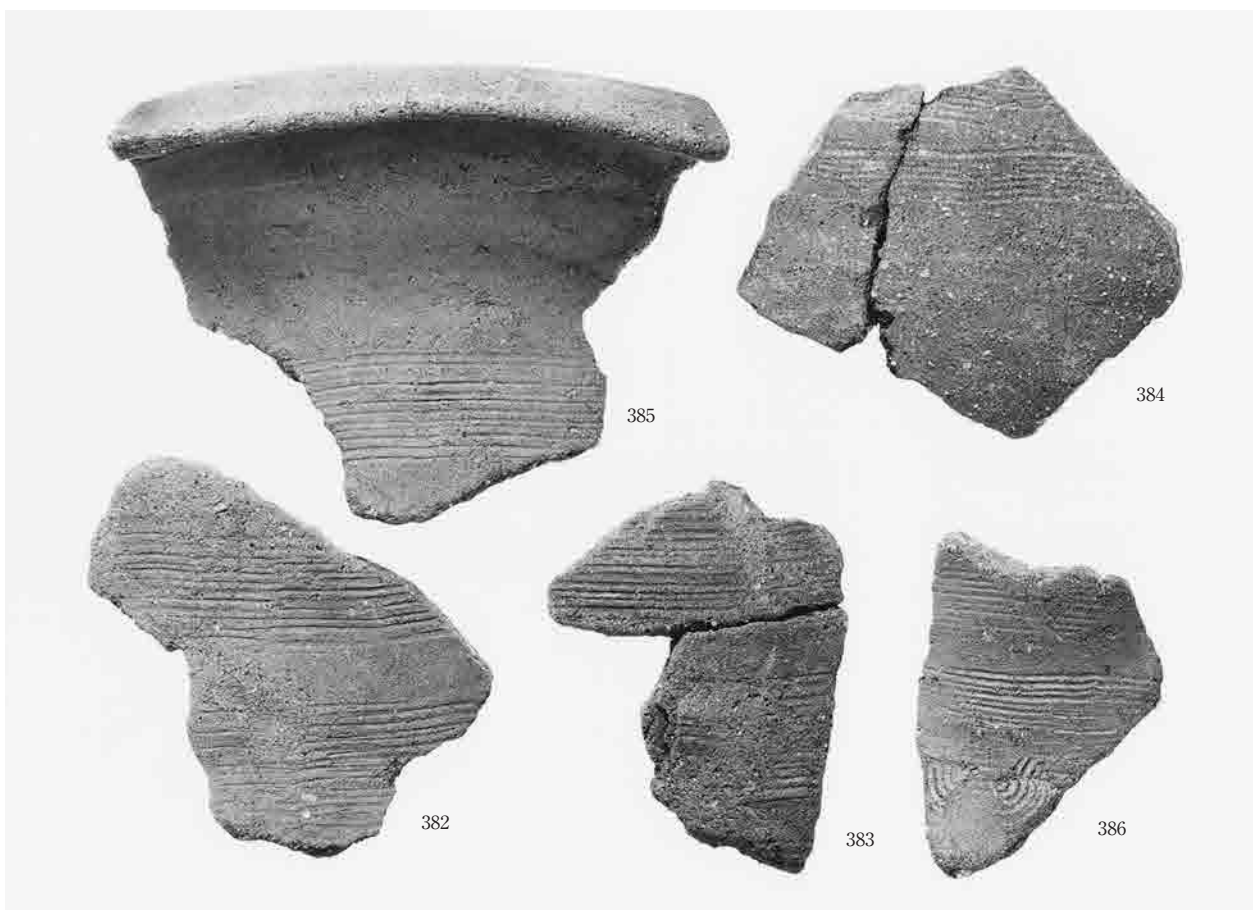


3 第8面 21溝と22畦畔  
(北から)

図版24 遺物



1 0層出土の土器（瓦器皿・椀、土師器小型壺、須恵器蓋坏）



2 5層・18大溝出土の弥生土器

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	たいなかいせき							
書名	田井中遺跡							
副書名	陸上自衛隊八尾駐屯地内警衛所及び浴場新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第150集							
編著者名	桑野一幸							
編集機関	(財)大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791							
発行年月日	2006年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふりがな たいなかいせき 田井中遺跡	ふりがな おおさかふ 大阪府 やおし 八尾市 くこう1ちょうめ 空港1丁目	27212	69	34度 35分 56秒	135度 36分 19秒	2005. 11. 29 ～ 2006. 2. 2	05-1-1区 286	陸上自衛隊 八尾駐屯地 施設整備工事
				34度 35分 54秒	135度 36分 34秒	2006. 2. 6 ～ 2006. 3. 20	05-1-2区 142	陸上自衛隊 八尾駐屯地 施設整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
田井中遺跡 (05-1-1調査区)	生産	中・近世	畦畔					
	生産	中世	土坑・溝	瓦器・土師質土器				
	生産	古代	土坑・溝	土師器・須恵器				
	集落	古墳時代	土坑・溝	土師器・須恵器・ミニ チュア土器・韓式系土器				
	集落	弥生時代前期	土器棺墓・土坑・ 溝	弥生土器・縄文土器・石 器・匙形土製品		弥生時代前期後・末葉主 体、土器棺は大形壺と鉢の セット、溝から完形土器出 土		
田井中遺跡 (05-1-2調査区)	生産	中世	畦畔	瓦器・陶器				
	生産	古代		土師器・須恵器・瓦器				
	生産	古墳時代	ピット・溝	土師器・須恵器				
	生産	弥生時代中期	大溝・畦畔・溝	弥生土器・石器		両側に堤あり		
	生産	弥生時代前期	畦畔・溝					
要 約	<p>調査区は田井中遺跡の南東部（05-1-1区）と南東端（05-1-2区）の2箇所 で、両者は約400m離れている。05-1-1調査区では6つの遺構面を確認し、最下層の 第6面では弥生時代前期後葉～末葉の遺物と土器棺墓1基・ピット・土坑・落ち込み・ 溝などの遺構を検出し、遺跡西部～南東部に展開した弥生時代前期前半の集落に引き続 き、前期後半の集落の様相の一端（墓域）を明らかにした。05-1-2調査区では水田 など生産域の様相を示す8つの遺構面を確認し、第7面では弥生時代前期末葉～中期の 水田と中期以降に掘削された南東-北西方向の大溝を検出した。大溝は両岸に堤を構築 しており、北方の志紀遺跡で検出されている溝群との繋がりが注目される。</p>							

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第150集

八尾市

## 田井中遺跡

陸上自衛隊八尾駐屯地内警衛所及び浴場新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2006年12月25日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター  
〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所  
〒537-0002 大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号

